



1994

下弥堂

—縄文前期初頭の集落遺跡調査—

長野県
御代田町教育委員会



塩野西遺跡群

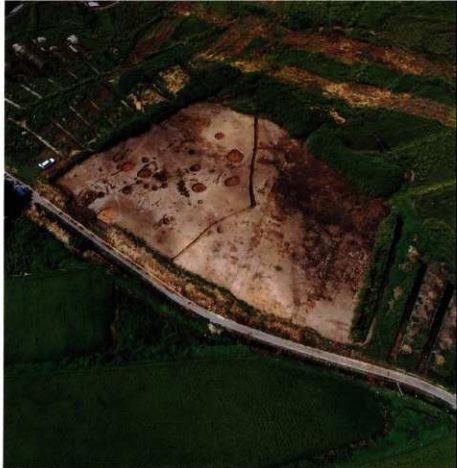
下弥堂遺跡

——長野県北佐久郡御代田町下弥堂遺跡発掘調査報告書——

1994

長野県御代田町教育委員会

下弥堂遺跡は、浅間山麓の標高八三〇mの尾根上に形成された縄文
前期初頭の単純集落で、竪穴住居14軒と土坑16基で構成される。
集落から出土した土器は尖底深鉢形土器で、従来の中道式に加え、
今回新たに型式設定のなされた「塚田式」と呼ばれるものがある。
石器類には、石鏃・石錐・石匙・打製石斧などがある。
写真上||上空より見た下弥堂遺跡 写真下||前期初頭の石器(2/3)



例 言

- 1 本書は、長野県北佐久郡御代田町所在の^{いまだら}下奈堂遺跡の発掘調査報告書である。
 - 2 本発掘調査は、佐久地方事務所の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。
 - 3 本発掘調査の概要については、第1章および巻末の抄録に記してある。
 - 4 本報告書作成の作業分担は以下のとおりである。
 - ◎ 遺物復原 伴野有希子、田村朋子、竹原久子
 - ◎ 遺物実測 鳥居 亮、賛田 明、下平博行、角張淳一、シン航空写真機。
 - ◎ 遺物拓本 伴野有希子、内堀久代、佐藤夫美子。
 - ◎ 遺物トレース 鳥居 亮（土器）、鳥居 亮、齋藤真理（石器）。
 - ◎ 遺構トレース 鳥居 亮。
 - ◎ 遺構写真 堤 隆、小山岳夫、鳥居 亮。
 - ◎ 遺物写真 鳥居 亮。
 - ◎ 遺物観察表作成 賛田 明、堤 隆。
 - ◎ 版組み 堤 隆、鳥居 亮、中込輝子。
 - 5 本書に使用した航空写真は、佛協同測量社が撮影したものである。
 - 6 本書の執筆分担については、目次に記してある。
 - 7 本書作成にあたっては、長野県埋蔵文化財センター賛田明氏・飯田市教育委員会下平博行氏、京都大学葦科哲男・東村武信両氏のご協力を得た。厚く御礼申し上げる次第である。
 - 8 本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに、堤隆、がおこなった。
 - 9 本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御意見を。厚く御礼申し上げます。 (順不同・敬称略)
- 児玉卓文、須藤隆司、小林真寿、柴田徹、山本薫、市沢英利、早田勉、辻本崇夫、近藤尚義、臼田武正、寺島俊郎、谷藤保彦、領塚正治、水沢教子、藤巻幸男、原雅信、石坂茂、高橋保、寺崎裕助、阿部芳郎、恩田勇、御堂高正、金子直行、大竹幸恵、大竹憲昭、小野和之、鈴木徳雄、山口逸弘、小松学、守矢昌文、渋谷昌彦、綿田弘実、小池幸夫、中沢道彦、関根慎二

凡 例

- 1 遺構の名称
J→ 竪穴住居址 D→ 土坑
P→ ビット群 M→ 溝状遺構
- 2 挿図の縮尺
竪穴住居・土坑=1:80、炉・集石土坑=1:40
溝状遺構=1:400
土器=1:4。石器=2:3、1:3
- 4 図版の縮尺
遺構写真の縮尺については統一されていない。
遺物写真の縮尺はつぎのとおりである。
土器=1:4、石器=1:2、1:3
- 5 遺構面積の計測にはプランメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。
- 6 出土遺物・表表(土器)の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、-は不明、()は推定値、< >は大幅な推定値を示す。単位はcm。
- 7 出土遺物一覧表(石器)の法量は、-は不明、()が現存値、()がない場合は完存値を表わす。単位は、cm・gである。
- 8 遺構の層序説明は本文中に記した。
- 9 土層の色調、遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
- 10 遺物は、全点の出土位置を記録したが、本文中には、図化した代表的な遺物のみの出土位置を示している。
- 11 挿図中のスクリーントーンは以下を表わす。
 - (1)遺構
遺構断面=斜線。
炉=網点(縦)
 - (2)遺物
土器断面 縄文含繊維=網点
土器内外面 赤色顔料付着=網点(細)
石器外面 石斧研磨面範囲=網点

目 次

I 発掘調査の概要

1 発掘調査の概要	堤 隆	1
(1) 調査に至る動機		1
(2) 発掘調査の概要		2
(3) 発掘区の設定と遺構の検出		3
(4) 発掘調査の経緯		4

II 遺跡の環境

1 遺跡の環境	堤 隆	5
(1) 自然環境		5
(2) 歴史的環境		5
(3) 層 序		8

III 遺構と遺物

1 縄文時代前期初頭の住居址	堤 隆	10
(1) J-1号住居址		10
(2) J-2号住居址		11
(3) J-3号住居址		20
(4) J-4号住居址		28
(5) J-5号住居址		32
(6) J-6号住居址		35
(7) J-7号住居址		37
(8) J-8号住居址		41
(9) J-9号住居址		42
(10) J-10号住居址		46
(11) J-11号住居址		47
(12) J-12号住居址		49
(13) J-13号住居址		52
(14) J-14号住居址		56
2 土 坑		78
3 ビット群		99
4 溝状遺構		99
5 遺構外出土遺物		100

IV 総 括

1 縄文前期初頭の石器について	堤 隆	103
(1) 縄文前期初頭の石器		103

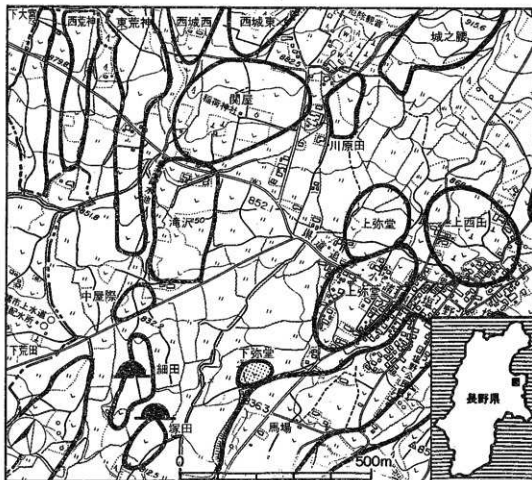
(2) 器 種		103
(3) 石器組成		106
(4) 小形剥片石器の製作について		108
2 石匙の使用痕観察	堤 隆	109
(1) 観察にあたって		109
(2) 観察結果について		110
(3) 石匙の機能について		112
3 石材利用をめぐる問題	堤 隆	113
(1) はじめに		113
(2) 器種と石材		113
(3) 集落に搬入された石材		113
(4) 石材原産地		114
(5) 石材利用をめぐる問題		116
4 前期初頭の土器群について	賢田 明	121
(1) はじめに		121
(2) 当該期をめぐる研究動向		121
(3) 下弥堂遺跡出土土器の分類		123
(4) 出土土器の検討		125
(5) 前期初頭土器群の変遷		128
(6) おわりに		133
5 縄文前期初頭の集落	堤 隆	136
(1) はじめに		136
(2) 下弥堂遺跡の竪穴住居		136
(3) 縄文前期初頭の住居構造		138
(4) 下弥堂の前期初頭集落の構造		140
(5) 居住パターンと生活領域		142
6 炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定報告		146
(1) はじめに	パリーノ・サーヴェイ	146
(2) 試 料		146
(3) 方 法		146
(4) 結 果		147
(5) 考 察		149
7 C ¹⁴ 年代の測定結果について	堤 隆	151
8 下弥堂遺跡出土石器の石材産地分析		152
(1) はじめに	葦科哲男・東村武信	152
(2) サヌカイト原石の分析		152
(3) 結果と考察		153

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る動機

長野県北佐久郡御代田町大字塩野・小諸市大字塩野・八幡・柏木にかかる一帯、北大井地区において、水田経営の合理化を目的とした県営土地改良総合整備事業が平成2年より実施された。

一方、この地区には周知の遺跡が群在化しており、その保護問題が表面化してきた。このため、その原因者である佐久地方事務所と、保護部局である長野県教育委員会、御代田町教育委員会の



第1図 下弥堂遺跡と周辺の遺跡 (1 : 10,000)

三者において話し合いがもたれ、該当する遺跡について緊急発掘調査を実施し、5ヵ年計画で記録保存をはかることとなった。

これを受け平成2年度にはその工区にかかる川原田遺跡と城之腰遺跡の発掘調査が実施された。翌平成3年度に調査が実施されたのが、木下弥堂遺跡と細田・塚田・下荒田の4遺跡である。

(2) 発掘調査の概要

- | | |
|--------|---|
| 1 遺跡名 | 下弥堂遺跡 |
| 2 所在地 | 長野県北佐久郡御代田町大字塩野字下弥堂 |
| 3 発掘期間 | 平成3年5月20日～平成3年7月24日（平成3年度） |
| 4 整理期間 | 平成3年7月25日～平成4年3月31日（平成3年度）
平成4年4月3日～平成5年3月31日（平成4年度）
平成5年4月2日～平成6年3月25日（平成5年度） |
| 5 発掘理由 | 平成3年度北大井地区県営土地改良総合整備事業に伴い、川原田遺跡の破壊が予想されたため、緊急発掘調査を実施し記録保存を行なった。 |
| 6 発掘方針 | 広大な調査対象区について、居住域・墓域等全体の検出に努める。 |
| 7 費用負担 | 調査費用総額のうち、農家負担分については文化財補助事業として文化財保護部局が負担し（国庫補助金50%、県補助金15%、町費35%）、残りの額については原因者である農政部局（佐久地方事務所）が負担した。 |
| 8 事務局 | 教育次長 山本岩正・藤巻興樹 社会同和教育係長 古越恵美夫・内堀篤志
社会・同和教育係 堤 隆、小山岳夫 |
| 9 調査団 | |
| 顧問 | 柳沢 薫（御代田町長） |
| 参 与 | 内山俊雄、小林太郎、桜井為吉、田村泉、柳沢文人、小林五郎、大井源寿
萩原弘祐（御代田町文化財審議委員） |
| 団 長 | 土屋秀憲（御代田町教育長） |
| 担 当 者 | 堤 隆・小山岳夫（御代田町教育委員会） |
| 調 査 員 | 鳥居 亮（主任）、吉井雅勇、下平博行、齋田明、水沢教子、角張淳一 |
| 補 助 員 | 伴野有希子、小山内玲子、竹原久子、森川宗治、高地正雄 |
| 協 力 者 | 大井けさみ、尾沼けさと、山本まさる、飯田すえの、内堀ときい、
日向万平、日向愛子、甘利隆志、古川まち子、小林満子、古越邦和、茂木秀雄、
掛川孝子、萩原正子、内堀久代、佐藤夫美子、内堀美保子、田村朗子 |

(3) 発掘区の設定と遺構の検出

本調査の発掘区については第2図に示したとおりで、4053㎡を測る。

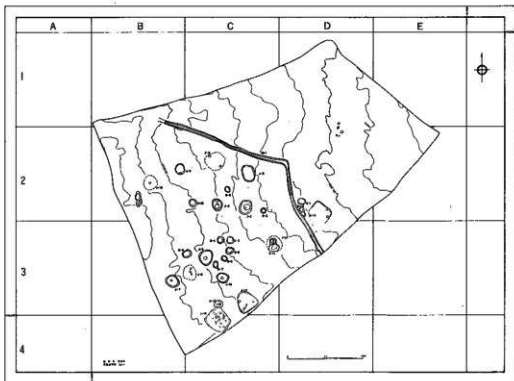
この発掘区については、国家座標第Ⅶ系を用い、25m四方のグリッドを設定し、北から南に向かって1・2・3～、西から東に向かってA・B・C～と名称を付した。

調査は、調査対象区についてはまずは自然地形と遺跡の範囲をみきわめるため、重機により東西・南北に試掘トレンチを入れてみた。その結果およびその自然地形と遺跡の範囲をとらえることができたので、つぎに遺跡全部分の表土を重機によって除去した。

調査地区から検出された遺構は第1表のとおりである。

第1表 下弥堂遺跡の検出遺構数

遺構 時期	竪穴 住居 址	土 坑	溝 状 遺 構	ピ ット 群	計
縄文前期	14	16	0	0	30
中世	0	0	1	0	1
不明	0	0	0	1	1
計	14	16	1	1	32



第2図 下弥堂遺跡全体図 (1:1,000)

(4) 発掘調査の経緯

平成3年度

5月20日

発掘調査準備開始

6月11日

プラン確認開始

6月17日

M-1号溝状遺構調査

6月21日

縄文時代前期の住居と土坑の調査開始

6月26日

ラジコンヘリによる遺構の写真実測

7月10日

縄文時代前期の住居の掘り方調査

7月21日

遺構調査完了

7月22日

航空写真撮影のための遺跡内清掃

7月24日

航空写真撮影

発掘調査終了

平成4年度

平成4年4月～平成5年3月

遺物整理

平成5年度

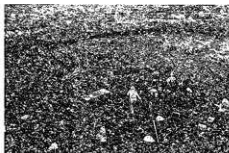
平成5年4月～平成6年3月

遺物整理

平成5年12月～平成6年3月

原稿作成

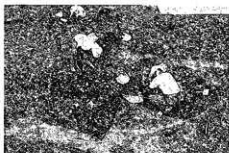
報告書刊行



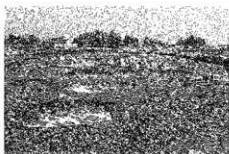
第3図 調査風景



第4図 D-4号土坑の調査



第5図 J-2号住居調査風景



第6図 掘り上がった住居址

II 遺跡の環境

(1) 自然環境

下弥堂遺跡は、東経138度29分30秒・北緯36度19分44秒に位置しており、標高829～833mを測る。遺跡が立地するのは、浅間山南麓の細い尾根の舌状部である。

活火山浅間山は標高2,560mをはかり、コニーデ型の裾野や三重式噴火口をみせている。浅間火山は、およそ数万年前から成長した若い火山で、その変遷は、古い順から黒斑山期(数万年前)・仏岩期(1万5千年前頃)・軽石流期(1万4千年前～1万1千年前頃)・前掛山期(数千年前)とされている。ことに、前掛山期における天仁元年(1108年)及び天明3年(1783年)の噴火は、現在の雲仙普賢岳の三倍以上の火山地積物を噴出しており、「中右記」など歴史時代の記録に残る大噴火である。

浅間山南麓地域の基盤層は、その火山噴出物により構成される。本遺跡の基盤層は主として軽石流期のうち、第2軽石流による堆積物からなっている。また、天仁元年の噴火によると推定される追分火砕流堆積物は、本遺跡から約1km以東の御代田町・軽井沢地域を覆っている。

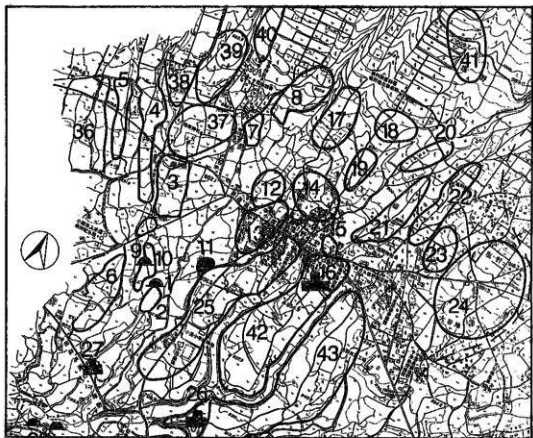
さて、本遺跡の位置する標高800～900m地帯は、浅間山麓の第一伏流水が、地表の各所に湧出する地帯である。本遺跡の北西、真乗寺の「大沼の池」をたたえる豊富な湧水を始め、本遺跡の東方の湧玉の湧水など随所に湧水がみられ、往時の集落形成のための要件となっている。さらにその湧水や、河川の流下は、山麓末端部の軽石流堆積物を刻んで、当地方特有ないわゆる「田切り地形」を発達させている。

この地域の原植生は、コナラやクヌギなどの落葉広葉樹を主とするものであり、これにアカマツ、クリ、などが点在している。縄文時代も落葉広葉樹を主とするいわゆる雑木林的な景観を想定することができようか。

(2) 歴史的環境

浅間山南麓の標高800～900m地帯には、豊富な湧水や動植物などの自然環境を背景に、縄文時代を中心として、弥生期末～古墳初頭、奈良平安時代にかけての、数多くの遺跡が分布している(第7図)。ここでは特に、下弥堂遺跡にかかわる縄文時代の歴史的環境をみてみよう。

縄文時代の草創期の遺物は、川原田遺跡(第7図7)から「有茎尖頭器」が単独で出土して



第7図 周辺遺跡分布図 (1 : 20,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	種別				備考	No.	遺跡名	所在地	種別				備考
			墳墓	古墳	土器	瓦					瓦	瓦	瓦	瓦	
1	塚	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○	○			2016年度発掘調査	16	西側土	現代朝鮮大学臨時学舎跡北	○			2016年度発掘調査	
2	塚	現代朝鮮大学臨時学舎跡					2016年度発掘調査	17	上層部	現代朝鮮大学臨時学舎跡南	○				
3	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○	○			2016 - 2018年度発掘調査	18	瓦二丁	現代朝鮮大学臨時学舎跡二丁	○			2016年度発掘調査	
4	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○	○			2016年度発掘調査	23	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡西	○				
5	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○	○			2016年度発掘調査	24	瓦五	現代朝鮮大学臨時学舎跡五	○			2016 - 2018年度発掘調査	
6	下層部	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○	○			2016年度発掘調査	25	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				
7	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○	○			2016年度発掘調査	26	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				
8	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○	○			2016年度発掘調査	27	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				
9	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○	○			2016 - 2018年度発掘調査	28	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				
10	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○	○			2016年度発掘調査	29	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○			2016年度発掘調査	
11	下層部	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				2016年度発掘調査	30	下層部	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○			2016年度発掘調査	
12	下層部	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○					37	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○			2016年度発掘調査	
13	上層部	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○					38	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○			2016年度発掘調査	
14	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○					39	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				
15	下層部	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○					40	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○			2016年度発掘調査	
16	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡			○			41	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				
17	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○					42	下層部	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				
18	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				2016年度発掘調査	43	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○				
19	瓦	現代朝鮮大学臨時学舎跡	○												

り、御代田町においては最も古い時期のものとして位置付けられる。

縄文時代の早期の遺跡は、塚田（2）・滝沢（3）・城之腰（8）・下荒田（6）の各遺跡がある。このうち早期前半の遺物としては、塚田遺跡からは山型文・楕円文・格子目文の押型文土器が、滝沢遺跡や城之腰遺跡からも楕円押型文土器の破片が出土している。また、縄文早期後半では、塚田遺跡からいくつかの土坑が検出されており、完形復元可能な尖底土器が数個体認められた。このうちほぼ完全に復原された鶉ヶ島台式土器は、県内でも数少ない優品である。このほか田戸上層式土器や、結条体瓦痕文土器の破片が出土した。

縄文時代前期初頭の尖底深鉢形土器を出土したのが本下弥堂遺跡（11）で、竪穴住居址14軒と土坑16基からなる集落である。また、塚田遺跡でもこの時期の集落から多量の尖底深鉢形土器が出土した。現在注目を浴びつつある当該期の住居・土器資料とともにそれらがまとまった「集落」というかたちで検出されたことは重要である。加えてこれらの土器群は、従来のいわゆる「中道式」土器の型式学的な位置付けについて再検討を加えることとなった。

縄文時代の前期中葉の遺跡としては、城之腰遺跡と塚田遺跡がある。城之腰遺跡においては、関山式と神ノ木式土器を含む竪穴住居址が5軒検出されている。同型式を伴う集落は、本遺跡に隣接する塚田遺跡においても検出された。塚田遺跡は、当該期の竪穴住居址の10数軒を始め数多くの土坑より構成されており、城之腰遺跡と並んで縄文前期中葉神ノ木期の良好な資料を提示するに至った。

縄文時代中期の集落は、川原田遺跡で竪穴住居址46軒が検出されている。舌状台地上に形成された集落からは、いわゆる「焼町土器」と言われる土器が出土した。「焼町土器」は、長野・群馬を中心に近年俄に注目を浴びている土器であるが、川原田遺跡から出土した「焼町土器」はこれまでのものを質量ともにはるかに上回り、最も充実した資料となった。その不明な実態についての型式学的な検討が期待されるところである。このほか、中期の集落は、城之腰遺跡で4軒の住居が検出されている。また、滝沢遺跡（3）では中期後半の敷石住居3軒が調査された。なお、西駒込遺跡（20）の中期の住居からは、東北地方に分布する大木8b式に比定される土器が出土しており興味深い。

縄文時代後期では、滝沢遺跡から、滑石のペンダントを出土した焼骨のみられる土坑、耳形土製品を出土した立石風の石を伴う土坑など、墳墓群が検出された。また、同時期の住居も検出されている。

なお、縄文時代晩期の資料は、本遺跡西南の小諸市石神遺跡で出土している。

以上、下弥堂遺跡をとりまく縄文時代の歴史的環境について、概略的にふれてみた。

(3) 層 序

下弥堂遺跡の基本層序については、第8図に示した。以下にその基本層序を説明する。

I層 耕作土層

黒褐色 (10YR3/2) を呈し、粒子細かくてやや粘性あり。層厚20cm前後。

II層 黒色土層

黒色 (10YR1.7/1)。細粒バミスを含む遺構覆土。

III層 黒色土層

黒色 (10YR2/1)。細粒バミスを含む。層厚20cm前後。遺構の構築面

IV層 漸移層

にぶい黄褐色 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含み始める。細粒バミスをよく含む。

V層 ローム層

褐色 (10YR4/6)。細粒バミスをよく含む。

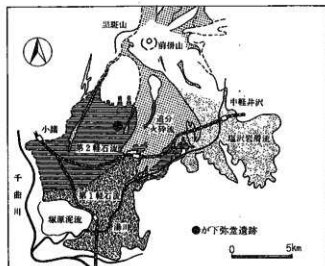
VI層 浅間山軽石流期の第2軽石流堆積物 (約1万1千年前)。

灰黄褐色 (10YR6/2)。

径15~30mm前後の軽石を主体的に含み、わずかに拳大の軽石を多く含む。

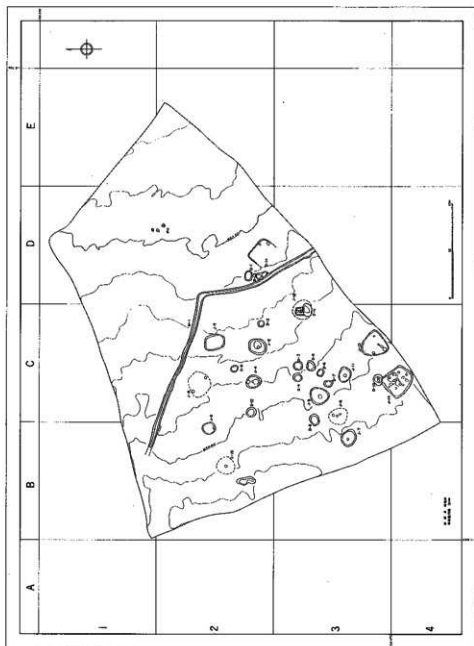


第8図 基本層序



第9図 追分火砕流・軽石流の分布概念図

III 遺構と遺物



第10図 下野豊浦跡全体図 (1:800)

Ⅰ 縄文時代前期初頭の住居址

(1) J-1号住居址

住居址 第11図

本址はD-2グリッドにおいて検出された。そのプランは、西側を失うが隅丸方形を呈するものと考えられる。南北5.5m東西の残存部分は3mで、現存床面積は14.4㎡を測る。推定される大きさは南北5.5m東西4mで、床面積は22㎡である。南北軸の方位はN-42-Wを指す。残存壁高は5cm程度である。壁溝は確認されていない。ピットは2基が検出された。P₁は55×40×深さ10cm、P₂が25×25×深さ10cmを測る。炉は精査にもかかわらず確認することができなかった。

遺物 第12図

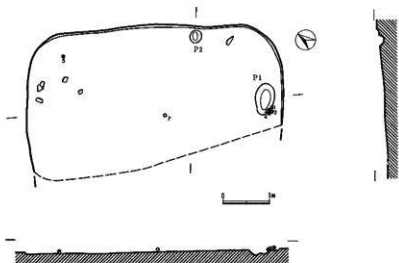
遺物は9点が出土している。うち土器の拓影6点を図示したが、いずれも縄文土器の小破片である。

1は、4単位の波状口縁をなす深鉢形土器の口縁部で、口唇に沿って隆帯のめぐり、波頂部から隆帯が垂下するものである。2-5はRLもしくはLRの縄文が施された深鉢形土器胴部破片、6は燃糸文の施された深鉢形土器胴部破片である。

石器は、図示しえたものは、7の硬質頁岩の扁平な残核にとどまった。

時期

本址は、1-6の土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。



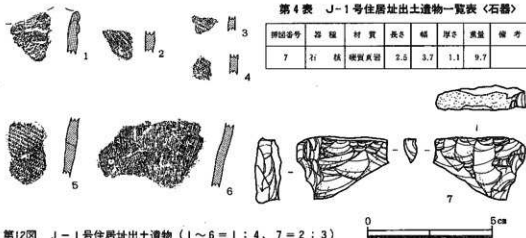
第11図 J-1号住居址実測図(1:80)

第3表 J-1号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

器種	部位	法量	形状および文様	陶土	胎土	色調		組成	出土	備考
						外面	内面			
1	注外	口縁	4単位の高取口縁。口縁部に沿って横溝が走る。底辺部より横溝が薄く7丁部までには横溝太(1.2cm×1)	横ナデ	白色灰陶	有	12.26(黄褐色) 10YR5/3	褐色 10YR2/1	表	J-1
2	注外	胴部	—	不明	白色灰陶 風化灰片	有	明褐色 7.5YR5/6	褐色 7.5YR2/6	表	J-1
3	注外	胴部	—	不明	白色灰陶 風化灰片	有	明褐色 7.5YR5/6	褐色 7.5YR2/6	表	J-1
4	注外	胴部	—	横ナデ	白色灰陶 風化灰片	有	明褐色 7.5YR5/6	褐色 7.5YR2/6	表	J-1
5	注外	胴部	—	横ナデ	白色灰陶 風化灰片	有	明褐色 7.5YR4/4	褐色 7.5YR2/1	表	J-1
6	注外	胴部	—	横ナデ	白色灰陶 風化灰片 赤土	有	明褐色 5YR5/6	褐色 5YR2/6	表	J-1

第4表 J-1号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

出土番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
7	石槌	硬質頁岩	2.8	3.7	1.1	9.7	



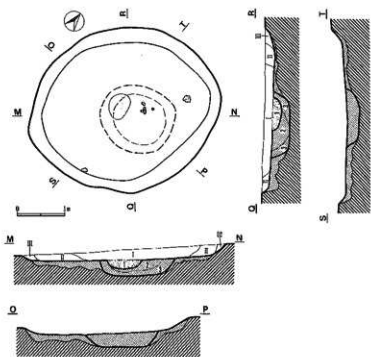
第12図 J-1号住居址出土遺物(1~6=1:4、7=2:3)

(2) J-2号住居址

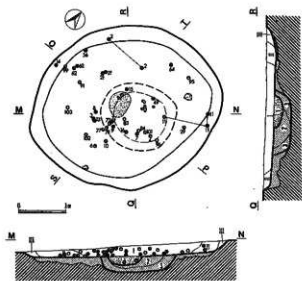
住居址 第13・14図

本址はC-2グリッドにおいて検出された。プランは東西3.5m南北4.2mの不整楕円形を呈する。床面積は7.8㎡を測り、南北軸方向はN-35°-Eを指す。壁は、残存高10~20cm程を測り、壁溝は認められない。覆土は3層に分層された。I層は黒褐色土層(10YR3/2)で径2~5mm前後のパミスをわずかに含み、II層は暗褐色土層(10YR3/4)で径2~5mm前後のパミスを含み、III層はローム粒子を多く含んだにぶい黄褐色土層(10YR5/4)であった。

住居中央には50×40×深さ20cmの地焼炉が認められた。炉の覆土は黒色土の混じる焼土(1層にぶい橙色5YR7/4)である。また、炉の掘り込みに伴うと考えられる床下土坑1基が検出された。土坑は160×140×深さ40cmの楕円形で、覆土は2層が径2mmほどのパミスを含む黒褐色土層(10YR2/2)、3層がローム粒子を含む橙色土層(10YR6/6)であった。ピットは検出されない。



第13图 J-2号住居址实测图(1:80)

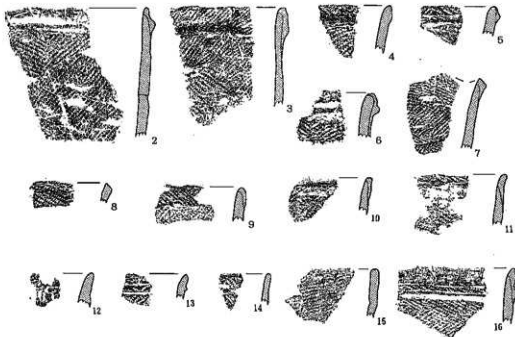
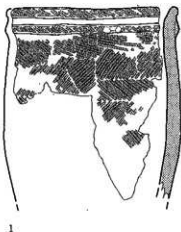


第14图 J-2号住居址遗物分布图

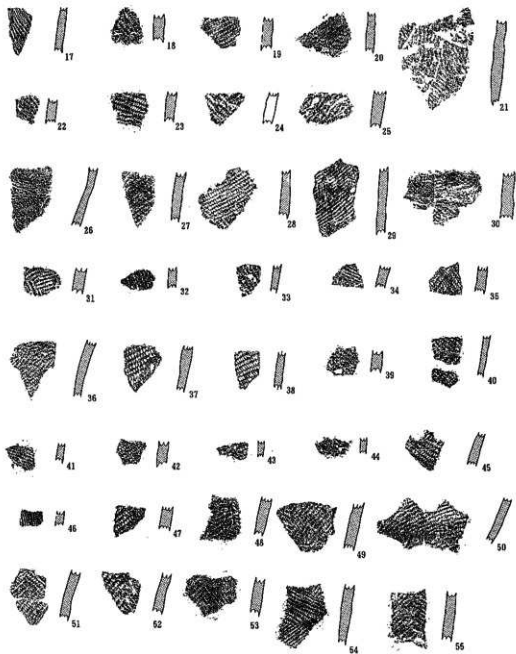
遺物 第15～19図

土器は実測図1点・拓影は81点を図示した。いずれも含纖維の尖底深鉢形土器の破片と考えられる。1は平縁で、口縁部に沿って隆帯を巡し、胴部に縄文(LR・RL)を羽状に施す土器である。

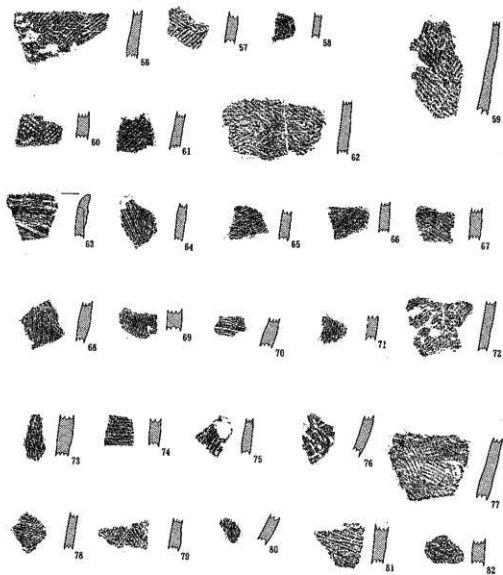
2～62は縄文を施文する土器である。2～16は口縁部で、口唇部に沿って隆帯を巡すもの(2～5・10・12・13)・肥厚するもの(6～9・16)等が見られる。2は口唇部下に若干の無文部を残して隆帯を巡す。3は口唇部に沿って隆帯を巡すが、それに直結する垂下隆帯が貼付され、逆T字状を成している。4・12・13は低い隆帯が施され、12には縦位の刻みを、13には鋸歯状の刻みが加えられている。6は肥厚部に、太目の縄文原体によると思われる圧痕を施す。圧痕部が不鮮明で、詳細は不明である。16は、肥厚部に3条の沈線を施すもので、上2本と下1本とで太さが異なっている。7も肥厚口縁だが、6・8・9・16と異なり肥厚部が三角形状を呈している。



第15図 J-2号住居址出土遺物(1:4)



第16图 J-2号住居址出土遗物(1:4)



第17图 J-2号住居址出土遗物(1:4)

第5表 J-2号住居址出土遺物一覧表(土器)

調査 番号	発掘 時期	部位	数量	観察および寸法	質 地 (内装)	形 式	用途	色 調		焼成	土 質	備 考
								外 装	内 装			
1	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部に沿って隆起を呈す 浅黄褐色文 網罟文 L.R.による用 意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 10YR5/5	内装 10YR4/1	特	J-2		
2	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部に沿って隆起を呈す 浅黄褐色文 網罟文 L.R.による用 意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR5/5	内装 10YR4/1	特	J-2		
3	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部に沿って隆起を呈す。また隆 起を呈す。また、網文 L.R.による用 意模様 (浅黄褐色による)	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR5/5	内装 10YR3/1	特	J-2		
4	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部に沿って隆起を呈す 浅黄褐色文 L.R.、直下に L.R.	不明	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
5	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部に沿って隆起を呈す 浅黄褐色文 L.R.、直下に網文 L.R.?	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
6	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 肥厚部に網文 L.R.に上 る用意模様 網罟文 L.R.による用 意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
7	昭和14年	11棟	1	4單位の遺跡(11棟) 11棟(肥厚部) (肥厚部が三身形) 11棟(一部) 網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 5YR5/5	内装 10YR3/1	特	J-2		
8	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 77棟-網文 L.R.	不明	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
9	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R. 網罟文 L.R.	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 10YR3/1	特	J-2		
10	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 10YR3/1	特	J-2		
11	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 10YR3/1	内装 10YR4/2	特	J-2		
12	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 10YR3/1	特	J-2		
13	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 10YR3/1	特	J-2		
14	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 10YR3/1	特	J-2		
15	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 10YR4/2	特	J-2		
16	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
17	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
18	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
19	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
20	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
21	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
22	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
23	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
24	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
25	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
26	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
27	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
28	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
29	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
30	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
31	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
32	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
33	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		
34	昭和14年	11棟	1	平縁 口縁部肥厚 口縁部網文 L.R.による用意模様	黄褐色 風化石灰片	有	外装 7.5YR3/3	内装 7.5YR2/1	特	J-2		

第6表 J-2号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

発掘 番号	部 位	形状	用途	標形および文様	調査 (時期)	出 土	特徴	色 調		焼成	出 土 位置	備 考
								外 周	内 面			
35	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	明褐色 10YR3/6	暗褐色 7.5YR4/1	特	J-2	
36	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	明褐色 10YR3/6	暗褐色 7.5YR4/1	良	J-2	
37	床 土	割縁	---	縄文期-LR	不明	白色磁胎 風化切片	有	明褐色 10YR3/6	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
38	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ	白色磁胎 織状痕跡	有	暗褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	特	J-2	
39	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	特	J-2	
40	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	褐色 10YR1.7/1	黒色 10YR3/1	特	J-2	
41	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	に25~褐色 7.5YR5/4	明褐色 7.5YR5/6	特	J-2	
42	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	特	J-2	
43	床 土	割縁	---	縄文期-LRか? (不明)	不明	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/2	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
44	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 7.5YR5/4	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
45	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ及び 底縁の割縁	白色磁胎 風化切片	有	に25~褐色 10YR3/4	に25~暗褐色 10YR3/4	特	J-2	
46	床 土	割縁	---	縄文期-LR	不明	白色磁胎 風化切片	有	に25~褐色 10YR3/4	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
47	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/6	暗褐色 7.5YR3/1	特	J-2	
48	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	に25~褐色 7.5YR5/4	明褐色 7.5YR5/6	特	J-2	
49	床 土	割縁	---	縄文期-LRか?	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/6	暗褐色 7.5YR3/1	特	J-2	
50	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ又は 片縁の割縁	白色磁胎 風化切片	有	明褐色 10YR3/6	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
51	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテか?	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	特	J-2	
52	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成か?	不明	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/1	暗褐色 10YR3/2	特	J-2	
53	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	不明	白色磁胎 風化切片	有	明褐色 10YR3/6	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
54	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/4	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
55	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/4	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
56	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	明褐色 10YR3/6	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	J-7と類似
57	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	明褐色 10YR3/6	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
58	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテ又は 片縁の割縁	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/6	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
59	床 土	割縁	---	縄文期-LR	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/6	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
60	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	不明	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/6	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
61	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	明褐色 10YR3/6	に25~暗褐色 10YR3/4	特	J-2	
62	床 土	割縁	---	縄文期-LRによる羽状模成	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
63	床 土	口縁	---	平縁 口縁部に沿って隆起する浅平 浅帯上縁に R-L の線み合わせによる線み	不明	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/3	特	J-2	
64	床 土	割縁	---	R-L の線み合わせによる縄文文	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 10YR3/3	褐色 10YR2/1	特	J-2	
65	床 土	割縁	---	R-L の線み合わせによる縄文文	不明	白色磁胎 風化切片	有	暗褐色 7.5YR5/6	明褐色 5YR5/4	特	J-2	
66	床 土	割縁	---	R-L の線み合わせによる縄文文	不明	白色磁胎 風化切片	有	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 10YR3/1	特	J-2	
67	床 土	割縁	---	R-L の線み合わせによる縄文文	不明	白色磁胎 風化切片	有	に25~褐色 7.5YR5/4	明褐色 7.5YR5/6	特	J-2	
68	床 土	割縁	---	R-L の線み合わせによる縄文文	縄ナテ	白色磁胎 風化切片	有	に25~褐色 7.5YR5/4	に25~暗褐色 7.5YR5/4	特	J-2	

第7表 J-2号住居址出土遺物一覧表(土器)

器名 番号	種別	部位	技法	彫刻および文様	調製 (内装)	胎土	焼成	色 澤		焼成 温度	出 土 層	備 考
								外 面	内 面			
68	陶片	胴部	---	裏としの組み合わせによる燃糸文	ナテ	白色胎物 風化岩片	有	にんい黄褐色 10YR2/4	黒色 10YR2/1	推	J-1	
70	陶片	胴部	---	燃糸文	ナテ	白色胎物 風化岩片	有	にんい黄褐色 10YR2/2	黒色 10YR2/1	推	J-2	
71	陶片	胴部	---	裏としの組み合わせによる燃糸文	ナテ	白色胎物 風化岩片	有	にんい黄褐色 10YR2/4	黒色 10YR2/4	推	J-1	
72	陶片	胴部	---	0段Lによる燃糸文	不明	白色胎物 風化岩片	有	明褐色 5YR5/6	黒色 10YR2/1	推	J-2	
73	陶片	胴部	---	裏と本による燃糸文	不明	白色胎物 風化岩片	有	にんい黄褐色 10YR2/4	黒色 10YR2/1	推	J-2	
74	陶片	胴部	---	裏と本による燃糸文	ナテ	白色胎物 風化岩片	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 5YR5/6	推	J-2	
75	陶片	胴部	---	Lの燃糸文	不明	白色胎物 風化岩片	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 5YR5/6	推	J-2	同一層の可 能性 有
76	陶片	胴部	---	Lの燃糸文? (不明)	不明	白色胎物 風化岩片	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 5YR5/6	推	J-2	
77	陶片	胴部	---	裏とL本の組み合わせによる燃糸文	ナテ	白色胎物 風化岩片	有	明褐色 7.5YR5/6	黒色 10YR2/1	推	J-1	
78	陶片	胴部	---	裏の燃糸文	ナテ	白色胎物 風化岩片	有	黄褐色 10YR2/2	黒色 10YR2/1	推	J-1	
79	陶片	胴部	---	裏とL本の組み合わせによる燃糸文	彫刻部の調整 不明又はナテ	白色胎物 風化岩片	有	にんい黄褐色 10YR2/4	黒色 10YR2/1	推	J-2	
80	陶片	胴部	---	裏とL本の組み合わせによる燃糸文	ナテ又は横 溝状の調整	白色胎物 風化岩片	有	にんい黄褐色 10YR2/4	黒色 10YR2/1	推	J-2	
81	陶片	胴部	---	Lの燃糸文	ナテ	白色胎物 風化岩片	有	にんい黄褐色 10YR2/4	黒色 10YR2/1	推	J-2	同一層の可 能性 有
82	陶片	胴部	---	燃文	ナテ	白色胎物 風化岩片	有	にんい黄褐色 10YR2/4	黒褐色 10YR3/1	推	J-2	

17~62は胴部の破片で、斜縄文や羽状構成・菱形構成を成すものが見られる。21は、上半分の糸が縦に走っており、下半分と合わせて縦長の菱形構成になるかもしれない。原体は縄文RLで、施文方向を変えている。56も縦に長い菱形を構成する可能性があるが、縄文RLとLRによるものである。

63~81は燃糸文を施文する土器である。63は口縁部で、低く太い隆帯を巡す。口唇部~隆帯間には、R・L2本を組み合わせた矢羽状の燃糸文が施文されている。

64~69は胴部で、RとLを組み合わせた燃糸文(64~66・68・69・71・77・80)、L2本を組み合わせたもの(67)、R2本を組み合わせたもの(73・74)、LまたはRの燃糸文(70・75・76・78・81)等が施文される。72は0段Lによる燃糸文を施していると思われる。

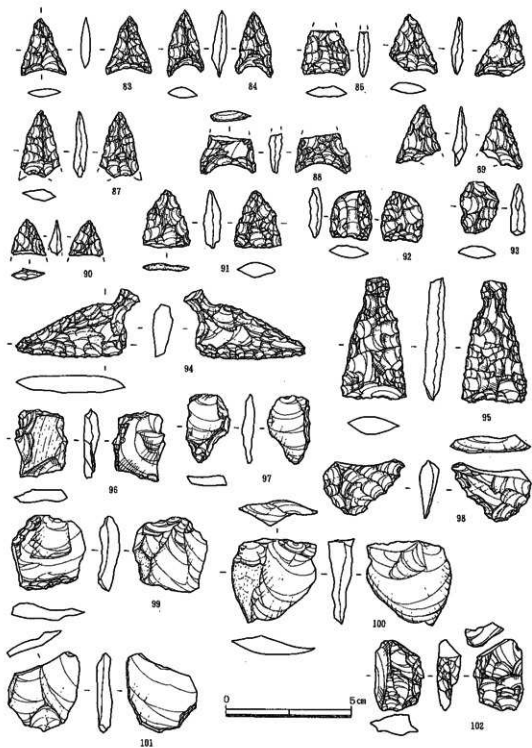
82は無文土器と思われ、内外面にナテ調整が行われている。

石器は、20点を図示した。石鏃11点(83~93)・石匙2点(94・95)・スクレイパー2点(96・100)・ピエス・エスキーユ4点(97・98・99・102)・磨石1点(103)が検出されている。うち半数は硬質頁岩製のものである。

なお、100の切片はJ-14の切片と接合をみせた。

時 期

本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。



第18图 J-2号住居址出土遗物(2:3)

第8表 J-2号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
83	石 錐	硬質頁岩	2.2	1.8	0.4	1.1		94	石 匙	チャート	2.7	4.8	0.8	6.4	
84	#	#	1.8	1.5	0.5	1.3		95	#	黒曜石	4.5	2.6	0.7	7.6	
85	#	#	2.6	1.5	0.5	1.2		96	スクレイパー	#	2.7	2.1	0.6	2.7	
86	#	#	2.3	1.9	0.4	1.0		97	ビュースキーユ	硬質頁岩	2.7	1.7	0.4	1.6	
87	#	#	2.6	1.5	0.5	1.2		98	#	#	3.0	2.9	0.7	5.9	
88	#	#	1.5	2.2	0.5	1.1		99	#	#	2.3	3.2	0.7	3.8	
89	#	ガラス質 安山岩	2.4	1.7	0.5	1.0		100	スクレイパー	#	3.1	2.8	0.6	3.8	J-14の 切片と兼 合
90	#	#	1.4	1.4	0.5	0.4		101	製 片	#	3.3	3.3	1.0	8.6	
91	#	硬質頁岩	2.3	1.9	0.6	2.1		102	ビュースキーユ	黒曜石	2.8	2.0	0.9	4.1	
92	#	黒曜石	1.9	1.7	0.5	1.5		103	磨 石	安山岩	11.1	6.7	4.5	591.9	
93	#	硬質頁岩	2.0	1.5	0.6	1.0									

(3) J-3号住居址

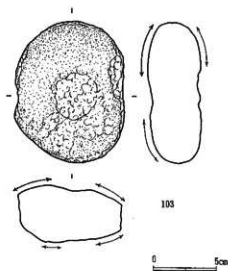
住居址 第20図

本址はC-2グリッドにおいて検出された。プランは東西3.4m南北4.4mの不整楕円形を呈する。床面積は10.8㎡を測り、南北軸方向はN-10°-Wを指す。壁は、残存高10~15cm程を測り、壁溝は認められない。覆土は2層に分層された。I層は黒色土層(10YR2/1)で径2mm前後のバミスを含み、II層はローム粒子を含んだいびく黄褐色土層(10YR5/4)であった。張床は黒色土とローム粒子が混じる暗褐色土層(10YR3/3)でやや軟弱であった。

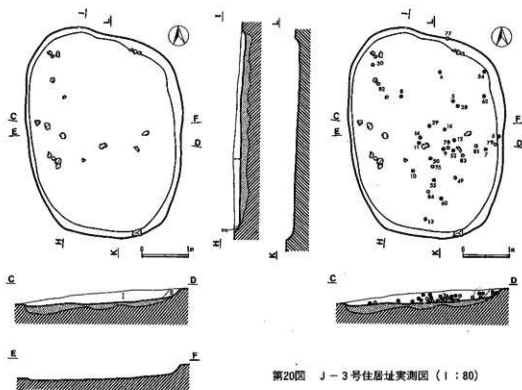
住居の床面上には安山岩礫が散在しており、地床 第19図 J-2号住居址出土遺物(1:3) 炉等は認められなかった。また、ビットは検出されていない。

遺 物 第21~25図

土器は73点を図示した。1は底部で、縄文RLが施される。部分的に羽状を構成する。2~49は縄文を施文する土器である。2~16は口縁部で、肥厚口縁のものが多く見られる(2・4~7・10・14)。9は波状口縁を呈する土器で、口縁部文様帯を持っている。細い隆帯で大きなうず巻状



第19図 J-2号住居址出土遺物(1:3)



第20図 J-3号住居址実測図(1:80)

の文様を形成し、隆帯に沿ってRとLを組み合わせた矢羽状の燃糸文を施文している。17~49は胴部で、羽状構成または菱形構成を成すものが見られる。縄文LRとRLによるものが多いが、28は縄文LRの方向差により羽状を構成していると思われる。40は原体が不明瞭であるが、条が縦に走っている。50~70は燃糸文を施文する。50~53・55・56は口縁部で、肥厚口縁を形成するものが多く、他に49の様な隆帯を貼付する土器が存在する。50は波状口縁で、口唇部に沿って隆帯を貼付している。51は、口唇部にも燃糸文が施される。54・57~70は胴部で、RとLを合わせた矢羽状の燃糸文が多く見られる。54・64~67・70は、燃糸文Lを、69は同Rを施している。71~73は無文土器と思われ、内外面にナデ調整が行われる。いずれも繊維を含んでおり、東海系の薄手無文土器とは異なる一群である。石器は、12点を図示した。石鏃5点(74~78)・石匙1点(79)・スクレイパー7点(80~85)が検出されている。うち半数は硬質頁岩製のものである。

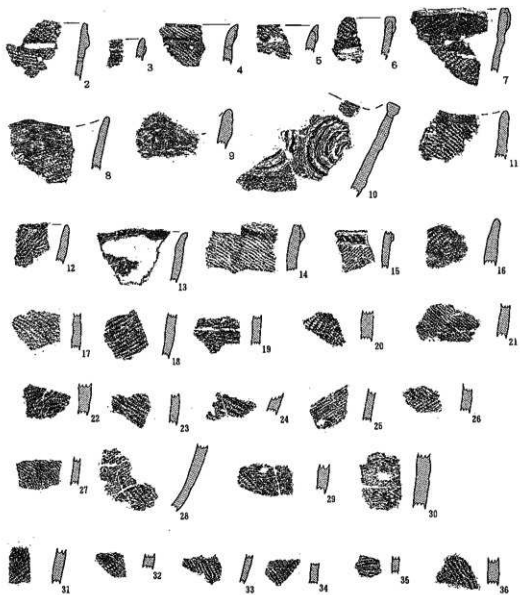


第21図 J-3号住居址出土遺物(1:4)

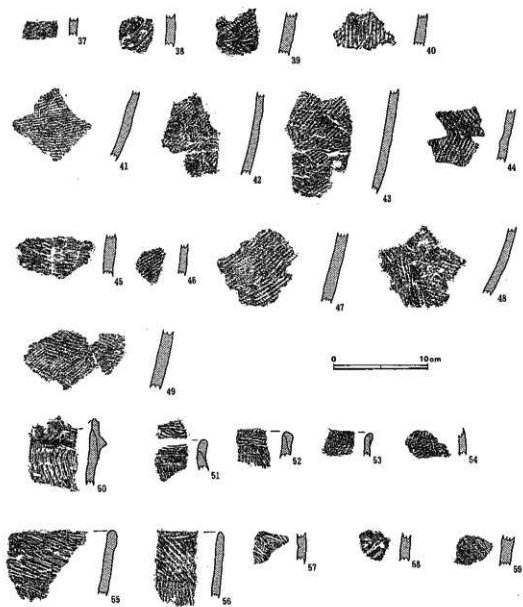
の文様を形成し、隆帯に沿ってRとLを組み合わせた矢羽状の燃糸文を施文している。17~49は胴部で、羽状構成または菱形構成を成すものが見られる。縄文LRとRLによるものが多いが、28は縄文LRの方向差により羽状を構成していると思われる。40は原体が不明瞭であるが、条が縦に走っている。50~70は燃糸文を施文する。50~53・55・56は口縁部で、肥厚口縁を形成するものが多く、他に49の様な隆帯を貼付する土器が存在する。50は波状口縁で、口唇部に沿って隆帯を貼付している。51は、口唇部にも燃糸文が施される。54・57~70は胴部で、RとLを合わせた矢羽状の燃糸文が多く見られる。54・64~67・70は、燃糸文Lを、69は同Rを施している。71~73は無文土器と思われ、内外面にナデ調整が行われる。いずれも繊維を含んでおり、東海系の薄手無文土器とは異なる一群である。石器は、12点を図示した。石鏃5点(74~78)・石匙1点(79)・スクレイパー7点(80~85)が検出されている。うち半数は硬質頁岩製のものである。

時期

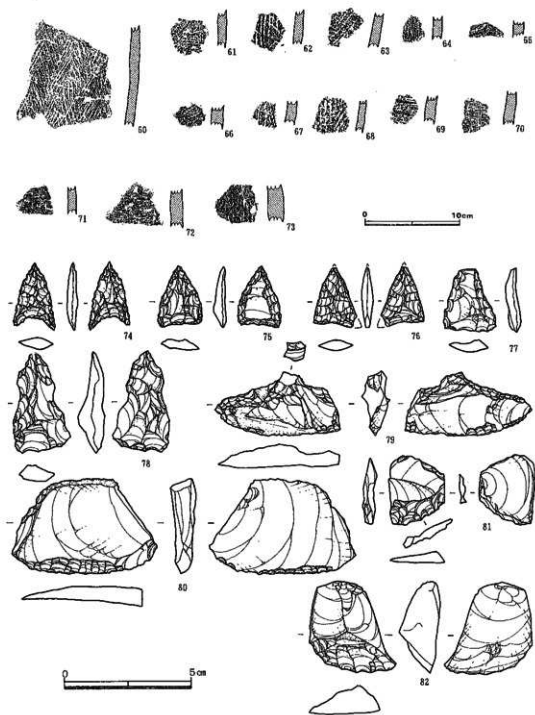
本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。



第22图 J-3号住居址出土遗物(1:4)



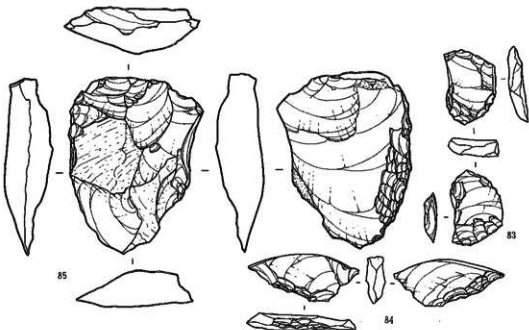
第23图 J-3号住居址出土遗物(1:4)



第24图 J-3号住居址出土遗物 (土器=1:4、石器=2:3)

第9表 J-3号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

神田番号	群 種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	神田番号	群 種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
74	石 錐	チャート	2.6	1.7	0.4	1.3		80	スクレイパー	硬質頁岩	3.7	5.7	1.0	15.5	
75	＊	硬質頁岩	2.4	1.8	0.5	1.3		81	＊	＊	2.7	2.2	0.5	3.1	
76	＊	黒曜石	2.4	1.8	0.4	0.9		82	＊	＊	3.6	3.4	1.5	13.8	
77	＊	硬質頁岩	2.5	2.1	0.5	1.6		83	＊	＊	3.0	2.8	0.6	4.3	
78	＊	＊	4.0	2.3	1.0	5.3	未成品	84	＊	安山岩	1.8	4.4	0.8	4.8	
79	石 匙	チャート	2.5	5.0	0.9	9.9	つまみ部欠損	85	スクレイパー	頁 岩	7.3	5.3	1.8	45.1	



第25図 J-3号住居址出土遺物 (1:3)

第10表 J-3号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

群種番号	群 種	部位	注 意	群形および文様	再 装 (内面)	款 上	組 織	色 調		焼成	出 土 層	備 考
								外面	内面			
1	深鉢	底面	---	縦文瓦しが方向を密せて縦文される	ナテ	白色灰胎 黒化粧片	有	にぶい褐色 7.5V R5/4	明褐色 7.5V R5/4	青	J-3	底面中出土
2	深鉢	口縁	---	平縁 口唇部に沿って縁帯を若干 縦文瓦しが横帯上にも縦文 胎砂孔あり	黄ナテ 胎砂孔の調	白色灰胎 黒化粧片	有	にぶい黄褐色 10Y R5/4	黒色 10Y R2/1	青	J-3	
3	深鉢	口縁	---	平縁 口唇部下に縁帯 胎砂下に横文瓦しが	黄ナテ	白色灰胎 黒化粧片	有	にぶい黄褐色 10Y R5/4	黒色 10Y R2/1	青	J-3	
4	深鉢	口縁	---	平縁 口唇部胎厚 胎砂胎等孔にナテ 縦文瓦しが	黄ナテ	白色灰胎 黒化粧片	有	暗褐色 10Y R5/3	黒褐色 10Y R2/3	青	J-3	
5	深鉢	口縁	---	平縁 口唇部胎厚 縦文瓦しが	黄ナテ	白色灰胎 黒化粧片	有	暗褐色 7.5V R5/6	黒褐色 10Y R2/3	青	J-3	
6	深鉢	口縁	---	平縁 口唇部胎厚 縦文瓦しが	黄ナテ	白色灰胎 黒化粧片	有	暗褐色 10Y R5/7	黒褐色 10Y R2/3	青	J-3	胎一調色か?
7	深鉢	口縁	---	平縁 胎砂胎厚 縦文瓦しが胎下にも縦文胎成	黄ナテ	白色灰胎 黒化粧片	有	暗褐色 10Y R5/7	黒褐色 10Y R2/3	青	J-3	

第11表 J-3号住居址出土遺物一覧表(土器)

図号	器種	部位	法量	図説および文様	調査 (内)	土	色		焼成	出土 位置	備考
							外	内			
8	鉢	口縁	---	高取口縁 黒文 L1	ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黒褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/1	特	J-3
9	鉢	口縁	---	高取口縁 風化が密しく文様不明	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/6	灰黒褐色 10YR3/2	特	J-3
10	鉢	口縁	---	高取口縁 口縁部文様は? 平歯も其の類 を有して 胎土を流文 彫刻 黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 5YR3/1	黒褐色 5YR3/1	中 不良	J-3
11	鉢	口縁	---	高取口縁 黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黒褐色 10YR3/1	暗褐色 10YR3/3	特	J-3
12	鉢	口縁	---	平歯 黒文 L1?	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黒褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	特	J-3
13	鉢	口縁	---	平歯 口縁部彫刻 黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 10YR3/2	特	J-3
14	鉢	口縁	---	平歯 口縁部彫刻 黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/3	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
15	鉢	口縁	---	平歯 L1 口縁部 黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	に 2.5Y 黄褐色 10YR6/4	灰褐色 7.5YR3/1	特	J-3
16	鉢	口縁	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/6	灰褐色 10YR3/2	中 不良	J-3
17	鉢	胴部	---	黒文 L1	ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	黒褐色 10YR3/1	特	J-3
15	鉢	胴部	---	黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR4/1	特	J-3
19	鉢	胴部	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR4/1	特	J-3
20	鉢	胴部	---	黒文 L1	ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR4/1	特	J-3
21	鉢	胴部	---	黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
22	鉢	胴部	---	黒文 L1?	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR4/1	特	J-3
23	鉢	胴部	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR4/1	特	J-3
24	鉢	胴部	---	黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR4/1	特	J-3
25	鉢	胴部	---	黒文 L1 に 無彫刻文を附加した無彫刻	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/3	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
26	鉢	胴部	---	黒文 L1 の方向による彫刻構成	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
27	鉢	胴部	---	黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/6	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
28	鉢	胴部	---	黒文 L1 の方向による彫刻構成	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	に 2.5Y 黄褐色 10YR6/4	灰褐色 7.5YR4/1	特	J-3
29	鉢	胴部	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/6	灰褐色 10YR3/2	中 不良	J-3
30	鉢	胴部	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR4/1	中 不良	J-3
31	鉢	胴部	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/3	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
32	鉢	胴部	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	に 2.5Y 黄褐色 7.5YR3/4	灰褐色 7.5YR4/1	特	J-3
33	鉢	胴部	---	黒文 L1	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR3/4	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
34	鉢	胴部	---	黒文 L1	ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/3	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
35	鉢	胴部	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/3	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
36	鉢	胴部	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	に 2.5Y 黄褐色 7.5YR3/4	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
37	鉢	胴部	---	黒文 L1 L1 による彫刻構成	ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	に 2.5Y 黄褐色 7.5YR3/4	灰褐色 10YR3/2	特	J-3
38	鉢	胴部	---	黒文 L1	ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	に 2.5Y 黄褐色 7.5YR3/4	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
39	鉢	胴部	---	無彫刻より 黒文 L1 L1 による彫刻構成	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/3	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
40	鉢	胴部	---	黒文 L1 L1 による彫刻が強く不鮮明	横ナ?	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/2	灰褐色 10YR3/1	特	J-3
41	鉢	胴部	---	黒文 L1	不明	白色灰胎 風化岩片	有	黄褐色 10YR3/3	灰褐色 10YR3/1	特	J-3

第12表 J-3号住居址出土遺物一覧表〈縄文土器〉

図号 番号	器種	部位	法足	形制および文様	材質 (内面)	胎土	施装	色調		形状	出土 位置	備考
								外面	内面			
42	注 杯	胴部	---	縄文1段	---	白色底物 風化色付	有	褐色色 7.5YR5/6	褐色色 10YR2/1	管	J-3	
43	注 杯	胴部	---	縄文1段	---	白色底物 風化色付	有	褐色色 7.5YR5/6	に2000褐色 7.5YR5/4	管	J-3	
44	注 杯	胴部	---	縄文前1段1による形制類推	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 10YR4/4	褐色色 10YR4/2	管	J-3	
45	注 杯	胴部	---	縄文1段1	---	白色底物 風化色付	有	褐色褐色 10YR4/3	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
46	注 杯	胴部	---	縄文1段	---	白色底物 風化色付	有	褐色色 7.5YR5/6	褐色色 10YR2/1	管	J-3	
47	注 杯	胴部	---	縄文1段	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
48	注 杯	胴部	---	縄文1段	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 10YR4/1	管	J-3	
49	注 杯	胴部	---	縄文1段1-2段1による形制類推	---	白色底物 風化色付	有	褐色褐色 10YR4/2	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
50	注 杯	口縁	---	11番目によって計量する 或は口縁 O 径より2分の組み合わせによる 胎土文	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 10YR5/4	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
51	注 杯	口縁	---	平縁 口縁部肥厚 胎土文なし (11番目にも胎土)	---	白色底物 風化色付 小台	有	褐色色 7.5YR4/3	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
52	注 杯	口縁	---	平縁 口縁部肥厚 胎土文なし (口縁部にも胎土)	---	白色底物 風化色付	有	褐色色 10YR3/1	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
53	注 杯	口縁	---	平縁 口縁部肥厚 胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	褐色色 5YR1.7/1	褐色色 5YR1.7/1	胎土	J-3	
54	注 杯	胴部	---	胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 7.5YR4/1	管	J-3	
55	注 杯	口縁	---	平縁 口縁部肥厚 胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	褐色色 10YR3/1	褐色色 10YR3/3	管	J-3	
56	注 杯	口縁	---	平縁 胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	褐色色 10YR4/4	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
57	注 杯	胴部	---	胎土文なし	---	縄文1段1	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 7.5YR4/1	管	J-3	
58	注 杯	胴部	---	尺1.2本の組み合わせによる胎土文	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 7.5YR4/1	管	J-3	
59	注 杯	胴部	---	尺1.2本の組み合わせによる胎土文	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 7.5YR4/1	管	J-3	
60	注 杯	胴部	---	尺1の胎土文	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 7.5YR4/1	管	J-3	
61	注 杯	胴部	---	尺1.2本の組み合わせによる胎土文	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 7.5YR4/1	管	J-3	
62	注 杯	胴部	---	尺1の胎土文	---	白色底物 風化色付	有	明黄褐色 10YR7/6	明黄褐色 10YR7/6	管	J-3	
63	注 杯	胴部	---	尺1.2本の組み合わせによる胎土文	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
64	注 杯	胴部	---	胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	褐色色 7.5YR4/3	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
65	注 杯	胴部	---	胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
66	注 杯	胴部	---	胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
67	注 杯	胴部	---	胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
68	注 杯	胴部	---	尺1の胎土文?	ナ	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 5YR5/6	管	J-3	
69	注 杯	胴部	---	胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
70	注 杯	胴部	---	胎土文なし	---	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 10YR3/1	管	J-3	
71	注 杯	胴部	---	胎土? (不明)	不明	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 7.5YR4/1	管	J-3	
72	注 杯	胴部	---	胎土? (不明)	不明	白色底物 風化色付	有	明黄褐色 10YR7/6	褐色色 7.5YR4/1	管	J-3	
73	注 杯	胴部	---	胎土?	不明	白色底物 風化色付	有	に2000褐色 7.5YR5/4	褐色色 7.5YR4/1	管	J-3	

(4) J-4号住居址

住居址 第26図

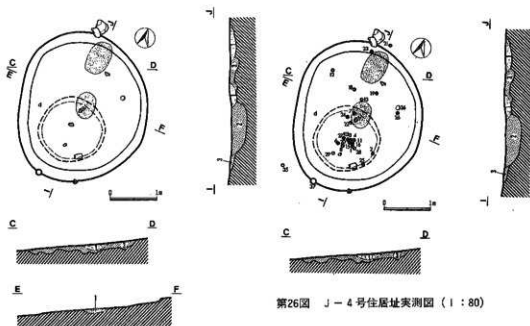
本址はC-2グリッドにおいて検出された。プランは東西2.7m南北3.2mの不整形円形を呈する。床面積は5.3㎡を測り、南北軸方向はN-17°-Wを指す。壁は、残存する高さは5cm程を測るのみで、壁溝は認められない。床面はローム主体のふい黄褐色土(10YR5/4)を張った張床である(3層)。また、床下には1.4×1.4×深さ0.3mの土坑が存在し、その覆土はロームをブロック状に含んだふい黄褐色土層(2層 10YR5/4)であった。

地床炉は、住居中央に55×40×深さ10cmのものがあり、焼土(1層 ぶい橙色5 YR7/4)が認められた。また、北壁側にも70×45×深さ10cmの焼土(1層 ぶい橙色5 YR7/4)が認められた。

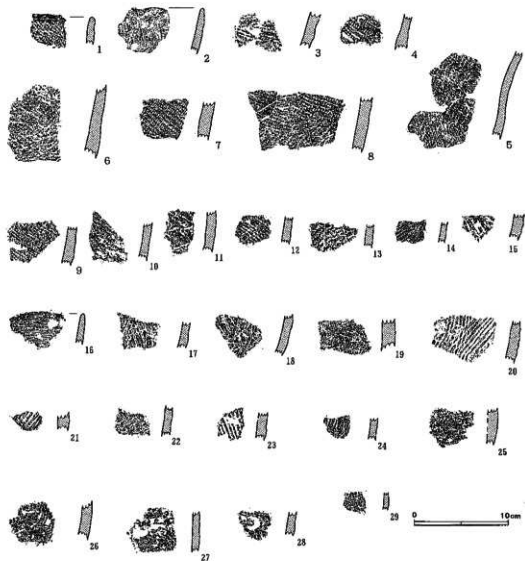
遺物 第27・28図

土器の拓影は29点を図示した。いずれも含繊維の尖底深鉢形土器の破片と考えられる。

1・3-15は単節縄文を施文する土器である。1は口縁部で、口唇部下より縄文RLを施文する。3-15は胴部で、縄文LRとRLで結束されない羽状を構成するものがある(5・7)。11には結節が認められる。16-24は撚糸文を施す。16は口縁部で、RとLを組み合わせた矢羽状の撚糸文を、横位に施文している。17-24は胴部で、0段L(20)、RまたはL(21・23・24)、L2本を合わせたもの(18)、R・L2本を合わせたもの(17・19・22)が見られる。



第26図 J-4号住居址実測図(1:80)



第27図 J-4号住居址出土遺物(1:4)

2は無文土器で、内外面がナデにより調整されている。この他無文土器と思われる29が出土している。小破片の為明確さを欠くが、内外面にナデ調整がなされている。器壁も他の土器に比べて、薄い。

25~29は、器面状態が悪い土器を一括した。縄文或は撚糸文が施文されたと思われるが、無文土器が含まれている可能性もある為図示した。

石器は、8点を図示した。石鏃3点(30~32)・石匙1点(33)・ピエス・エスキューユ1点(34)・小形石斧1点(35)・磨石2点(36・37)が検出されている。素材は、硬質頁岩やチャートが主で

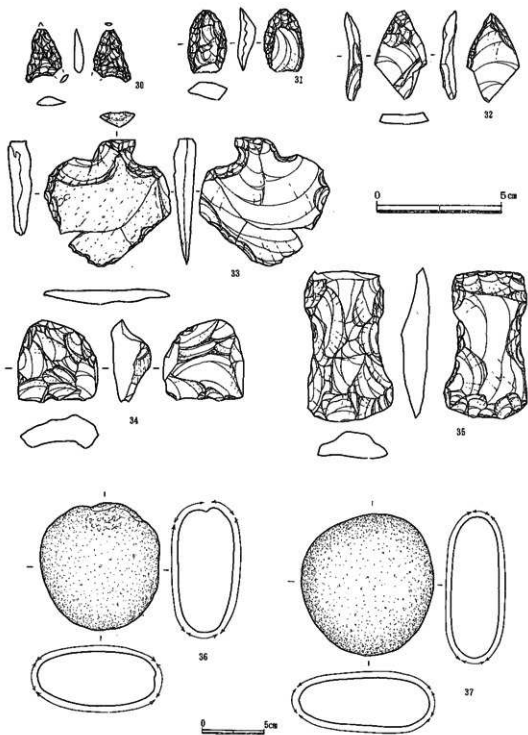
第13表 J-4号住居址出土遺物一覧表(土器)

発掘番号	遺物	部位	法量	資料および文様	調査 (内訳)	出土	色調		組成	土質	備考
							外側	内側			
1	深鉢	口縁	---	平縁 黒文RL	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	黒褐色 10YR5/2	黒褐色 10YR5/2	中	J-4
2	深鉢	口縁	---	平縁 黒文	ナテ	白色粘物 風化部分 黒化部分	青	明褐色 7.5YR5/5	にじみ-黄褐色 10YR5/4	中	J-4
3	深鉢	胴部	---	黒文RL	ナテ	白色粘物 風化部分	青	黄褐色 10YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	青	J-4
4	深鉢	胴部	---	黒文RL	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	黒褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	青	J-4
5	深鉢	胴部	---	黒文RL・紅土による刷痕跡	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	黒褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/1	青	J-4
6	深鉢	胴部	---	黒文RL	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-4
7	深鉢	胴部	---	黒文RL・紅土による刷痕跡	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	にじみ-褐色 7.5YR5/4	灰黄褐色 10YR4/2	青	J-4
8	深鉢	胴部	---	黒文1本・紅土による刷痕跡か?	不明	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	灰黄褐色 10YR4/2	青	J-4
9	深鉢	胴部	---	黒文RL	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	黄褐色 10YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	青	J-4
10	深鉢	胴部	---	黒文RL? (跡の形が強く不明)	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	黒褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	中	J-4
11	深鉢	胴部	---	黒文1本 総柄	ナテ	白色粘物 風化部分	青	黄褐色 10YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	中	J-4
12	深鉢	胴部	---	黒文RL	ナテ	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	にじみ-黄褐色 10YR5/4	青	J-4
13	深鉢	胴部	---	黒文1本	不明	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	にじみ-黄褐色 10YR5/4	青	J-4
14	深鉢	胴部	---	黒文1本	ナテ	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	灰黄褐色 10YR4/2	青	J-4
15	深鉢	胴部	---	黒文RL	不明	白色粘物 風化部分	青	黒褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	青	J-4
16	深鉢	口縁	---	平縁 R・L2本の組み合わせによる黒文	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-4
17	深鉢	胴部	---	R・L2本の組み合わせによる黒文	ナテ	白色粘物 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/5	明褐色 7.5YR5/5	青	J-4
18	深鉢	胴部	---	L2本の組み合わせによる黒文	ナテ	白色粘物 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/5	明褐色 7.5YR5/5	青	J-4
19	深鉢	胴部	---	L2本の組み合わせによる黒文? (跡の形が強く不明)	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	にじみ-黄褐色 10YR5/4	中	J-4
20	深鉢	胴部	---	0段しの黒文	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/5	灰黄褐色 10YR4/2	青	J-4
21	深鉢	胴部	---	黒文1本	不明	白色粘物 風化部分	青	黒褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	中	J-4
22	深鉢	胴部	---	L・R2本の組み合わせによる黒文	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	黄褐色 10YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	中	J-4
23	深鉢	胴部	---	黒文1本	不明	白色粘物 風化部分	青	黄褐色 10YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	中	J-4
24	深鉢	胴部	---	黒文1本か? (圧痕が強く不明)	ナテ	白色粘物 風化部分	青	黄褐色 10YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	青	J-4
25	深鉢	胴部	---	黒文? (跡の形が強く不明)	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/5	灰黄褐色 10YR4/2	青	J-4
26	深鉢	胴部	---	黒文? (跡の形が強く不明)	不明	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	にじみ-黄褐色 10YR5/4	中々 不良	J-4
27	深鉢	胴部	---	黒文? (跡の形が強く不明)	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-4
28	深鉢	胴部	---	黒文? (跡の形が強く不明、刷痕 の残っている)	鏡ナテ	白色粘物 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/5	灰黄褐色 10YR4/2	中々 不良	J-4
29	深鉢	胴部	---	黒文? 磨子	ナテ	白色粘物 風化部分	青	にじみ-黄褐色 10YR5/4	灰黄褐色 10YR4/2	青	J-4

ある。

時期

本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。



第28图 J-4号住居址出土遗物(1~6=2:3、7·8=1:3)

第14表 J-4号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

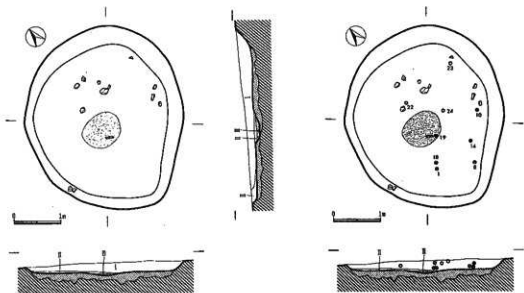
押印番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	押印番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
30	石 錘	チャート	2.1	1.4	0.3	0.9		34	ビニエヌ ヌキハシ	硬質頁岩	3.2	3.2	1.5	13.0	
31	＃	硬質頁岩	2.5	1.6	0.6	2.4		35	小形石斧	チャート	5.9	3.4	1.0	29.8	
32	＃	＃	3.5	2.1	0.5	2.9	半成品	36	磨 石	安山岩	10.1	9.4	4.5	600.6	
33	石 錘	ガラス質 安山岩	5.1	5.1	0.8	14.9	損傷	37	＃	＃	11.2	10.5	3.8	729.9	

(5) J-5号住居址

住居址 第29図

本址はC-3グリッドにおいて検出された。プランは東西3.5m南北3.9mの不整形円形を呈する。床面積は7.3㎡を測り、南北軸方向はN-30°-Wを指す。残存壁高は10-25cm程を測り、壁溝は認められない。床面はローム主体のふい黄褐色土(10YR5/4)を張った張床である。覆土は2層に分層された。I層は黒色土層(10YR2/1)で若干のパミスを含み、II層はローム粒子をよく含んだ暗褐色土層(10YR3/3)であった。

地床炉は、住居中央に80×70×深さ10cmのものがあり、焼土(III層)にふい橙色5YR7/4)が認められた。また、炉内には20×10×厚さ10cm炉縁石が認められた。



第29図 J-5号住居址実測図(1:80)

遺物 第30・31図

土器の拓影は19点を図示した。いずれも含繊維の尖底深鉢形土器の破片と考えられる。

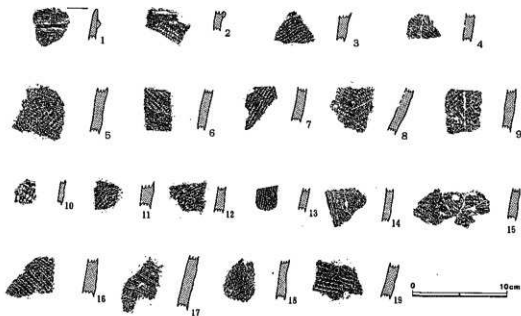
1～12は単節縄文を施文する土器である。1は口縁部で、口唇部に沿って隆帯を巡している。隆帯の上方及び下方に、縄文を施文すると考えられる。2も口唇部が欠損した口縁部で、水平隆帯が見られる。口唇部に沿って巡らされたものと思われる。3～12は胴部で、5、9は縄文RLとLRによる、結束されない羽状縄文が施文される。

13～19は摺承文で、R 2本を合わせたもの (15・16・18)、L 2本を合わせたもの (17)、R・Lを合わせた矢羽状のもの (13・14・19) が見られる。

石器は、5点を図示した。石鏃2点 (20・21)・石匙1点 (23)・石錐1点 (24) と、22は石織の未成品とも考えられる両面加工品である。

時期

本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。



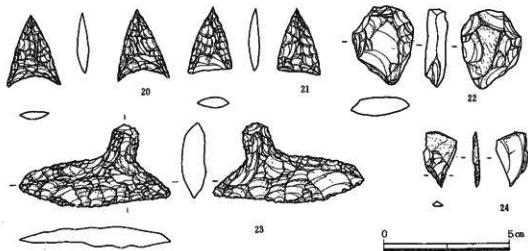
第30図 J-5号住居址出土遺物 (1:4)

第15表 J-5号住居址出土遺物一覧表 <石器>

標本番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	標本番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
20	石 鏃	硬質頁岩	2.8	2.1	0.5	1.8		23	石 匙	チャート	3.3	5.9	0.9	10.2	
21	*	黒曜石	2.6	1.7	0.4	1.1		24	石 錐	*	2.2	1.3	0.2	0.6	
22	両面加工品	硬質頁岩	3.1	2.4	0.8	6.2	石織未成品?								

第16表 J-5号住居址出土遺物一覧表(土器)

種別 番号	器種	部位	注記	器形および文様	調査 内訳	胎土	磁質	色別		焼成	土質	備考
								外面	内面			
1	甕鉢	口縁	---	平縁 口唇部に沿って隆起多量す 器背に上早期横文? (器の作位低く不詳)	横ナデ	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	にじみ・黄褐色 7.5YR3/4	器	J-5	
2	甕鉢	口縁	---	口唇部に沿って隆起を呈すと認められる 横文LR	ナデ	白色灰物 風化石灰	有	にじみ・黄褐色 10YR5/6	黄褐色 10YR3/1	器	J-5	
3	甕鉢	胴部	---	横文LR	横ナデ	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
4	甕鉢	胴部	---	横文LR	不明	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
5	甕鉢	胴部	---	横文LR・LRによる縦筋横線	横ナデ	白色灰物 風化石灰	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	黄褐色 10YR3/1	器	J-5	
6	甕鉢	胴部	---	横文LR	横ナデ	白色灰物 風化石灰	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
7	甕鉢	胴部	---	横文LR	横ナデ	白色灰物 風化石灰	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
8	甕鉢	胴部	---	横文LR・LRによる縦筋横線	横ナデ	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
9	甕鉢	胴部	---	横文LR・LRによる縦筋横線	ナデ	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
10	甕鉢	胴部	---	横文LR	不明	白色灰物 風化石灰	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
11	甕鉢	胴部	---	横文LR	ナデ	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
12	甕鉢	胴部	---	横文LRのみ?	ナデ	白色灰物 風化石灰	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	黄褐色 10YR3/1	器	J-5	
13	甕鉢	胴部	---	R・L 2本の組み合わせによる器本文	横ナデ	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
14	甕鉢	胴部	---	R・L 2本の組み合わせによる器本文	ナデ	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
15	甕鉢	胴部	---	R 2本の組み合わせによる器本文	不明	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
16	甕鉢	胴部	---	R 2本の組み合わせによる器本文	不明	白色灰物 風化石灰	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
17	甕鉢	胴部	---	R 2本の組み合わせによる器本文	ナデ	白色灰物 風化石灰	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
18	甕鉢	胴部	---	R 2本の組み合わせによる器本文	ナデ	白色灰物 風化石灰	有	明褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	
19	甕鉢	胴部	---	R・L 2本の組み合わせによる器本文	横ナデ	白色灰物 風化石灰	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	黄褐色 10YR4/2	器	J-5	



第31図 J-5号住居址出土遺物(2:3)

(6) J-6号住居址

住居址 第32図

本址はC-3グリッドにおいて検出された。プランは、床面が残るのみで正確にはつかめないが、東西4m南北4mの不整形形を呈する。床面積は12.2㎡を測り、南北軸方向はN-0°を指す。壁は残存しておらず、壁溝は認められない。床面はローム主体のにおい黄褐色土(10YR5/4 3層)を張った張床である。ピットは住居中央にP₁・P₂の2基が検出された。P₁は60×40×深さ15cm、P₂は30×30×深さ15cmを測る。P₁の覆土はバミス・ローム粒子を含んだ黒褐色土層(10YR2/2 2層)であった。

地床炉は、住居中央に60×50×深さ15cmのものがあり、焼土(1層 におい橙色5YR7/4)が認められた。

遺物 第33図

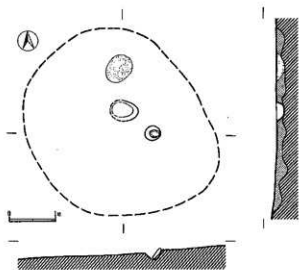
土器の拓影は15点を図示した。いずれも含繊維の尖底深鉢形土器の破片と考えられる。

1~14は単節縄文を施文する土器である。1, 2は肥厚口縁の土器で、口唇部直下よりLRとRLによる羽状縄文(1)、RL(2)が施文される。3~14は胴部で、6, 8, 9, 13はLRとRLで羽状構成の縄文で、結束によるものは存在しない。15は、撚糸文Lを施文している。

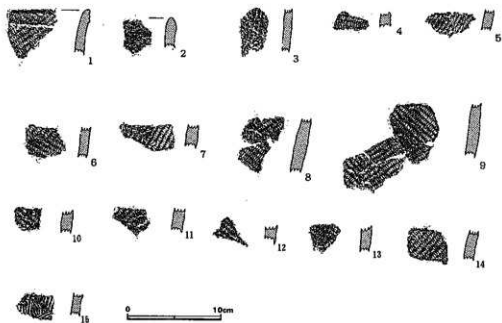
石器は、16が珪質岩の加工痕のある剥片、17は破損し剥落の著しい蛇紋岩の磨製石斧である。

時期

本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。

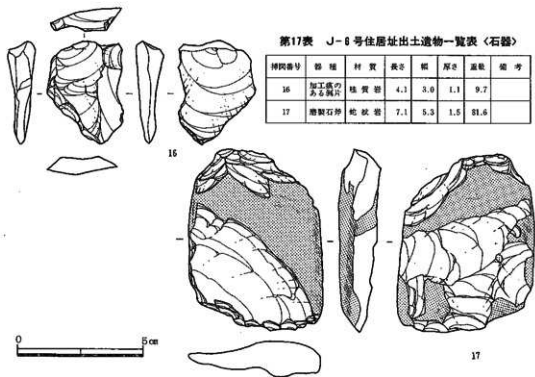


第32図 J-6号住居址実測図(1:80)



第17表 J-6号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

神岡番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
16	加工痕のある佩片	珉質岩	4.1	3.0	1.1	9.7	
17	磨製石斧	蛇紋岩	7.1	5.3	1.5	81.6	



第33図 J-6号住居址出土遺物(土器=1:4、石器=2:3)

第18表 J-6号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

調査 番号	部 位	形状	法 定	撮影および寸法	調 査 (内容)	材 質	色 調		施 装	土 質	備 考
							外 観	内 面			
1	床 土	口縁	---	平縁 びね彫刻 縄文 RL・LR による羽状構成	縄ナデ	白色胎物 黒化部分	褐色 7.5YR/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-6	14と同一個体か?
2	床 土	口縁 作底	---	平縁 びね彫刻 縄文 RL	不明	白色胎物 黒化部分	比色 5 YR5/4	灰青褐色 10YR3/2	青	J-6	
3	床 土	胴部	---	縄文 RL・LR による羽状構成か? (不明)	不明	白色胎物 黒化部分	比色 5 YR5/4	比色 5 YR5/4	青	J-6	
4	床 土	胴部	---	縄文 RL	不明	白色胎物 黒化部分	褐色 7.5YR/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-6	
5	床 土	胴部	---	縄文 LR	縄ナデ	白色胎物 黒化部分	比色 10YR2/4	比色 10YR6/4	青	J-6	
6	床 土	胴部	---	縄文 RL・LR による羽状構成	不明	白色胎物 黒化部分	比色 7.5YR5/4	褐色 10YR3/1	青	J-6	
7	床 土	胴部	---	縄文 LR	不明	白色胎物 黒化部分	比色 7.5YR5/4	黒 色 10 YR3/1	青	J-6	
8	床 土	胴部	---	縄文 RL・LR による羽状構成	不明	白色胎物 黒化部分	褐色 7.5YR/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-6	
9	床 土	胴部	---	縄文 RL・LR による羽状構成	ナデ?	白色胎物 黒化部分	比色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-6	
10	床 土	胴部	---	縄文 RL? (部分的に黒く不明)	縄ナデ	白色胎物 黒化部分	比色 5 YR5/4	比色 5 YR5/4	青	J-6	
11	床 土	胴部	---	縄文 RL? (部分的に黒く不明)	不明	白色胎物 黒化部分	比色 5 YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-6	
12	床 土	胴部	---	縄文 RL・LR による羽状構成	不明	白色胎物 黒化部分	褐色 7.5YR/4	黒 色 10 YR3/1	青	J-6	
13	床 土	胴部	---	縄文 LR	不明	白色胎物 黒化部分	比色 5 YR5/4	比色 5 YR5/4	青	J-6	
14	床 土	胴部	---	縄文 LR	縄ナデ	白色胎物 黒化部分	褐色 7.5YR3/1	黒褐色 10YR3/1	青	J-6	1と同一個体か?
15	床 土	口縁 作底	---	縄文 RL	ナデ 輪出後の状態	白色胎物 黒化部分	比色 10YR5/6	灰青褐色 10YR4/2	青	J-6	

(7) J-7号住居址

住居址 第34図

本址はB-3グリッドにおいて検出された。プランは東西3.0m南北3.0mの不整形円形を呈する。床面積は7.0㎡を測り、南北軸方向はN-38°-Wを指す。残存壁高は5~10cm程を測り、壁溝は認められない。覆土は若干のバミスを含む黒色土層(10YR2/1 I層)であった。床面はローム主体のふい黄褐色土(10YR5/4 2層)を張った張床である。ピットは検出されていない。

地床炉は、住居中央に40×25×深さ15cmのものがあり、焼土(1層 ぶい橙色5YR7/4)が認められた。その縁には、60×25×厚さ15cmを測る炉縁石が認められた。

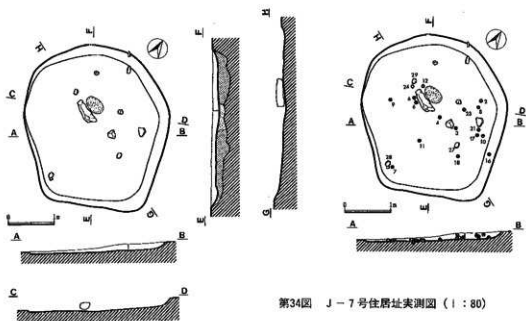
遺 物 第35・36図

土器の拓影は23点を図示した。いずれも含繊維の尖底深鉢形土器の破片と考えられる。

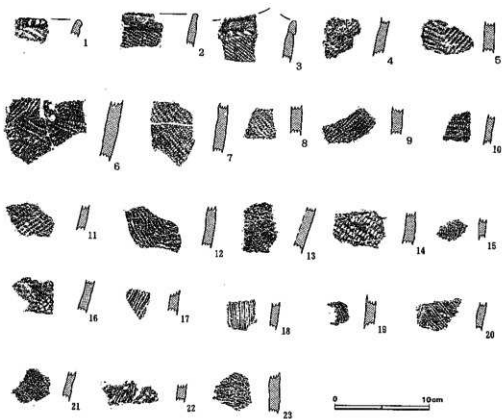
1は平縁の土器で、口唇部へ縄文原体によるものと思われる刺突がなされている。口唇部下方には、縄文Rが施される。

2~16は、単節縄文を施文する土器である。2, 3は口縁部で、3は、波状を呈し刻みを持つ陸体を巡す。口唇部の下に無文部を構成し、胴部には縄文RLが施されている。4~16は胴部で、5, 6はLRとRLにより、結束のない羽状構成を成している。10は、条が溝になっている。

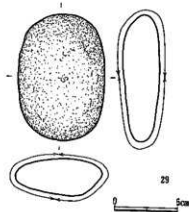
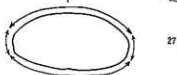
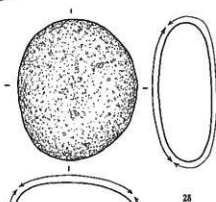
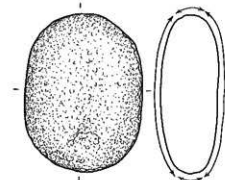
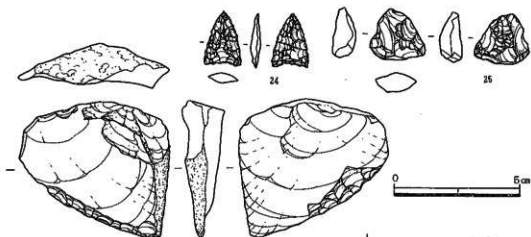
17~21は捻糸文で0段L(18)、R(17)、R・Lの2本を合わせたもの(19, 20, 21)がみら



第34图 J-7号住居址夹测图 (1:80)



第35图 J-7号住居址出土遗物 (1:4)



第19表 J-7号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

標本番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
24	石	燧石	2.1	1.5	0.4	0.8	
25	石	黒曜石	2.0	2.2	0.9	3.1	半成品
26	スレイ パー	ガラス質 安山岩	5.4	6.0	1.7	37.6	
27	磨石	安山岩	12.5	9.4	4.6	869.2	
28	石	石	11.1	9.5	4.4	602.8	
29	石	石	10.0	6.9	2.95	263.9	

第36図 J-7号住居址出土遺物
(剃片石器 = 2 : 3、磨石 = 1 : 3)

第20表 J-7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

器物番号	器種	部位	装束	特徴および文様	陶質 [内面]	胎土	焼成	色 沢		施文	出土 位置	備考	
								外面	内面				
1	鉢	口縁	---	平縁 白帯に横文帯域下の押花 無文文? (不明) 11番器と同一系統だと 推定	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	青	J-7		
2	鉢	口縁	---	平縁 白帯に横文帯域下の押花 無文文? (不明) 11番器と同一系統だと 推定	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	青	J-7		
3	鉢	口縁	---	平縁 口縁部下に横文帯 無文文? (不明) 11番器と同一系統だと 推定	不明	白色灰胎 風化灰青	左	暗褐色 7.5YR3/6	に20~褐色 7.5YR3/4	黄	J-7		
4	鉢	胴部	---	無文文? (不明) 11番器と同一系統だと 推定	ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	に20~褐色 7.5YR3/3	黄	J-7		
5	鉢	胴部	---	無文文? (不明) 11番器と同一系統だと 推定	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	に20~褐色 7.5YR3/4	灰黄褐色 10YR3/2	黄	J-7		
6	鉢	胴部	---	無文文? (不明) 11番器と同一系統だと 推定	ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR3/2	黄	J-7		
7	鉢	胴部	---	無文文?	不明	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	灰褐色 10YR3/2	黄	J-7		
8	鉢	胴部	---	無文文?	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	に20~褐色 7.5YR3/4	灰黄褐色 10YR3/2	黄	J-7		
9	鉢	胴部	---	無文文?	ナテ	白色灰胎 風化灰青	左	褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR3/2	黄	J-7		
10	鉢	胴部	---	無文文?	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	黒褐色 10YR3/1	黄	J-7		
11	鉢	胴部	---	無文文?	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	黒褐色 10YR3/1	黄	J-7		
12	鉢	胴部	---	無文文?	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	褐色 7.5YR3/6	黄	J-7		
13	鉢	胴部	---	無文文?	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	に20~褐色 7.5YR3/4	灰黄褐色 10YR3/2	黄	J-7	
14	鉢	胴部	---	無文文?	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	褐色 7.5YR3/6	黄	J-7		
15	鉢	胴部	---	無文文?	ナテ	白色灰胎 風化灰青	左	褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR3/2	黄	J-7		
16	鉢	胴部	---	無文文?	ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	に20~褐色 7.5YR3/4	灰黄褐色 10YR3/2	黄	J-7	
17	鉢	胴部	---	無文文?	ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	暗褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/1	黄	J-7		
18	鉢	胴部	---	5段しの器底文か?	ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR3/2	黄	J-7		
19	鉢	胴部	---	5・L2本を合わせた器底文	ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR3/2	黄	J-7		
20	鉢	胴部	---	5・L2本を合わせた器底文	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	に20~褐色 7.5YR3/4	灰黄褐色 10YR3/2	黄	J-7		
21	鉢	胴部	---	5・L2本を合わせた器底文	ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	に20~褐色 7.5YR3/4	灰黄褐色 10YR3/2	黄	J-7		
22	鉢	胴部	---	無文文? (器底の風化が激しく不明)	微ナテ	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	灰褐色 7.5YR3/2	黄	J-7		
23	鉢	胴部	---	無文文? (器底風化が激しく不明)	不明	白色灰胎 風化灰青	右	褐色 7.5YR3/6	黒褐色 10YR3/1	黄	J-7		

れる。22・23は不鮮明な土器を一括した。器面の風化が激しく詳細は不明であるが、22は捺糸文を、23は無文になる可能性がある。

石器は6点を図示した。石鏃2点(24・25は未成品)・スクレイパー1点(26)・磨石3点(27・28・29)が検出されている。

時期

本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。

(8) J-8号住居址

住居址 第37図

本址はC-2グリッドにおいて検出された。プランは、床面が残るのみで正確にはつかめないが、東西4m南北5mの不整形形を呈する。床面積は14.8㎡を測り、南北軸方向はN-40°Wを指す。壁は残存しておらず、壁溝は認められない。床面はローム主体のふい黄褐色土(10YR5/4)を張った張床である。図の中央の囲いは固い床の範囲である。ピットは住居周囲にP₁・P₂・P₃の3基が検出された。P₁は40×35×深さ25cm、P₂は50×40×深さ20cm、P₃は15×15×深さ30cmを測る。P₃の覆土はローム粒子を含んだ黒褐色土層(10YR2/2 2層)で、中には土器底部が認められた。

地床炉等は認められなかった。

遺物 第37・38図

土器は、いずれも含繊維の尖底深鉢形土器の破片で、4点を図示した。

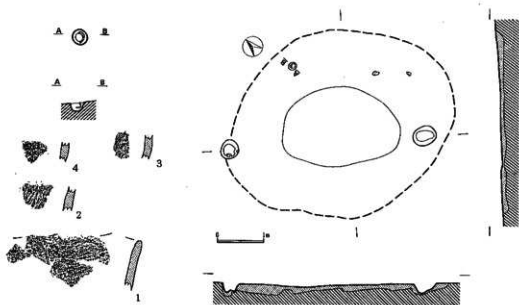
1は波状口縁の土器で、縄文LR・RLが施文される。2は捻糸文Rを施文する。

3、4は器面状態が悪く不鮮明な土器で、この内4は無文土器の可能性もある。

石器は2点を図示した。5は石鏃もしくは石匙、6は微小剝離痕のある剥片である。

時期

本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。



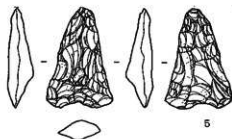
第37図 J-8号住居址(1:80)および出土遺物(1:4)

第21表 J-8号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

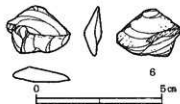
神田番号	器種	部位	注記	図形および文様	調査経緯 (内蔵)	胎土	色調		焼成	土質	備考
							外側	内側			
1	深鉢	口縁	---	深鉢口縁 縄文 黒・LX	不明	白色胎物 風化磁片	右 にじみ褐色 7.YY82/4	褐色色 18YR5/1	特	J-8	
2	深鉢	胴部	---	縄文文様	ナデ	白色胎物 風化磁片	右 にじみ黄褐色 18YR5/4	褐色色 18YR4/1	特	J-8	
3	深鉢	胴部	---	縄文文? (表面の荒れが激しく不明)	横ナデ	白色胎物 風化磁片	右 暗褐色 5.YR5/6	にじみ赤紫 5.YR5/4	特	J-8	
4	深鉢	胴部	---	縄文文? (表面の荒れが激しく不明)	不明	白色胎物 風化磁片	右 褐色 7.5YR6/6	灰褐色 7.5YR5/2	特	J-8	

第22表 J-8号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

神田番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
5	石鏃?	硬質頁岩	4.0	2.1	1.0	6.5	石鏃?
6	刮片	---	1.9	2.5	0.7	2.1	微小片断あり



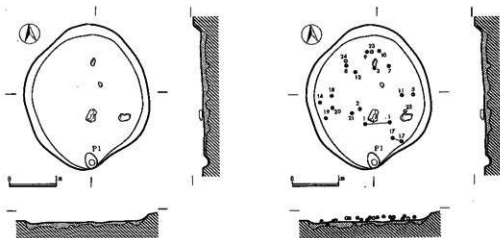
第38図 J-8号住居址出土遺物(2:3)



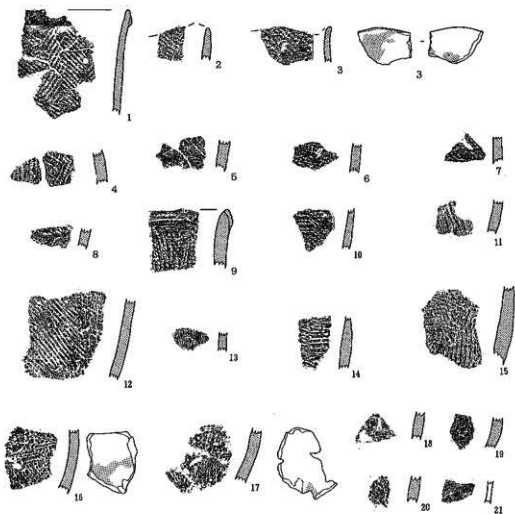
(9) J-9号住居址

住居址 第39図

本址はB-2グリッドにおいて検出された。プランは東西2.6m南北3.1mの不整楕円形を呈する。床面積は7.8㎡を測り、南北軸方向はN-0°を指す。壁は、残存高5-20cm程を測り、壁溝は



第39図 J-9号住居址実測図(1:80)



第40図 J-9号住居址出土遺物(1:4)

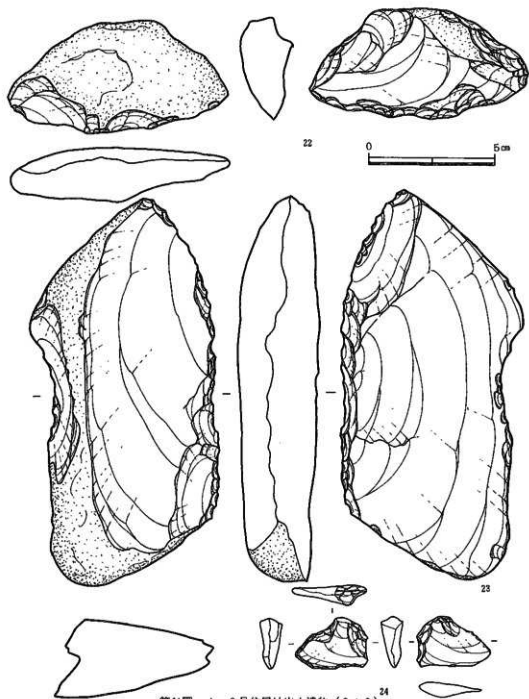
認められない。床面上には安山岩礫が認められた。床面はローム主体のにおい黄褐色土(10YR5/43層)を張った張床である。ピットは住居壁際にP₁が検出された。P₁は35×25×深さ10cmを測る。

地床炉等は認められていない。石器は23のスクレイパーが床面直上から検出されている。

遺物 第40・41図

土器は、尖底深鉢形土器の破片で、21の1点を除くといずれも繊維を含んでおりで、21点を図示した。

1～8は単筋縄文を施文する土器である。1は平縁で、肥厚口縁を呈する。口縁下には、LRとRLによる結束のない羽状縄文が施される。2・3はゆるい波状を成す口縁部で、RLが施文される。3の内外面には、一部に朱が見られる。4～8は胴部で、LR・RLによる結束のない羽状構成



第41図 J-9号住居址出土遺物(2:3)

第23表 J-9号住居址出土遺物一覽表<石器>

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	23	スクレイパー	刃	背	15.3	7.4	3.2	392.0
22	スクレイパー	頁	24	4.4	8.8	2.1	84.9		24	*	ホルンフェルス	2.0	2.9	0.9	3.7

第24表 J-9号住居址出土遺物一覧表(土器)

探出 番号	器種	部位	注 記	図形および文様	用 意 (内面)	胎 土	焼成	色 調		焼成 温度	土 質	備 考
								外 面	内 面			
1	深 鉢	口縁	---	平縁 器形あり。口縁部厚 薄文 R・L による羽状痕(肥厚部分に 施文)	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/4	灰褐色 10YR4/2	青	J-9	
2	深 鉢	口縁	---	平縁口縁 薄文 R・L	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	黄褐色 7.5YR4/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
3	深 鉢	口縁	---	平縁口縁 薄文 R・L	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	黄褐色 7.5YR4/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	内外面平縁 口縁部は薄文を 付し縁部は黄褐色
4	深 鉢	胴部	---	薄文 R・L による羽状痕	ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	黄褐色 7.5YR6/4	紅褐色 10YR3/1	青	J-9	
5	深 鉢	胴部	---	薄文 R・L (器面の凹凸が散しく不明)	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 YR6/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
6	深 鉢	胴部	---	薄文 R・L による羽状痕	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
7	深 鉢	胴部	---	薄文 R・L	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 10YR6/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
8	深 鉢	胴部	---	薄文 R・L による羽状痕	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片 小片	青	黄褐色 7.5YR4/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
9	深 鉢	口縁	---	平縁 口縁部厚 肥厚部に燃糸文 R・L 器面に燃糸文 L を施 文	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 10YR4/3	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
10	深 鉢	胴部	---	燃糸文 R・L	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 10YR4/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
11	深 鉢	胴部	---	R・L 2本の組み合わせによる燃糸文	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
12	深 鉢	胴部	---	燃糸文 L	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
13	深 鉢	胴部	---	燃糸文 R・L	不明	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
14	深 鉢	胴部	---	燃糸文 R・L (不明)	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 10YR6/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
15	深 鉢	胴部	---	R 2本の組み合わせによる燃糸文	不明	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/1	灰褐色 10YR4/2	青	J-9	
16	深 鉢	胴部	---	R・L 2本の組み合わせによる燃糸文	横ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	内面平縁部 (口縁部)に 付し縁部は 黄褐色
17	深 鉢	底縁	付文	R・L 2本の組み合わせによる燃糸文	ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	内面平縁部 付し縁部は 黄褐色
18	深 鉢	底縁	付文	燃糸文? (不明)	ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
19	深 鉢	底縁	付文	燃文	ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/1	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
20	深 鉢	胴部	---	燃文	ナテ	白色灰胎 風化石灰片	青	紅褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	青	J-9	
21	深 鉢	胴部	---	燃文	内外面 ナテ 無調整	白色灰胎 風化石灰片 小片	青	灰褐色 10YR4/2	灰褐色 10YR4/2	青	J-9	東海系薄土器

となるものがある(4・6・8)。9~17は燃糸文を施文する。9は肥厚口縁を呈する平縁の土器で、肥厚部に燃糸文 R、L をそれぞれ施文する。

10~17は胴部で、R と L を同一器面に施文したもの(10,13)、L を施すもの(12)、R 2本を合わせたもの(15)、R・L 2本を合わせた矢羽状の燃糸文(11,16,17)等が見られる。

18~21は無文土器と思われ、内外面にナテ調整を施している。21は東海系の薄い土器で、指痕が看取される。なお、3の内外面と16・17の内面には赤色顔料が付着していた(アミ点部)。

石器は3点を図示した。22・23・24は大中小のスクレイパーである。

時 期

本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。

(10) J-10号住居址

住居址 第42図

本址はB-2グリッドにおいて検出された。プランは、床面が残るのみで正確にはつかめないが、東西3.5m南北4mの不整円形を呈する。床面積は11.1㎡を測り、南北軸方向はN-0°を指す。壁は残存しておらず、壁溝は認められない。床面はローム主体のふい黄褐色土(10YR5/4)を張った張床である。

炉は、住居中央に50×45×深さ10cmのものがあり、焼土(1層)にふい橙色5YR7/4が認められた。

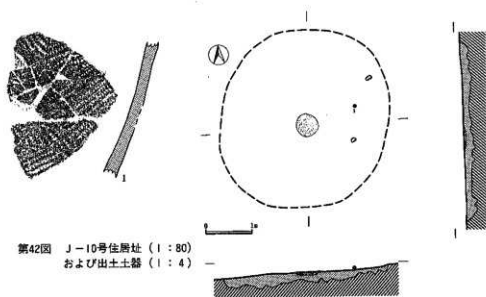
遺物 第42図

土器一片を図示し得たのみである。1はRL・LRの縄文の羽状構成をとるものである。

石器は図示しうるものはなかった。

時期

本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。



第42図 J-10号住居址 (1:80)
および出土土器 (1:4)

第25表 J-10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

遺物 番号	種類	部位	数量	形状および文様	陶質 (内面)	胎土	状態	色調		出土 層	備考
								外面	内面		
1	土器	破片	1	縄文RL・LRによる羽状構成	不明	白色土胎 黄褐色片	有	外面 7.5YR4/4	内面 10Y5/2	層	J-10

(11) J-11号住居址

住居址 第43図

本址はC-3グリッドにおいて検出された。プランは東西2.5m南北2.9mの不整形を呈する。床面積は4.6㎡を測り、南北軸方向はN-55°-Wを指す。壁は、残存する高さは5~10cm程を測るのみで、壁溝は認められない。床面はローム主体のふい黄褐色土(10YR5/4)を張った張床である。覆土は1層でロームをブロック状に含んだふい黄褐色土層(2層 10YR5/4)であった。住居の北壁際には安山岩の扁平礫が認められた。

地床炉は、住居中央に60×50×深さ10cmのものがあり、焼土(1層 ぶい橙色5YR7/4)が認められた。

遺物 第44・45図

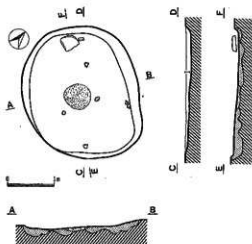
土器は7点を図示した。1~6は含繊維の尖底深鉢形土器の破片である。7は無繊維の薄手土器である。

1~4は単節縄文の施された土器で、この内4はLRとRLで羽状構成になる。5・6は燃糸文を施す土器で、5は燃糸文Lを、6はR・L2本を合わせた燃糸文を施文している。7は東海系の薄い無文土器で、指頭痕の他軽妙な擦痕状の調整が施される。

石器は3点を図示した。8はチャートの石鏃、9は珪質頁岩の剥片、10は硬質頁岩の石核である。おそらく石鏃などの小形剥片石器の素材をとる母核であろう。

時期

本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。



第43図 J-11号住居址 (1:80)

第26表 J-11号住居址出土遺物一覧表 (土器)

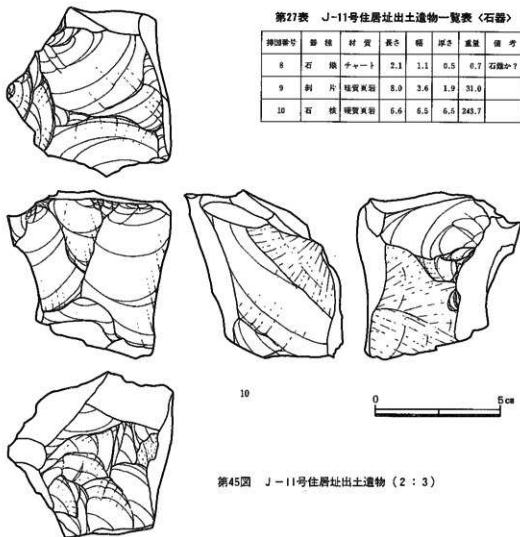
遺物 番号	器種	部位	形状	器形および文様	製法 (内面)	胎土	磁締	色調		構成	土層	備考
								外面	内面			
1	鉢	胴部	---	褐色文	横ナデ	白色磁物 灰化胎片	有	紅褐色 7.5YR5/4	灰褐色 10YR4/2	管	J-11	
2	鉢	胴部	---	褐色文	横ナデ	白色磁物 灰化胎片	有	紅褐色 7.5YR5/4	灰褐色 10YR4/2	管	J-11	
3	鉢	胴部	---	褐色文	横ナデ	白色磁物 灰化胎片	有	紅褐色 7.5YR5/4	灰褐色 10YR4/2	管	J-11	
4	鉢	胴部	---	褐色文L・L2による斜線模様	横ナデ	白色磁物 灰化胎片	有	紅褐色 7.5YR5/4	灰褐色 10YR4/2	管	J-11	
5	高脚 付皿	---	---	褐色文L・L2による斜線模様	ナデ	白色磁物 灰化胎片	有	紅褐色 7.5YR5/4	灰褐色 10YR4/2	管	J-11	
6	鉢	胴部	---	褐色文、斜線筋あり	ナデ	白色磁物 灰化胎片	無	灰褐色 10YR4/2	灰褐色 10YR4/1	管	J-11	東海大学蔵出土 品
7	鉢	胴部	---	黒・L2の本の粗点文による褐色文	横ナデ	白色磁物 灰化胎片	有	紅褐色 7.5YR5/4	灰褐色 10YR4/1	管	J-11	



第44図 J-11号住居址出土遺物
(土器 1 : 4、石器 2 : 3)

第27表 J-11号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	石 楯	チャート	2.1	1.1	0.5	0.7	石鏃か?
9	刮 片	硬質頁岩	8.0	3.6	1.9	31.0	
10	石 核	硬質頁岩	6.6	6.5	6.5	243.7	



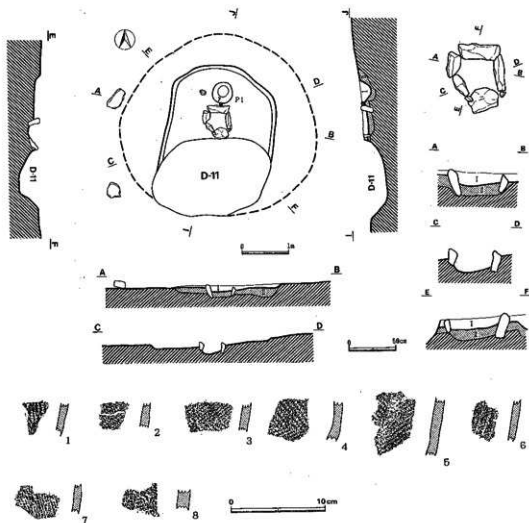
第45図 J-11号住居址出土遺物 (2:3)

(12) J-12号住居址

住居址 第46図

本址はC-3グリッドにおいて検出された。その南側をD-11に切られている。プランは推定で東西4.2m南北3.9mの不整形を呈する。床面積は12.6㎡を測り、南北軸方向はN-0°を指す。壁はほとんど残存しておらず、壁溝は認められない。床面はローム主体の暗褐色土層(10YR3/3)を張った張床である。覆土I層は黒色土層(10YR2/1)で若干のローム粒子を含む。ピットは炉の脇に45×45×深さ10cmのP₁が認められた。

炉は、住居中央に内寸30×30×深さ10cmの石囲炉があり、5個の安山岩礫が用いられていた。



第46図 J-12号住居址 (1:80)・炉 (1:40)・出土遺物 (1:4)

その覆土は焼土やカーボンを含まない黒褐色土層 (10YR3/2) であった。

遺物 第46・47図

土器は8点のみを図示した。尖底深鉢形土器の破片で、いずれも繊維を含んでいる。

1～5は単節縄文を施す。3～5は、RLとLRによる結束のない羽状縄文が施される。6・7は燃糸文で、R・L 2本を合わせた矢羽状の燃糸文 (6)、L (7) が見られる。8は不鮮明な土器で、縄文又は燃糸文が施文されたと思われる。

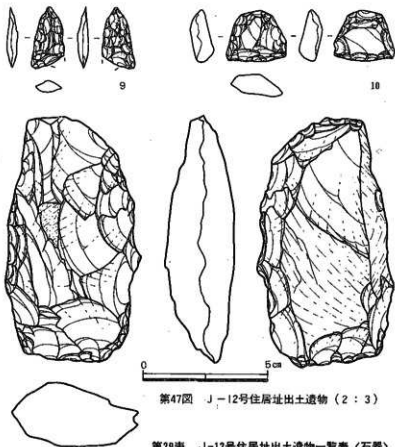
石器は3点を図示した。9は硬質頁岩の石鏃、10は石鏃の未成品、11はホルンフェルスの片刃石斧である。

第28表 J-12号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

発掘番号	種別	部位	注記	形状および文様	調査窓 (内径)	出土 位置	色調		焼成	土層	備考
							外面	内面			
1	鉢	胴部	---	縄文LR	横ナデ	自然産物 風化碎片	有	12.25×7.5 7.5YR5/4	焼成色 10YR6/1	黄	J-12
2	鉢	胴部	---	縄文LR 胴部	横ナデ	自然産物 風化碎片	有	焼成色 10YR3/1	黄褐色 10YR5/1	黄	J-12
3	鉢	胴部	---	縄文LR・LRによる羽状焼成	横ナデ	自然産物 風化碎片	有	12.25×7.5 7.5YR5/4	焼成色 10YR6/1	黄	J-12
4	鉢	胴部	---	縄文LR・LRによる羽状焼成	不明	自然産物 風化碎片	有	12.25×7.5 7.5YR5/4	焼成色 10YR6/1	黄	J-12
5	鉢	胴部	---	縄文LR・LRによる羽状焼成	横ナデ	自然産物 風化碎片	有	12.25×7.5 7.5YR5/4	焼成色 10YR6/1	黄	J-12
6	鉢	胴部	---	L・R 2本の痕跡のみによる基本文	不明	自然産物 風化碎片	有	12.25×7.5 7.5YR5/4	焼成色 10YR6/1	黄	J-12
7	鉢	胴部	---	縄文文		自然産物 風化碎片	有	焼成色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR6/2	黄	J-12
8	鉢	胴部	---	縄文LR? (不明)	不明	自然産物 風化碎片	有	焼成色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR6/2	黄	J-12

時期

本址は、他の縄文時代前期初頭の住居に比べると石囲炉を持つ点で異質である。土器資料が少なくその位置付けにやや難があるが、本遺跡でまったく他の時期の縄文遺物が検出されていない事実をふまえると、とりたてて他と時期を異にするものとは考えられない。



第47図 J-12号住居址出土遺物(2:3)

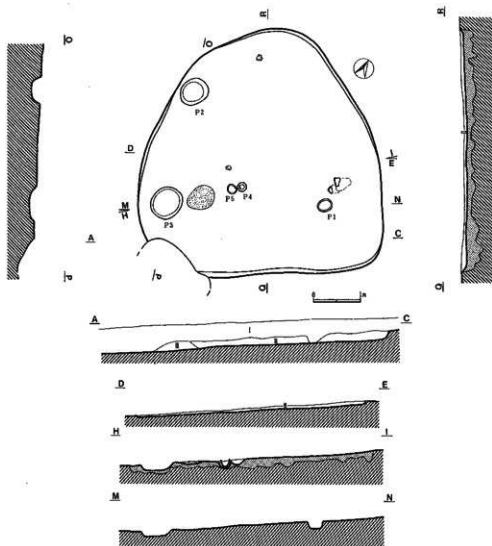
第29表 J-12号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

発掘番号	種別	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
9	石	硬質頁岩	2.5	1.3	0.4	1.0	
10	?	?	2.0	2.4	0.8	6.1	未完成品?
11	打製石片	ホルンフェルス	9.9	5.4	2.8	151.4	片刃

(13) J-13号住居址

住居址 第48・49図

本址はC-3グリッドにおいて検出された。プランは東西5.1m南北5.1mのオニギリ形を呈する。床面積は21.0㎡を測り、他の住居の倍ちかい面積をもつ。南北軸方向はN-35°-Wを指す。壁は最高で15cm残存しており、壁溝は認められない。床面はローム主体のにおい黄褐色土(10YR5/43層)を張った張床である。ピットは5基が検出された。P₁は30×25×深さ15cm、P₂は60×50×深さ15cm、P₃は70×60×深さ10cm、P₄は15×15×深さ10cm、P₅は20×20×深さ15cmを測



第48図 J-13号住居址実測図(1:80)

る。P₄とP₅は住居中央に並んでおり、P₅中には1の土器が据えられていた。

住居の覆土は3層に分層された。I層は全体層序I層の暗褐色耕作土(10YR3/3)、II層はロームをブロック状に含む黒褐色土層(10YR2/2)、III層はバミスを含む黒褐色土層(10YR2/2)である。

地床炉は、P₂とP₃中間に60×50×深さ5cmのものがあり、焼土(1層 ぶい橙色5YR7/4)が認められた。

遺物 第50~52図

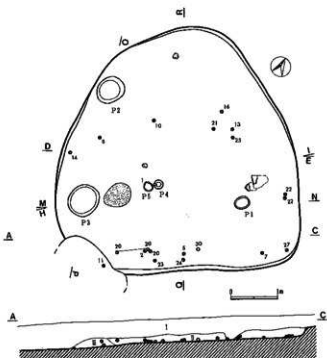
土器は27点を図示した。1はP₅に埋設されていた含繊維の尖底土器の胴下半部で、剥落が激しいが縄文RLが観察される。

2~18・20・21は単節縄文が施される。2~3は平線で、2・3は肥厚口縁を呈している。いずれも、RLが施文される。5は頸部の破片と思われる、縄文RLを地文とし、棒状工具でハの字状の刻みを行っている。6~18・20・21は胴部の破片で、14・15・16は結束のない羽状縄文を施文する。12は縄文の条が縦方向に走る。21は器面の状態が悪く不鮮明だが、単節縄文を施文していると思われる。19は底部で、RとLの無節縄文が施される。

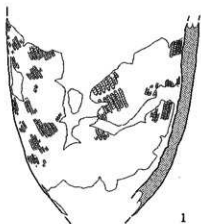
22~26は撚糸文の土器である。23は平線の土器で、RとLの2本を合わせたE撚糸文が横位に施される。その他は胴部で、RとLを合わせたもの(22)、L(24・25)が見られる。26も撚糸文が施文されると思われるが、器面状態が悪く明確でない。

27は東海系の薄手無文土器で、内外面に指頭痕が見られる。

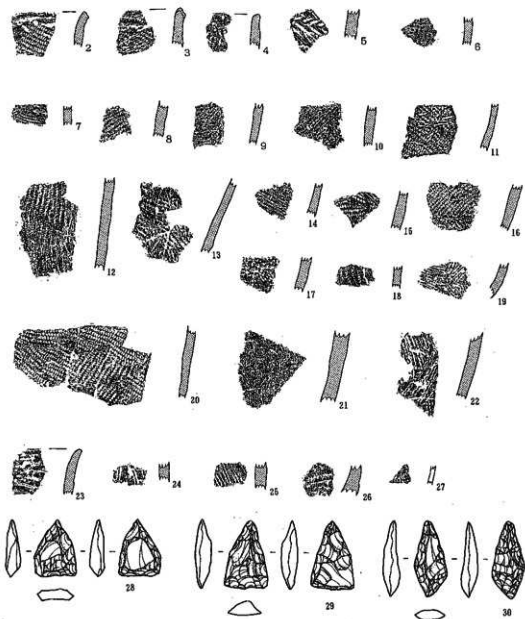
石器は5点を図示した。28~30はチャートの石鏃であるが、30はあるいは石錐の可能性もある。



第49図 J-13号住居址遺物分佈(1:80)



第50図 J-13号住居址出土土器(1:4)



第51図 J-13号住居址出土遺物（土器=1:4、石器=1:3）

31はヒエスエスキュー、32は頁岩の標器である。

時期

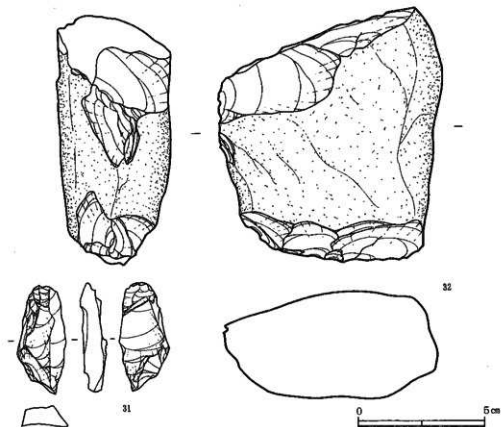
本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。

第30表 J-13号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

検出番号	器種	部位	形状	形跡および文様	調製 (内面)	胎土	状態	色調		構成	出土 位置	備考
								外 面	内 面			
1	注 17	底面	---	刷文瓦	ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 7.5YR6/4	骨	J-13	
2	注 15	口縁	---	平縁 内面刷毛 刷文瓦	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒色 10YR2/1	骨	J-13	
3	注 16	口縁	---	平縁 内面刷毛 刷文瓦	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR3/3	黒褐色 10YR3/1	骨	J-13	
4	注 16	口縁	---	平縁 刷文瓦	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR3/3	黒褐色 7.5YR3/3	骨	J-13	
5	注 15	胴部	---	赤灰ヤシによるへの字状の刷文 刷文瓦	ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 10YR5/4	黒褐色 10YR4/1		J-13	
6	注 16	胴部	---	刷文上縁・Lによる刷毛模様	ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
7	注 14	胴部	---	刷文瓦	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR3/3	黒褐色 10YR3/1	骨	J-13	
8	注 16	胴部	---	刷文上縁	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR3/3	黒褐色 10YR3/1	骨	J-13	
9	注 15	胴部	---	刷文上縁	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR3/3	黒色 10YR2/1	骨	J-13	
10	注 14	胴部	---	刷文上縁	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	骨	J-13	
11	注 14	胴部	---	刷文瓦	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	骨	J-13	
12	注 15	胴部	---	刷文瓦	横ナテ 筒状の穴	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	骨	J-13	
13	注 15	胴部	---	刷文瓦	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR4/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
14	注 14	胴部	---	刷文瓦・Lによる刷毛模様	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR4/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
15	注 16	胴部	---	刷文瓦・Lによる刷毛模様	不明	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	骨	J-13	
16	注 16	胴部	---	刷文瓦・Lによる刷毛模様	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
17	注 16	胴部	---	刷文上縁	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR4/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
18	注 14	胴部	---	刷文瓦	ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR4/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
19	注 16	胴部	---	刷文瓦・L	ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR6/6	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
20	注 16	胴部	---	刷文瓦の方向による刷毛模様	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	骨	J-13	
21	注 15	胴部	---	刷毛模様がL(断面の裏側が直しく不明)	ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
22	注 16	胴部	---	H・L 2本の組み合わせによる刷毛文	ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR4/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
23	注 16	口縁	---	平縁 H・L 2本の組み合わせによる刷毛文	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR3/3	黒褐色 10YR3/1	骨	J-13	
24	注 16	胴部	---	刷毛文しかく(不明)	ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
25	注 16	胴部	---	刷毛文L	横ナテ	白色磁胎 黒化石灰	有	じぶい褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR4/2	骨	J-13	
26	注 16	胴部	---	刷毛文L(断面の裏側が直しく不明)	不明	白色磁胎 黒化石灰	有	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	骨	J-13	
27	注 14	胴部	---	刷文	内外共に筒状 小皿	白色磁胎 黒化石灰	無	黒褐色 10YR3/1	じぶい褐色 7.5YR5/4	骨	J-13	黒褐色滑手土器

第31表 J-13号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
28	石 錐	チャート	2.2	1.7	0.6	2.1		31	ヒニエス ヌキ	硬質頁岩	4.3	2.0	0.9	6.4	
29	#	#	2.7	1.8	0.6	2.4		32	礫 器	頁岩	10.0	8.9	4.3	522.1	
30	#	#	3.0	1.3	0.7	2.6									



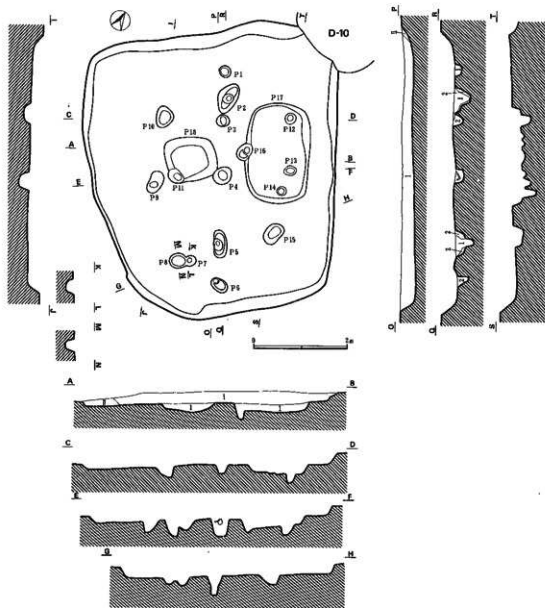
第52図 J-13号住居址出土遺物(2:3)

(14) J-14号住居址

住居址 第53・54図

本址はC-4グリッドにおいて検出された。その北コーナーがD-10と重複するが、新旧関係はとらえられない。プランは東西5.2m南北6.1mの不整形方を呈する。床面積は25.7㎡を測り下弥堂遺跡では最大である。南北軸方向はN-43°-Wを指す。残存壁高は10~35cm程を測り、壁溝は認められない。覆土は2層に分層され、I層が黒色土層(10YR2/1)、II層が若干のカーボンを含む黒色土層(10YR1.7/1)であった。

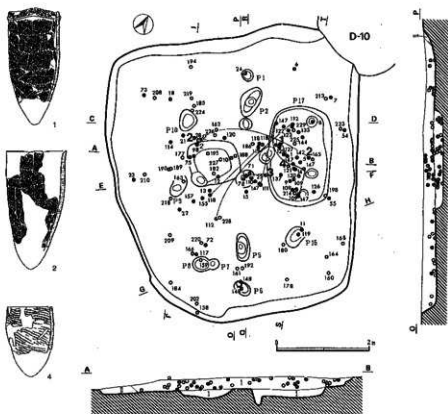
ピットは18基検出された。P₁~P₁₆が柱穴等、P₁₇・P₁₈は住居内土坑である。P₁が25×25×深さ10cm、P₂が70×40×深さ35cm、P₃が30×25×深さ20cm、P₄が40×35×深さ15、P₅が60×30×深さ20cm、P₆が40×25×深さ20cm、P₇が20×20×深さ15、P₈が40×35×深さ20cm、P₉が50×25×深さ20cm、P₁₀が50×40×深さ15cm、P₁₁が40×30×深さ35cm、P₁₂が25×25×深さ35cm、P₁₃が30×20×深さ30cm、P₁₄が25×25×深さ50cm、P₁₅が50×30×深さ20cm、P₁₆が40×30×深さ30cm、P₁₇



第53図 J-14号住居址実測図 (1:80)

が210×190×深さ30cm、P₁₈が110×95×深さ20cmを測る。ピットは、A-B・C-Dラインで東西にならび、Q-R・J-I・S-Tラインで南北にならんでいる。ピット内の覆土は、1層がロームをブロック状に含む黒褐色土層(10YR2/2)、2層がロームを多く含む黒褐色土層(10YR2/3)であった。地床が等は、認められなかった。

住居中央の床面上からは磨石数個が出土している。



第54図 J-14号住居址遺物分布図(1:80)

遺物 第55-67図

土器資料は、他の住居と比べると最も豊富である。図示したのは157点である。

1は底部を失うが遺存状況の良好なもので、2単位の波状口縁に沿って隆帯が貼り付けられ、胴部にはLR・RLの羽状構成による縄文が施されている。

2は平縁の土器で底部を欠く。胴部にはLR・RLの羽状構成による縄文が施されている。

3は平縁の土器で口縁に沿って一条の隆帯が貼り付けられ胴部にはLR・RLの羽状構成による縄文が施されている。

4は平縁の小形品で、器面には0段の摺糸文が施こされる土器である。底部を欠く。

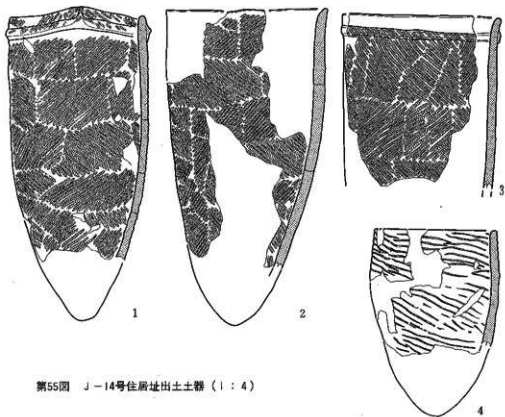
5~120は、縄文を施文する土器である。5~23は口縁部で、5・9・10・14・17・18・20・22・23に隆帯が見られる。隆帯は、低く太目のもの(5)、タテまたはナナメの刻みを持つもの(9・10・17・18・20・22・23)、一端が口唇部より垂れ下がり、水平に巡ると思われるもの(14)が存

在する。14は隆帯を持たない土器であるが、ナナメの刻みを入れる事により、隆帯を持つ土器と同様の効果を出している。

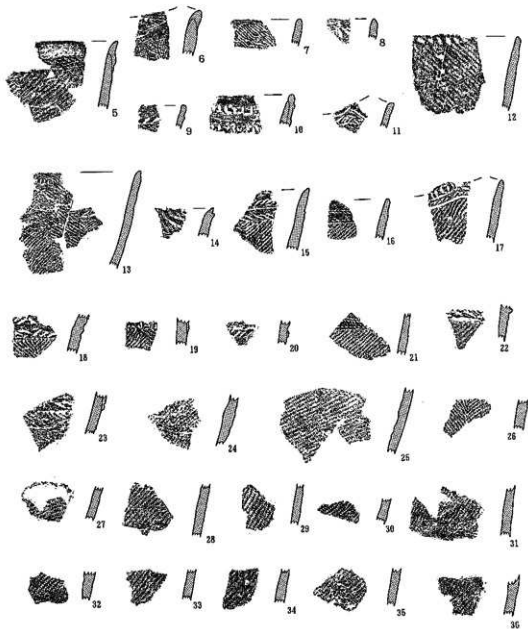
6・7・8・11・12・13・15・16・19・21は隆帯を持たない口縁部で、縄文Rを施文するもの(7)、口唇部下に縄文原体によるものと思われる判突を行い、以下縄文RLを施文するもの(12)、ナナメの沈線及び縦位の刻みを持つもの(13)、R・L2本を合わせた撚糸の側面圧痕を施すもの(16・21)が見られる。11は波状口縁の土器で、沈線及びナナメの刻みで文様を構成する。その他6・17が波状口縁を呈している。

24~120は単節縄文を施す土器で、71~91・110~112・114・115・117~120は、RLとLRの羽状構成を成している。109は胴下半部で、同一原体の方向差により、羽状構成を成すと思われる。89~93・98・119・120の様に、結節が認められるものが存在する。

121~152は撚糸文を施文する。121~127は口縁部で、波状口縁の可能性のある123以外は平縁となる。121~125・127には、太くて低い不明瞭な隆帯を巡し、その上に撚糸文を施文する。126は隆帯を持たない土器で、口唇部下より撚糸文を施文している。129~152は撚糸文を施す胴部の破片で、R・L2本を合わせた撚糸文を施すものが殆どである。その他、撚糸L(143)、L2本を



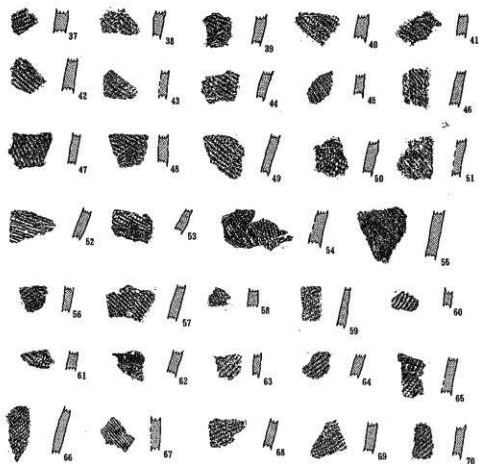
第55図 J-14号住居址出土土器(1:4)



第56図 J-14号住居址出土遺物 (1:4)

合わせたもの(129)、0段L2本と、L2本をそれぞれ合わせたものを同一器面に施すもの(130)が見られる。

153-157は無文土器である。繊維を含む厚手のもの(153)、薄手のもの(154・155)、東海系の薄手無文土器(156・157)がある。

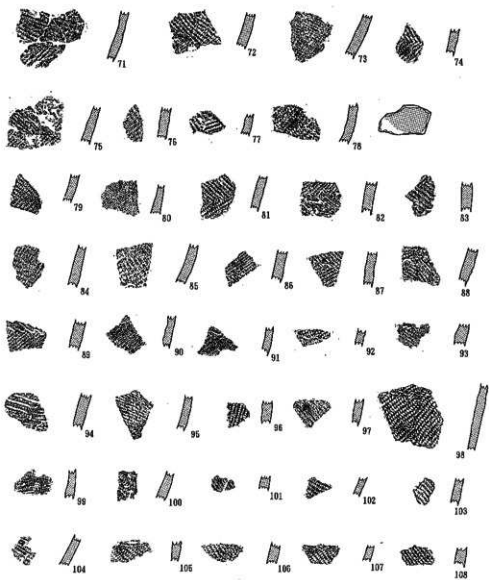


第57図 J-14号住居址出土遺物(1:4)

なお78の内面には赤色顔料の付着が認められる。

石器も土器と同様、他の住居と比べるとかなり豊富に出土している。図示したのは71点である。158から181は石鏃である。円基・平基のものがある。182・183は石錐、184～186はスクレイパー、187～192は両面加工石器としたが、スクレイパーというより石鏃の未成品と考えたほうがよさそうである。193～205は加工痕のある剥片、207～222はヒエスエスキューである。これら小形石器の石材には硬質頁岩・チャートが多く用いられており、黒曜石はあまりみられない。

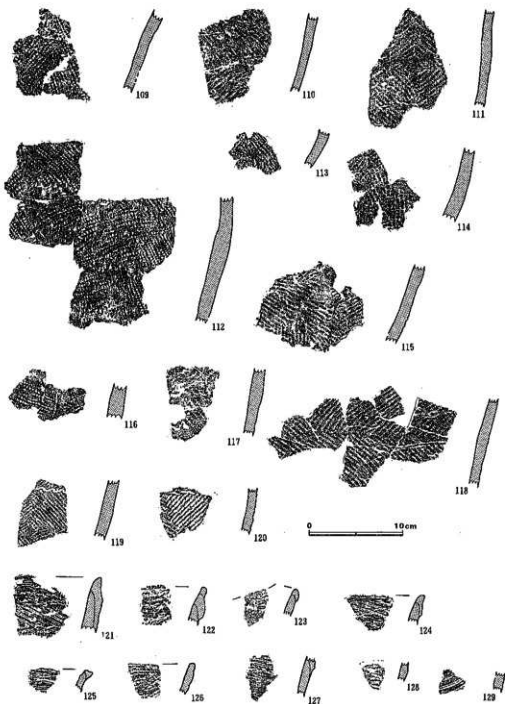
223は尖頭状礫器、224は石核、225は両刃のスクレイパーでいずれもガラス質安山岩である。226～228は、安山岩の磨石である。229は礫器である。



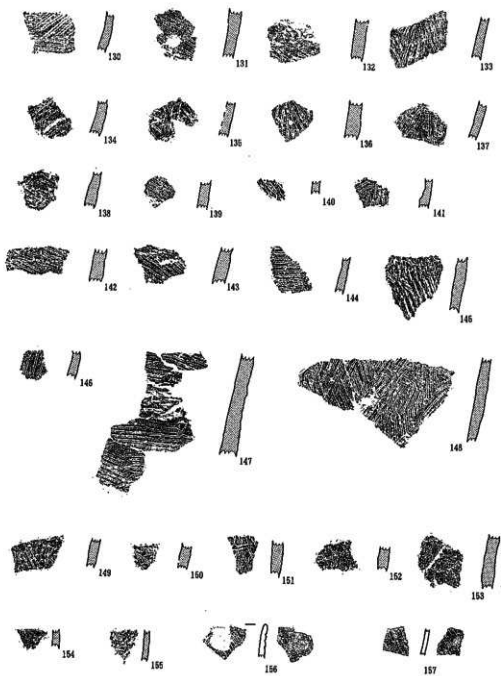
第58図 J-14号住居址出土遺物 (1:4)

時 期

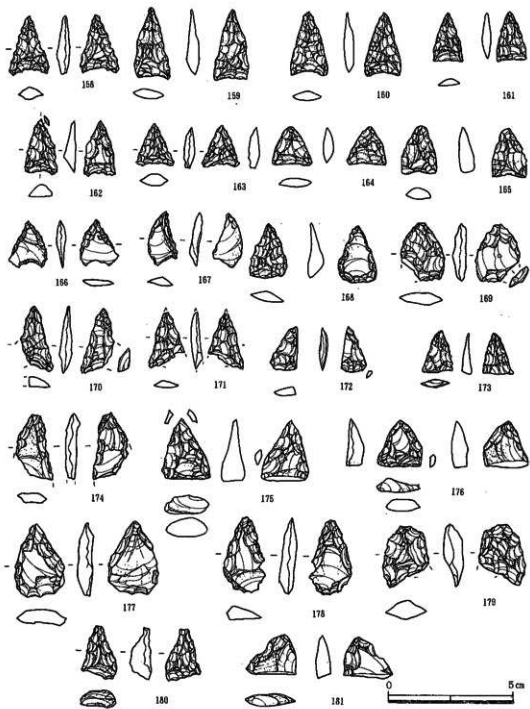
本址は土器資料をもって、縄文時代前期初頭に位置付ける事ができよう。



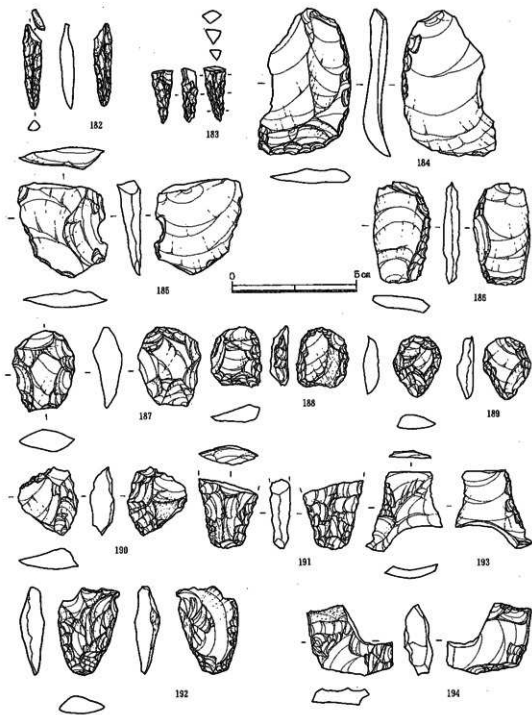
第59圖 J-14号住居址出土遺物(1:4)



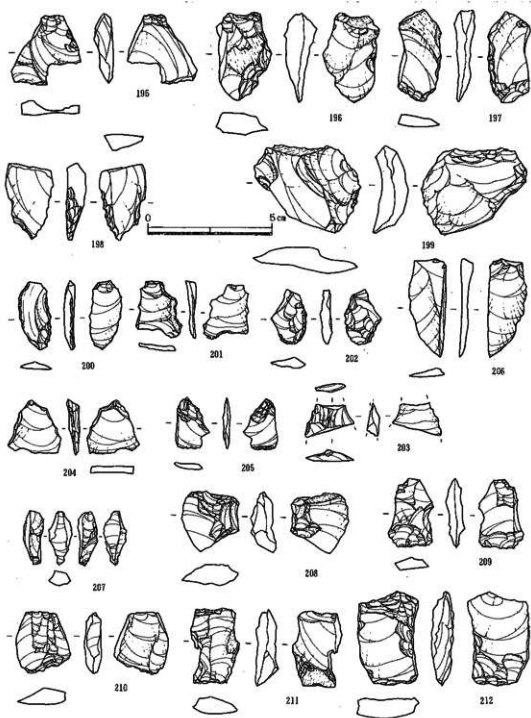
第60图 J-14号住居址出土遺物 (1:4)



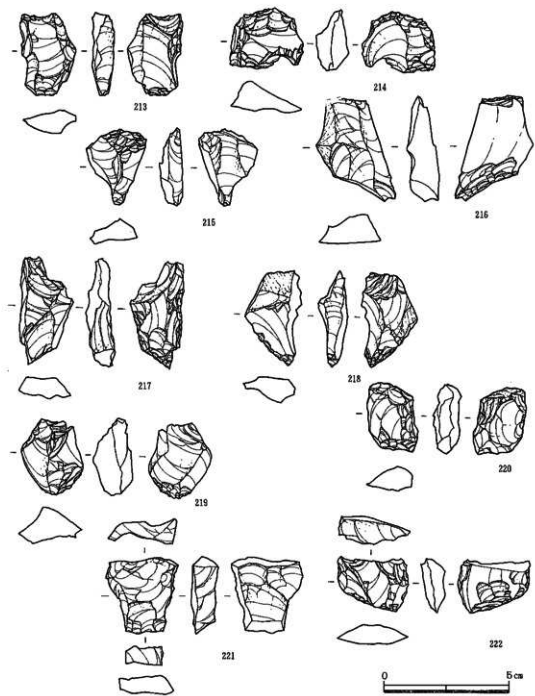
第61圖 J-14号住居址出土遺物(1:4)



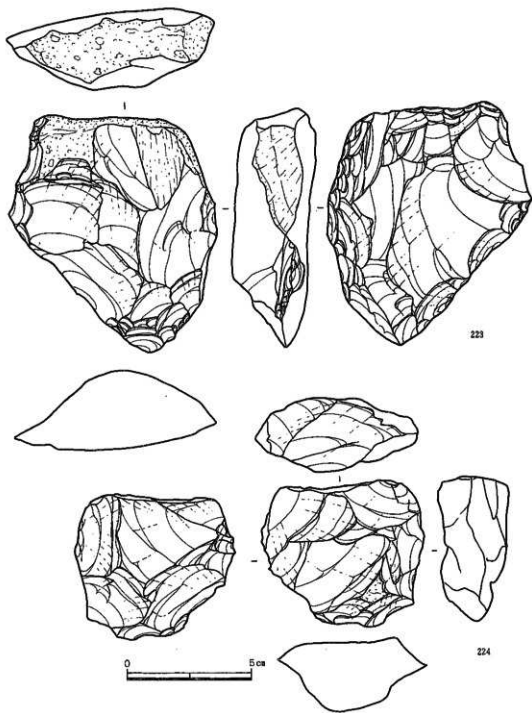
第62图 J-14号住居址出土遗物(1:4)



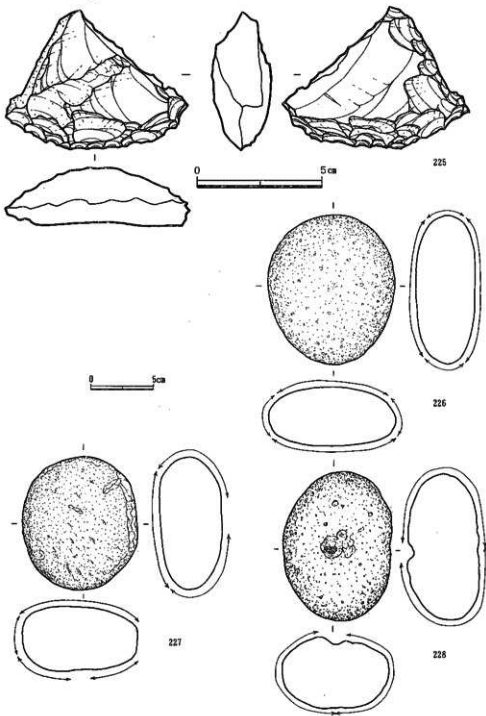
第63图 J-14号住居址出土遗物(1:4)



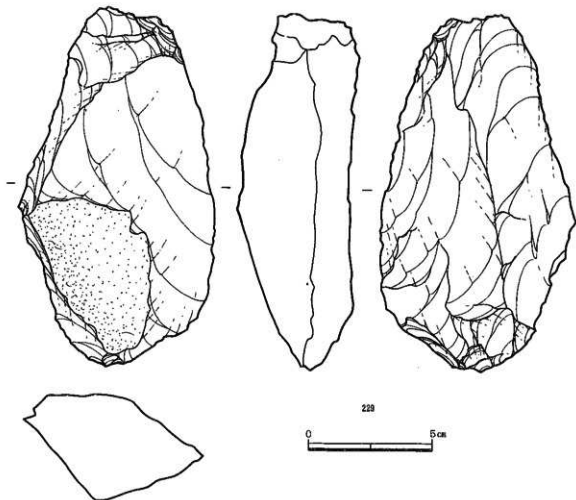
第64图 J-14号住居址出土遺物 (1:4)



第65图 J-14号住居址出土遗物(1:4)



第66图 J-14号住居址出土遗物 (1:4)



第67図 J-14号住居址出土遺物(2:3)

第32表 J-14号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
158	石	珉	2.3	1.6	0.5	1.1		164	石	珉	1.5	1.5	0.4	0.6	
159	※	燧石	2.8	1.4	0.5	1.1		165	※	チャート	1.9	1.4	0.6	1.3	
160	※	※	2.5	1.5	0.4	1.1		166	※	燧石	1.8	1.6	0.3	0.5	
161	※	※	1.9	1.2	0.3	0.5		167	※	チャート	2.1	1.3	0.3	0.6	
162	※	※	2.2	1.3	0.5	1.0		168	※	燧石	2.1	1.5	0.6	1.3	
163	※	チャート	1.6	1.5	0.4	0.8		169	※	黒曜石	2.3	1.7	0.5	1.6	

第33表 J-14号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

標本番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	標本番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
170	石 鏃	チャート	2.5	1.3	0.5	1.1		200	加工痕のある割片	硬質頁岩	2.7	1.8	0.4	1.3	
171	＊	＊	2.2	1.4	0.4	0.8		201	＊	＊	2.1	1.8	0.3	1.1	
172	＊	頁 岩	1.7	1.0	0.3	0.4		202	＊	玉 髓	2.1	1.4	0.4	1.2	
173	＊	チャート	1.6	1.2	0.3	0.5		203	＊	チャート	1.3	1.9	0.5	0.9	
174	＊	＊	2.6	1.4	0.4	1.5		204	＊	硬質頁岩	2.1	2.1	0.4	1.6	
175	＊	＊	2.4	1.9	0.9	3.2		205	＊	＊	2.0	1.3	0.3	0.7	
176	＊	硬質頁岩	1.8	1.8	0.6	1.9		206	割 片	＊	2.8	1.5	0.5	1.9	
177	＊	＊	2.9	2.0	0.6	3.5		207	ビススユ スキュー	＊	2.1	0.9	0.8	1.2	
178	＊	＊	3.0	1.7	0.6	2.5		208	＊	＊	2.4	2.3	0.9	4.9	
179	＊	チャート	2.4	1.9	0.7	3.3		209	＊	＊	2.7	1.8	0.6	2.8	
180	＊	＊	2.1	1.4	0.8	1.9		210	＊	＊	2.1	2.8	1.1	4.7	
181	＊	硬質頁岩	1.6	2.0	0.4	1.7		211	＊	＊	2.5	2.2	0.7	3.9	
182	石 鏃	＊	2.3	0.7	0.5	1.4		212	＊	＊	3.0	2.0	0.8	4.7	
183	＊	チャート	2.1	0.9	0.7	1.0		213	＊	＊	3.7	2.4	0.8	9.2	
184	スクレイ パー	ガラス質 安山岩	5.8	3.6	0.8	15.7		214	＊	＊	3.2	2.3	0.8	7.3	
185	＊	＊	3.7	3.5	0.8	11.4		215	＊	＊	2.4	2.9	1.2	6.6	
186	＊	＊	4.0	2.2	0.6	7.0		216	＊	＊	3.0	2.4	0.9	4.7	
187	加工 品	頁 岩	3.2	2.5	1.1	7.0	石器係品 もしくはス クレイパー	217	＊	＊	4.1	3.1	1.1	9.6	
188	＊	硬質頁岩	2.4	2.0	0.7	4.4	＊	218	＊	＊	4.3	2.1	1.0	7.9	
189	＊	ガラス質 安山岩	2.4	1.9	0.6	3.1	＊	219	＊	＊	3.7	2.2	1.1	6.2	
190	＊	チャート	2.6	2.4	1.0	5.1	＊	220	＊	チャート	3.0	2.4	1.5	9.5	
191	＊	＊	2.7	2.3	0.8	4.2	＊	221	＊	＊	2.6	2.0	1.0	6.7	
192	＊	硬質頁岩	3.4	2.4	1.0	6.1	＊	222	＊	＊	3.0	2.8	1.0	9.9	
193	加工痕の ある割片	＊	3.1	2.5	0.3	3.6		223	尖 頭 状 器	ガラス質 安山岩	105.5	81.5	39.5	270	
194	＊	＊	2.7	3.3	1.0	6.7		224	石 槌	＊	57.0	62.7	29.3	120	
195	＊	＊	2.7	2.7	0.7	4.0		225	スクレイ パー	＊	5.5	7.2	2.2	76.9	
196	＊	＊	3.5	2.2	1.2	7.4		226	磨 石	安山岩	11.9	10.0	4.7	798.1	
197	＊	＊	3.6	1.7	0.8	4.1		227	＊	＊	10.7	9.1	5.2	718.3	
198	＊	ガラス質 安山岩	3.0	1.9	0.7	3.6		228	＊	＊	11.7	8.6	5.7	750.1	
199	＊	硬質頁岩	3.4	4.2	1.0	14.2		229	磨 器	ホルン フェルス	14.2	7.8	4.5	493	

第34表 J-14号住居址出土遺物一覧表(土器)

図録番号	器種	部位	品名	部形および文様	別名(内面)	胎土	色調		組成	出土層	備考
							外面	内面			
1	図録	口縁	14.8	2半片流紋口縁 胎質三角形の胎質を口縁部にかけて認め、基部部にて三角形に流紋する。褐色 LK・LR による羽状模造	コノ方向のナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR6/2	黄	J-14
2	図録	口縁	(17.2)	平縁 褐色 LK・LR による羽状模造	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR6/4	黄	J-14
3	図録	口縁	16.5	平縁 口縁部に沿って胎質を流らす 白粉層一部帯間に褐色層を形成する段層上 一帯部に褐色 LK・LR を施文	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR6/4	黄	J-14
4	図録	口縁	15.2	平縁 口縁部の胎質	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR6/2	黄	J-14
5	図録	口縁	---	平縁 口縁部に沿って、胎質を流らす 口縁部一部帯間に褐色層を持つ 胎質上へ胎 部に褐色 LK	ナゲか?	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR6/2	黄	J-14
6	図録	口縁	---	流紋口縁 口縁部胎質 褐色 LK	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/3	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
7	図録	口縁	---	平縁 褐色 LK	横ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/1	褐色色 10YR6/2	黄	J-14
8	図録	口縁	---	平縁 胎質褐色 LK (不明)	横ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 7.5YR6/3	褐色色 10YR6/2	黄	J-14
9	図録	口縁	---	平縁 口縁部に沿って、ナメの胎質を持つ 胎質を流らす	ナゲ?	白色胎質 黒化灰片	青	明褐色色 10YR6/6	明褐色色 10YR7/6	黄	J-14
10	図録	口縁	---	平縁 口縁部に沿って胎質の胎質を持つ 胎質を流らす (コノ方向の胎質の胎質が 胎質である)	不明	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
11	図録	口縁	---	流紋口縁 口縁部に沿って、1条の流紋を また、胎質を流らす下で流すナメの胎 質を流らす胎質 LK	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	明褐色色 7.5YR6/6	褐色色 7.5YR6/1	黄	J-14
12	図録	口縁	---	平縁 口縁部胎質下に褐色 胎質を胎質 褐色 LK	不明(胎質胎 胎質)	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 7.5YR6/6	褐色色 7.5YR6/1	黄	J-14
13	図録	口縁	---	平縁 口縁部胎質下にナメの流紋 流紋下 に胎質の胎質 褐色 LK・LR による羽状模造	ナゲ?	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/6	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
14	図録	口縁	---	平縁 口縁部に沿って胎質の胎質がナメ に胎質を流らす 胎質上に胎質を流らす 褐色 LK	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/1	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
15	図録	口縁	---	平縁 胎質を流らすナメの胎質流紋及び 口縁部の胎質を胎質 LK	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
16	図録	口縁	---	平縁 LK・LR 胎質の胎質による胎質を 胎質する。また、胎質文下に胎質を行う	不明	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/6	明褐色色 10YR6/6	黄	J-14
17	図録	口縁	---	流紋口縁 胎質の胎質を持つ胎質を、口縁 部に沿って流らすと胎質を胎質。胎質に 平行して胎質の胎質を胎質する褐色 LK	不明	白色胎質 黒化灰片	青	明褐色色 7.5YR6/6	褐色色 7.5YR6/1	黄	J-14
18	図録	口縁	---	平縁か? 胎質を流らす胎質を流らす2条の 胎質を、口縁部に沿って流らすと胎質を 胎質 LK・LR による胎質を胎質	ナゲ?	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 10YR6/3	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
19	図録	口縁	---	口縁部より胎質を流らす胎質の胎質の下 胎質を、胎質を流らす胎質に胎質を胎質に 胎質 LK・LR による胎質を胎質	不明	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/2	褐色色 7.5YR6/1	黄	J-14
20	図録	口縁	---	口縁部に沿ってナメの胎質を持つ胎質を 胎質する胎質 LK	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	明褐色色 7.5YR6/6	褐色色 7.5YR6/1	黄	J-14
21	図録	口縁	---	平縁 LK・LR 胎質の胎質を胎質する胎質 また、胎質文下に胎質を行う 褐色 LK	不明	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/2	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
22	図録	口縁	---	ナメの胎質を胎質 胎質を胎質する胎質 褐色 LK	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	明褐色色 7.5YR6/6	褐色色 7.5YR6/1	黄	J-14
23	図録	口縁	---	ナメの胎質を持つ胎質の胎質を胎質する胎質 褐色 LK	ナゲ及びナメ の胎質胎質	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR6/2	黄	J-14
24	図録	口縁	---	褐色 LK	ナゲ及び胎質 胎質胎質	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 7.5YR6/6	褐色色 7.5YR6/1	黄	J-14
25	図録	口縁	---	褐色 LK	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	明褐色色 7.5YR6/6	褐色色 7.5YR6/1	黄	J-14
26	図録	口縁	---	褐色 LK・LR による胎質胎質	ナゲ及び胎質 胎質胎質	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
27	図録	口縁	---	褐色 LK	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/2	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
28	図録	口縁	---	褐色 LK	ナゲ及び胎質 胎質胎質	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/2	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
29	図録	口縁	---	褐色 LK の胎質胎質	不明	白色胎質 黒化灰片	青	にじみ褐色 10YR6/3	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
30	図録	口縁	---	褐色 LK	ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	褐色色 10YR6/2	褐色色 10YR6/1	黄	J-14
31	図録	口縁	---	褐色 LK	横ナゲ	白色胎質 黒化灰片	青	明褐色色 7.5YR6/6	褐色色 10YR6/1	黄	J-14

第35表 J-14号住居址出土遺物一覧表(土器)

図号	種別	部位	形状	器形および名称	調査 (内面)	胎土	色調		焼成	土質	備考
							外 面	内 面			
32	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	にじみ-黄褐色 10YR8/4	黄褐色 10YR5/1	特	J-14
33	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	にじみ-黄褐色 10YR5/3	黄褐色 10YR5/1	特	J-14
34	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ?	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR6/1	特	J-14
35	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR6/1	特	J-14
36	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR6/1	特	J-14
37	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	褐色 7.5YR6/6	黄褐色 7.5YR6/1	特	J-14
38	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 10YR6/6	黄褐色 10YR5/1	特	J-14
39	鉢	胴部	---	縄文ⅠB(類似縄文ナ?)	ナテ	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 10YR6/6	黄褐色 10YR5/1	特	J-14
40	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	灰褐色 10YR5/2	黄褐色 10YR4/1	特	J-14
41	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物	有	褐色 10YR6/4	褐色 10YR2/1	特	J-14
42	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	褐色 10YR6/4	黄褐色 10YR4/1	特	J-14
43	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	灰褐色 10YR4/2	黄褐色 10YR5/1	特	J-14
44	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠBによる類似構成 縁部	ナテ?	白色灰物 風化切片	有	にじみ-黄褐色 10YR5/4	黄褐色 10YR5/1	特	J-14
45	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 10YR5/2	褐色 10YR2/1	特	J-14
46	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR6/2	特	J-14
47	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 10YR5/2	黄褐色 10YR5/1	特	J-14
48	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ?	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 10YR6/6	褐色 10YR2/1	特	J-14
49	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠBによる類似構成	不明	白色灰物 風化切片	有	灰褐色 10YR4/2	褐色 10YR2/1	特	J-14
50	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ	白色灰物 風化切片	有	明褐色 7.5YR5/6	にじみ-褐色 7.5YR5/3	特	J-14
51	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	にじみ-褐色 7.5YR5/4	黄褐色 7.5YR4/1	特	J-14
52	鉢	胴部	---	縄文ⅠB(ナ?) (不明)	ナテ	白色灰物 風化切片	有	にじみ-褐色 7.5YR5/4	褐色 10YR2/1	特	J-14
53	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	褐色 7.5YR6/6	黄褐色 10YR4/2	特	J-14
54	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ	白色灰物 風化切片	有	にじみ-褐色 7.5YR5/4	黄褐色 10YR4/2	特	J-14
55	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠBによる類似構成か? (縁部は 縁部(不明))	ナテ	白色灰物 風化切片	有	褐色 7.5YR6/6	黄褐色 10YR4/2	特	J-14
56	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ	白色灰物 風化切片	有	にじみ-黄褐色 10YR6/4	黄褐色 10YR5/1	特	J-14
57	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ	白色灰物 風化切片	有	にじみ-黄褐色 10YR6/4	灰褐色 10YR4/2	特	J-14
58	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ?	白色灰物 風化切片	有	褐色 7.5YR6/6	褐色 5YR3.2/1	特	J-14
59	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色灰物 風化切片	有	褐色 7.5YR6/6	灰褐色 10YR4/2	特	J-14
60	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ	白色灰物 風化切片	有	にじみ-褐色 7.5YR5/4	黄褐色 7.5YR4/1	特	J-14
61	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナテ	白色灰物 風化切片	有	にじみ-褐色 7.5YR5/4	黄褐色 7.5YR4/1	特	J-14
62	鉢	胴部	---	縄文ⅠB 縁部	ナテ	白色灰物 風化切片	有	にじみ-褐色 7.5YR6/4	褐色 5YR2.2/1	特	J-14

第36表 J-14号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

器名 番号	器種	部位	注記	器形および文様	測 定 (単位)	胎 土	色 別		焼成	出 土 位置	備 考
							外 面	内 面			
63	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	灰青褐色 10YR2/4	普	J-14
64	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色紅物 黒化灰片	有	灰青褐色 10YR2/2	暗褐色 10YR3/3	普	J-14
65	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・暗色 7.5YR5/4	暗褐色 7.5YR4/1	普	J-14
66	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	横ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
67	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色紅物 黒化灰片	有	黄褐色 10YR3/14	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
68	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・褐色 7.5YR3/4	暗褐色 7.5YR4/1	普	J-14
69	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	腹底部の浅彫	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・暗色 7.5YR3/4	暗褐色 7.5YR4/1	普	J-14
70	鉢	胴部	---	縄文ⅠB 胎土	不明	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・褐色 7.5YR3/4	暗褐色 7.5YR4/1	普	J-14
71	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ?	白色紅物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR6/6	暗褐色 7.5YR4/1	普	J-14
72	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ及び腹底 部の浅彫	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
73	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR6/6	暗褐色 7.5YR3/1	普	J-14
74	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色紅物 黒化灰片	有	暗褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
75	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
76	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色紅物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR6/4	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
77	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
78	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・褐色 7.5YR3/4	暗褐色 7.5YR4/1	普	J-14
79	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	暗褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
80	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
81	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色紅物 黒化灰片	有	明褐色 7.5YR4/6	暗褐色 10YR4/1	普	J-14
82	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色紅物 黒化灰片	有	明褐色 7.5YR3/6	暗褐色 7.5YR4/1	普	J-14
83	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ?	白色紅物 黒化灰片	有	暗褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
84	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色紅物 黒化灰片	有	暗褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
85	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
86	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR6/6	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	普	J-14
87	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
88	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色紅物 黒化灰片 右底	有	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
89	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色紅物 黒化灰片	有	暗褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/1	普	J-14
90	鉢	胴部	---	縄文ⅠB 胎土	不明	白色紅物 黒化灰片	有	灰青褐色 10YR2/2	暗褐色 10YR4/1	普	J-14
91	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色紅物 黒化灰片	有	灰青褐色 10YR2/2	暗褐色 10YR4/1	普	J-14
92	鉢	胴部	---	縄文ⅠB 胎土	不明	白色紅物 黒化灰片	有	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	にぶろ・黄褐色 10YR2/4	普	J-14
93	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色紅物 黒化灰片	有	暗褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/1	普	J-14

第37表 J-14号住居址出土遺物一覧表(土器)

発掘番号	器種	部位	産地	器物および文様	製法 (内面)	胎土	色調		焼成	出土層	備考
							外面	内面			
94	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	黒褐色 10YR3/1	良	J-14
95	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	黄褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
96	鉢	胴部	---	縄文 R1	不明	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	灰黄褐色 10YR4/2	普	J-14
97	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ?	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
98	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ?	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
99	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
100	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ?	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	暗褐色 10YR1/1	普	J-14
101	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR5/6	黄褐色 10YR3/1	普	J-14
102	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	黄褐色 10YR3/1	普	J-14
103	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ?	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	暗褐色 7.5YR4/1	良	J-14
104	鉢	胴部	---	---	---	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	暗褐色 7.5YR4/1	良	J-14
105	鉢	胴部	---	縄文 R1	不明	白色胎物 黒化灰片	有	黄褐色 7.5YR3/4	黄褐色 7.5YR3/1	普	J-14
106	鉢	胴部	---	縄文 R1	陶板状の調整	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	灰黄褐色 10YR4/2	普	J-14
107	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ?	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
108	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ?	白色胎物 黒化灰片	有	褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	普	J-14
109	鉢	胴部	---	縄文 R1R の方向性による形状構成?	ナテ?	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・黄褐色 10YR5/3	黒褐色 10YR4/1	普	J-14
110	鉢	胴部	---	縄文 R1・R による形状構成	ナテ?	白色胎物 黒化灰片	有	明黄褐色 10YR5/6	にじみ・黄褐色 10YR5/4	普	J-14
111	鉢	胴部	---	縄文 R1・R による形状構成	ナテ	白色胎物 黒化灰片 少量	有	褐色 7.5YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	普	J-14
112	鉢	胴部	---	縄文 R1・R による形状構成	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	普	J-14
113	鉢	胴部	---	縄文 R1	不明	白色胎物 灰化灰片	有	褐色 7.5YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	普	J-14
114	鉢	胴部	---	縄文 R1・R による形状構成	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	普	J-14
115	鉢	胴部	---	縄文 R1・R による形状構成	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	普	J-14
116	鉢	胴部	---	縄文 R1	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	普	J-14
117	鉢	胴部	---	縄文 R1か?	ナテ?	白色胎物 黒化灰片	有	褐色 7.5YR5/6	灰黄褐色 10YR4/2	普	J-14
118	鉢	胴部	---	縄文 R1・R による形状構成	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	灰褐色 10YR4/1	普	J-14
119	鉢	胴部	---	縄文 R1・R による形状構成	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 7.5YR3/4	灰褐色 10YR4/1	普	J-14
120	鉢	胴部	---	縄文 R1・R による形状構成	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 10YR5/4	灰褐色 10YR4/1	普	J-14
121	鉢	口縁	---	平縁 口唇部に沿って長く低い稜を流らす R・L 2本の組み合わせによる器底文	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	灰褐色 10YR4/1	普	J-14
122	杯	口縁	---	平縁 口唇部に沿って稜線を流らす 口唇部一箇所に R・L 2本を1組にした器底の連続模様を流す 器底に L 形模様? (不明)	ナテか?	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・黄褐色 10YR5/4	暗褐色 10YR4/1	普	J-14
123	杯	口縁	---	平縁 口唇部に沿って稜線を流らす 2本の組み合わせによる器底文? (広縁浅く不明)	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	暗褐色 7.5YR4/1	普	J-14
124	杯	口縁	---	平縁 口唇部に沿って稜線を流らす 2本の組み合わせによる器底文を流す	ナテ	白色胎物 黒化灰片	有	にじみ・褐色 7.5YR5/4	暗褐色 7.5YR4/1	普	J-14

111より一試体の
写真あり

第38表 J-14号住居址出土遺物一覧表(土器)

図録番号	部 位	部 位	出 土	器物および文様	器 種 (西暦)	始 末	色 調		焼成	出 土	備 考
							外 形	内 面			
125	注 文	口縁	---	平縁 灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
126	注 文	胴部	---	平縁 灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
127	注 文	胴部	---	平縁か? 厚唇を並らす 灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	無彩色 10YR3/1	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
128	注 文	胴部	---	無文文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	無彩色 10YR3/3	褐色色 10YR3/1	特	J-14
129	注 文	口縁	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR4/1	特	J-14
130	注 文	胴部	---	灰土系、灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	褐色 7.5YR6/6	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
131	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR4/1	特	J-14
132	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
133	注 文	胴部	---	灰土系的組み合せによる器底文	ナテ?	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
134	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	にじみ黄褐色 10YR6/3	褐色色 10YR3/1	特	J-14
135	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/1	特	J-14
136	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR6/6	特	J-14
137	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	にじみ黄褐色 10YR6/4	褐色色 10YR4/1	特	J-14
138	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	無彩色 7.5YR6/6	褐色色 10YR3/1	特	J-14
139	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
140	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	無彩色 10YR3/3	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
141	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	褐色 7.5YR6/6	黄褐色色 10YR4/2	特	J-14
142	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR2/1	特	J-14
143	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	褐色 7.5YR6/6	褐色色 10YR4/1	特	J-14
144	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	不明	白化粧物 風化部分	右	にじみ黄褐色 10YR6/4	褐色色 10YR4/1	特	J-14
145	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 10YR6/3	褐色色 10YR4/1	特	J-14
146	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR4/1	特	J-14
147	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 10YR6/3	褐色色 10YR4/1	特	J-14
148	注 文	胴部	---	口縁より? 灰土系の組み合せによる器底文及び 灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR4/1	特	J-14
149	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 10YR6/4	褐色色 10YR4/1	特	J-14
150	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ?	白化粧物 風化部分	右	褐色 7.5YR4/4	褐色色 7.5YR3/1	特	J-14
151	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ黄褐色 10YR6/4	褐色色 10YR3/1	特	J-14
152	注 文	胴部	---	灰土系の組み合せによる器底文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ黄褐色 10YR6/4	褐色色 10YR3/1	特	J-14
153	注 文	胴部	---	無文	ナテ?	白化粧物 風化部分	右	にじみ黄褐色 10YR6/4	褐色色 10YR4/1	特	J-14
154	注 文	胴部	---	無文	ナテ	白化粧物 風化部分	右	にじみ黄褐色 10YR6/4	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
155	注 文	胴部	---	無文	ナテ?	白化粧物 風化部分	右	にじみ褐色 7.5YR6/4	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
156	注 文	口縁	---	平縁 口縁部に組み合せ ラン状文様によるナテの裏面か?	焼成済の器底 (ヨコ方内)	白化粧物 風化部分	無	にじみ黄褐色 10YR6/4	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14
157	注 文	胴部	---	無文	ラン状文様に よるナテの 裏面	白化粧物 風化部分	無	にじみ黄褐色 10YR6/4	褐色色 7.5YR4/1	特	J-14

2 土 坑

(1) D-1号土坑 (第68・71図)

D-1号土坑は、D-2グリッドにおいて検出された。2.2×1.3mの楕円形を呈し深さ0.25mを測る。覆土は1層でローム粒子を若干含む黒色土層(10YR1.7/1)であった。

遺物は、縄文時代前期初頭の単節縄文および撚糸文を施した土器片が数片出土している。

遺物は撚糸文を施文するもの(1, 5)、縄文を施文するもの(2, 3, 4)が見られる。1は平縁土器で、R・L2本を合わせた撚糸文を施文する。口唇部にも同様の施文が見られる。2~4は縄文を施文する胴部の破片で、L?(2)、LR(3)が施される。4は器面が悪い為に明確でないが、LRとRLによる結束されない羽状縄文が施文されると思われる。

5はL2本による撚糸文が施文される、胴部の破片である。

(2) D-2号土坑 (第68・71図)

D-2号土坑は、C-2グリッドにおいて検出された。円形を呈し、1.3×1.3m底面までの深さが0.2mを測る。

覆土は3層に分層された。I層はローム層主体の浅黄橙色土層(10YR 8/3)、II層はバミスを含む黒褐色土層(10YR 3/2)、III層はバミスを含む暗褐色土層(10YR 3/4)であった。

遺物は、LR・RL縄文の羽状構成をとる縄文前期初頭の土器片1片が出土している。

(3) D-3号土坑 (第68・71・76図)

D-3号土坑は、C-3グリッドにおいて検出された。方形を呈し、1.9×1.7m底面までの深さが0.25mを測る。覆土は2層に分層された。I層は径3mmほどのバミスを含む暗褐色土層(10YR3/4)、II層はローム層主体の浅黄橙色土層(10YR8/3)であった。

遺物は、第71図1の底部を欠く尖底深鉢が東南コーナーから出土しているほか、打製石斧や磨石など出土している。

1は円筒形の深鉢で、口縁部に三条の沈線が施され、胴部はLR・RL縄文の羽状構成をとるものである。縄文の各段の境には結節の転がしが認められる。1以外は小破片数点が出土しているのみであるが、東海系の薄手土器の破片もみられる(6)。

第71図2~6は小破片の土器で、単節縄文(2~5)・無文土器(6)が見られる。6は東海系の薄手無文土器で、内外面がナデにより調整される。

石器は4点を図示した。第76図1は硬質頁岩の石鏃未成品、3は両端を欠く頁岩の打製石斧、32は半分を欠く安山岩の磨石である。

(4) D-4号土坑 (第69・72・76・79図)

D-4号土坑は、C-3グリッドにおいて検出された集石土坑である。2.0×1.8mの円形を呈し、深さ0.5mを測る。覆土は7層に分層された。I層は焼土・カーボンを含まない黒褐色土層(10YR2/2)、II層は焼土・カーボンを含まずロームをブロック状に含む埋土的な暗褐色土層(10YR3/3)、III層は若干のカーボンを含み焼土を含まない黒色土層(10YR1.7/1)、IV層は焼土・カーボンを含まない黒褐色土層(10YR2/2)、V層は僅かカーボンを含む黒色土層(10YR2/1)、VI層は多量のカーボンを含み焼土を若干含む黒色土層(10YR1.7/1)、VII層はロームを多く含む焼土・カーボンを含まない埋土的な暗褐色土層(10YR3/3)であった。

集石は124個の礫より構成されるが、それらは拳大よりやや大きい礫がほとんどであった。このなかでは、<赤化とヒ割れ>礫が4個・<ヒ割れ>礫が1個認められるのみで、礫の焼けについては、顕著に認められる状況ではなかった。

遺物は、第72図の前期初頭の土器、第79図25の盤状石皿が集石の中から検出された。盤状石皿は割れてしまったものが集石に再利用されたのだろう。

土器は26点を図示した(第72図)。絡条体圧痕文を有するもの(1)、単節縄文を施すもの(2~14)、摺糸文を施すもの(15~24)、無文土器(25、26)が出土している。

1は外反する口唇部と、それに沿って巡す高い隆帯との間に無文部を形成する平縁の土器で、隆帯上に縄文LRを、隆帯下に絡条体圧痕文をナナメに施文する。内面は、ナデ調整がなされる。

2~4・7は隆帯が巡る平縁の土器で、口唇部下より縄文LRを施すもの(2)、口唇部~隆帯間に無紋部を形成し、以下縄文LR・RLによる羽状縄文が施されるもの(3、4)が見られる。

15・16は、R・L2本による摺糸文を縦の矢羽状に施文した平縁の土器で、16には低い隆帯が巡らされる。17~24は摺糸文を施す胴部の破片で、RとLを同一器面に施すもの(17)、RとLを合わせた摺糸文(18~24)が存在する。

25・26は東海系の薄手無文土器で、内面に擦痕状の調整がなされる。26には指頭痕が認められる。

石器は、石鏃2点、くぼみをもつ安山岩の磨石1点、安山岩の盤状石皿2点を図示した。盤状石皿は扁平なもので、第79図25は片面、第78図24は両面が摩耗している。おそらく磨石による磨潰しの際の台となったものであろう。

(5) D-5号土坑 (第68・73図)

D-5号土坑は、C-3グリッドにおいて検出された。2.3×2.3mの不整楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。覆土は2層で、I層はバミスをよく含む暗褐色土層(10YR3/4)、II層はロームをブロック状に含む暗褐色土層(10YR3/4)であった。

遺物は、縄文時代前期初頭の土器片が十数片が出土している(第73図)。LR・RL縄文の羽状構成をとるもの、R・Lと2本の組み合わせによる摺糸文を施したものがみられる。石器は微小剥離痕のある黒曜石の剥片を図示した。

第73図1～8は単節縄文を施す土器で、1～3・5はRLとLRによる、結束されない羽状構成を成している。7には結節が認められる。

9～11は摺糸文の土器で、いずれもRとLを合わせた摺糸文が施文される。11は底部で、尖底の先端にまで施文が及ぶ。

(6) D-6号土坑 (第68・73・77図)

D-6号土坑は、C-3グリッドにおいて検出された。1.8×1.6mの円形を呈し、深さ0.3を測る。覆土は2層で、I層はバミスを少し含む黒褐色土層(10YR3/2)、II層はロームをブロック状に含む黒褐色土層(10YR3/2)であった。

遺物は、縄文時代前期初頭のものが数十片が出土している。縄文を施文したものと摺糸文を施文したものの二者である。石器は硬質頁岩の剥片と石核を図示した(第77図7・8)。

第73図1は平縁の小形土器で隆帯上にハの字の刻みを施すものである。これ以外には単節縄文(2～6)、摺糸文(7)を施した土器が見られる。

2は平縁の土器で、低い隆帯上部に無文部を形成し、また隆帯下にLRを施文する。

7の摺糸文は、R2本を合わせたものである。8は不鮮明な土器で、摺糸文が施文されていたと思われる。

(7) D-7号土坑 (第69・74・77・80図)

D-7号土坑は、C-3グリッドにおいて検出された。2.0×1.6mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。覆土は3層で、I層はバミスを少し含む黒褐色土層(10YR3/2)、II層はロームをブロック状に含む黒褐色土層(10YR3/2)、III層もロームをブロック状に含む暗褐色土層(10YR3/3)であった。

土器は、遺存状況が良好なのは、第74図1・2の底部を欠く深鉢2点である。この他破片資料については23点を図示した。

石器はピエスエスキュー（第77図9）とくぼみをもつ安山岩の磨石1点を図示した（第80図27）。

第74図1は平縁の土器で、断面が三角形を呈する隆帯を2条貼付し、その直上には、縄によると思われる刺突が加えられる。地文の縄文は、RLとLRにより羽状構成となる。

2は口縁部が波状気味に突出する土器で1条の水平隆帯が巡される。突出は2カ所に見る事ができ、そこに垂下隆帯を貼付し、水平隆帯と連結させる。縄文は、LRとRLを用いてランダムに施文する。内面には、ヨコ方向の、擦痕状の調整がなされている。

3は口縁部で、ナナメの刻みが施される。5～18は縄文を施す胴部で、羽状構成を成すものが多い。19～22は燃糸文を施文する。

21は同一器面に、R2本を合わせた燃糸文とR・Lを合わせた燃糸文を施文していると思われる。その他の燃糸文は、R2本を合わせたもの（19）、L2本を合わせたもの（20・22）が見られる。23は無文土器で、ナデにより整形される。繊維を含んでおり、東海系の薄手無文土器とは異なるものである。

（8） D-8号土坑 （第68・73・77図）

D-8号土坑は、C-3グリッドにおいて検出された。2.4×2.0mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。覆土は2層で、I層はローム粒子を少し含む黒色土層（10YR2/1）、II層はローム粒子をよく含む暗褐色土層（10YR3/3）であった。

遺物は、縄文時代前期初頭の土器片数片が出土している。

第73図1～5は単節縄文を施文する土器で、羽状を構成するものが存在する（1・3・5）。

1・2には、結節が施されている。6・7は燃糸文を施文している。

石器では、石鏃・ピエスエスキューが出土している（第77図）。

（9） D-9号土坑 （第68・73・77図）

D-9号土坑は、C-2グリッドにおいて検出された。1.6×1.3mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。覆土はI層で、I層はバミスを少し含む黒色土層（10YR2/1）であった。

遺物は、縄文時代前期初頭の土器片が出土している。単節縄文を施す土器（1～6）、燃糸文を施す土器（7・8）が見られる（第73図）。

1は口縁部で、高い隆帯を巡している。隆帯上にはLとRの圧痕が施される。2～6は胴部で、LRとRLによる羽状構成を成すものが見られる（4・5）。

石器では、石鏃の未成品が出土している（第77図）。

(10) D-10号土坑 (第68・75・77図)

D-10号土坑は、C-3グリッドにおいて検出された。2.1×2.0mの円形を呈し、深さ0.6mを測る。その一部はJ-14号住居のコーナーと重複する。覆土は3層で、I層はバミスを含む黒褐色土層(10YR2/2)、II層はロームを含む黒褐色土層(10YR3/2)、III層もロームをよく含む灰黄褐色土層(10YR4/2)であった。

遺物は、縄文時代前期初頭の土器片が出土している。第75図1～7は縄文を施す土器である。1は平縁を呈する土器で、縄文RLが施される。4は不鮮明であるが、縄文R・Lを施している可能性がある。8～11は、撚糸文を施文する胴部の破片である。

石器では、石鏃3点が出土している(第77図14～16)。

(11) D-11号土坑 (第69図)

D-11号土坑は、C-3グリッドにおいて検出された。J-12号住居址と重複するが、D-11号土坑が新しいものと考えられる。

本土坑は、2.6×2.6mの不整楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。覆土は2層で、I層は若干のカーボンを含む黒色土層(10YR2/1)、II層はロームをブロック状に含む埋土的な暗褐色土層(10YR3/4)であった。

遺物は出土していない。

(12) D-12号土坑 (第70・75・80図)

D-12号土坑は、C-2グリッドにおいて検出された。2.1×2.0mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。覆土は2層で、I層は褐色砂質土を多く含む黒褐色土層(10YR2/2)、II層は褐色砂質土やバミスをよく含む褐色土層(10YR4/4)であった。

遺物は、縄文時代前期初頭の土器片数点(うち撚糸文の施されたらしき1点を図示=第75図)、第80図28の磨石が出土している。

(13) D-13号土坑 (第70・75・80図)

D-13号土坑は、D-2グリッドにおいて検出された。本土坑はD-14号土坑とM-1号溝状遺構と重複する。本土坑は溝よりは新しいが、D-14号土坑との新旧関係はわからなかった。

本土坑は推定1.6×1.4mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。覆土は2層で、I層はバミスを含む黒褐色土層(10YR3/2)、II層はロームをブロック状に含む褐色土層(10YR4/4)であった。

遺物は、縄文時代前期初頭の土器片数点(うち縄文の施されたもの1点を図示=第75図)、第80図29の磨石が出土している。

(14) D-14号土坑 (第70図)

D-14号土坑は、D-2グリッドにおいて検出された。本土坑はD-13号土坑とM-1号溝状遺構と重複する。本土坑は溝よりは新しいが、D-13号土坑との新旧関係はわからなかった。

本土坑は推定1.6×1.5mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。

遺物は、出土していない。

(15) D-15号土坑 (第70・75・78図)

D-15号土坑は、B-2グリッドにおいて検出された。本土坑はD-16号土坑と重複するがその新旧関係はわからなかった。

本土坑は推定3.0×1.3mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。

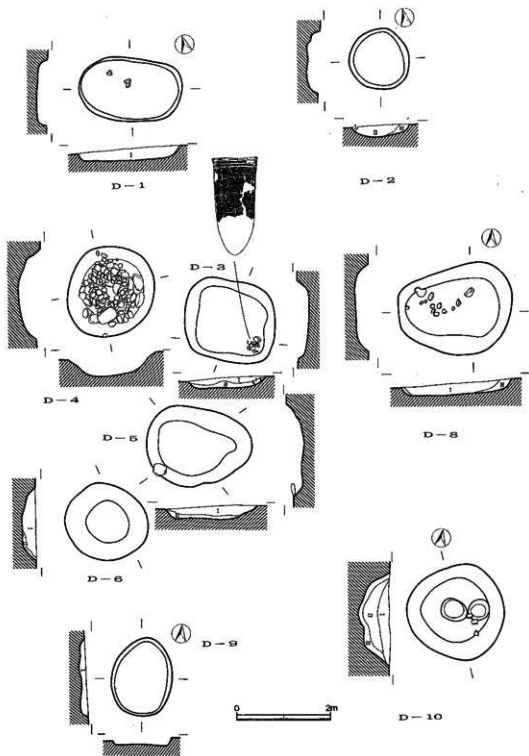
遺物は、縄文時代前期初頭の土器数片が出土している。第75図1～4は単節縄文を施文する。11は肥厚口縁を呈する土器で、縄文RL・LRにより羽状構成となる。石器は剥片1点を図示した(第78図18)。

(16) D-16号土坑 (第70図)

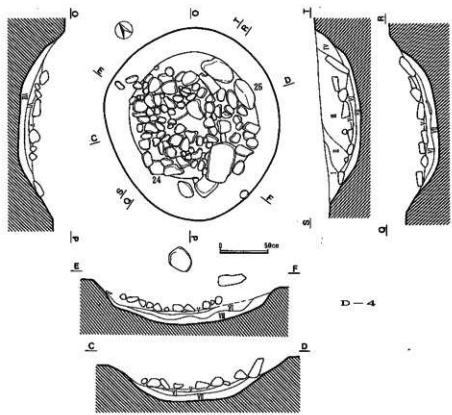
D-16号土坑は、B-2グリッドにおいて検出された。本土坑はD-15号土坑と重複するがその新旧関係はわからなかった。

本土坑は推定1.8×1.0mの楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。

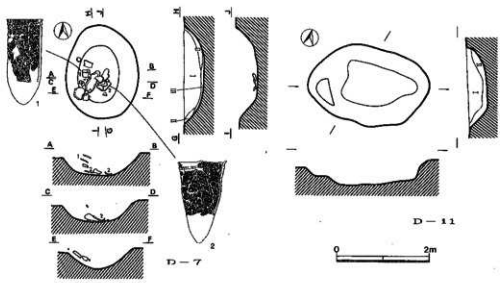
遺物は、出土していない。



第68图 土坑实测图 (1:80)

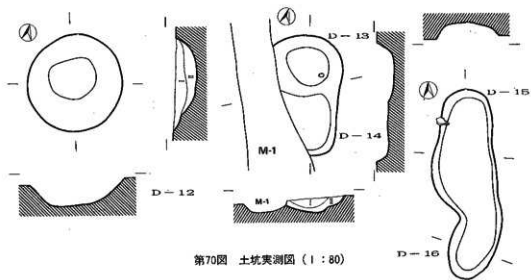


D-4

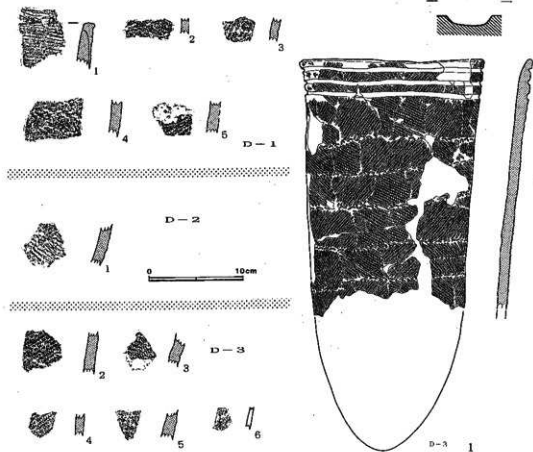


D-11

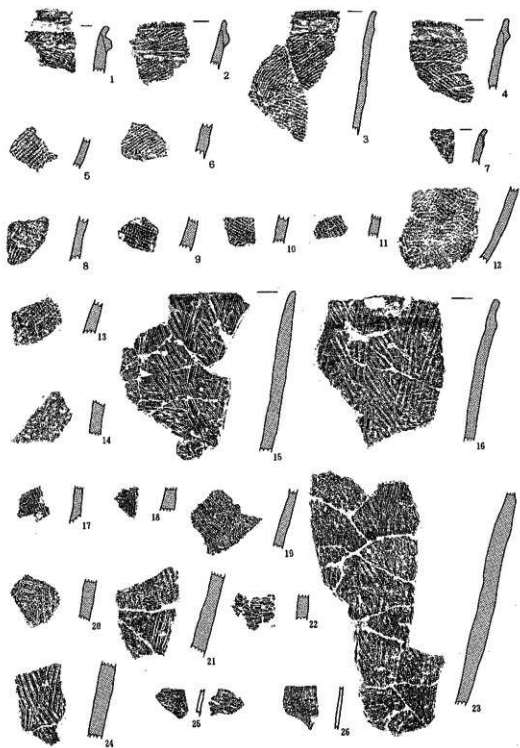
第69図 土坑実測図 (1:80、D-4のみ=1:40)



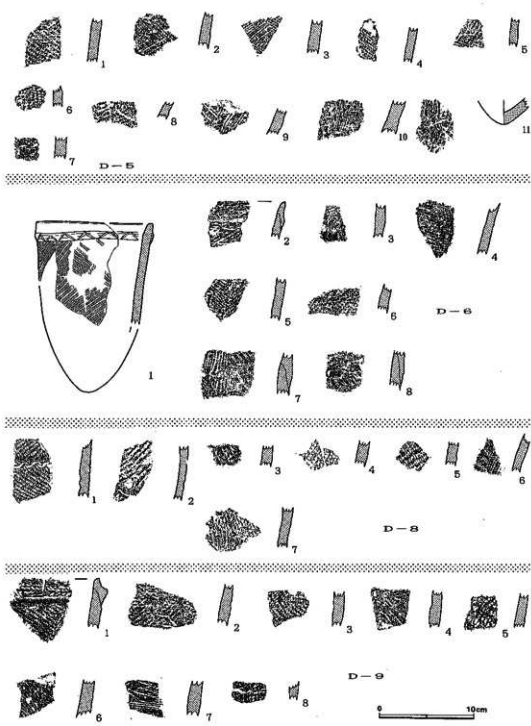
第70图 土坑夹测图 (1:80)



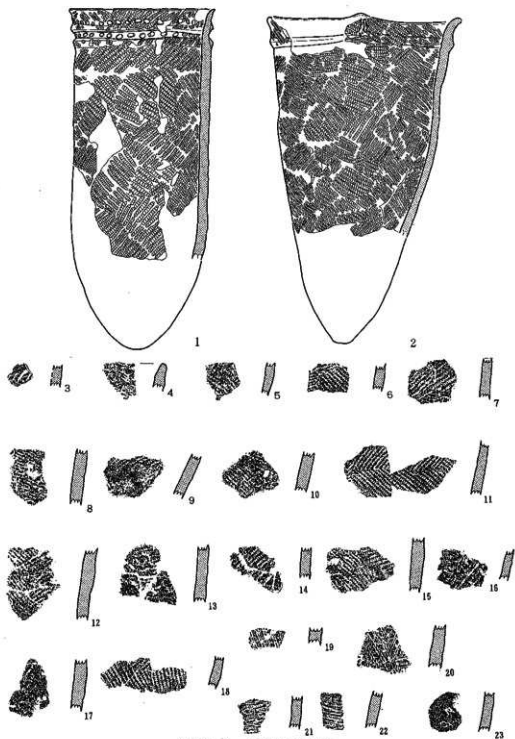
第71图 土坑出土遗物 (1:4)



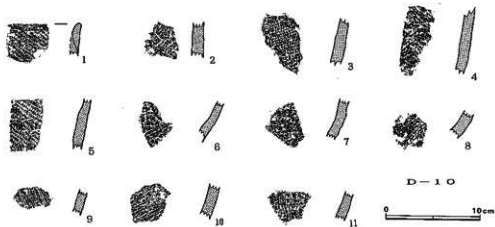
第72图 D-4号土坑出土遗物(1:4)



第73圖 土坑出土遺物 (1 : 4)



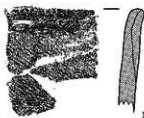
第74图 D-7号土坑出土遗物



D-12



D-13

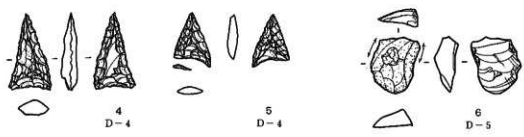
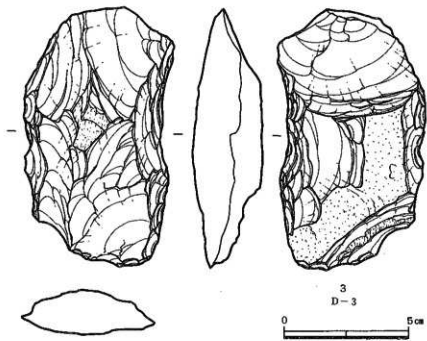
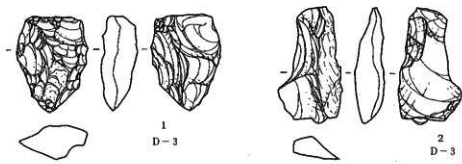


D-15

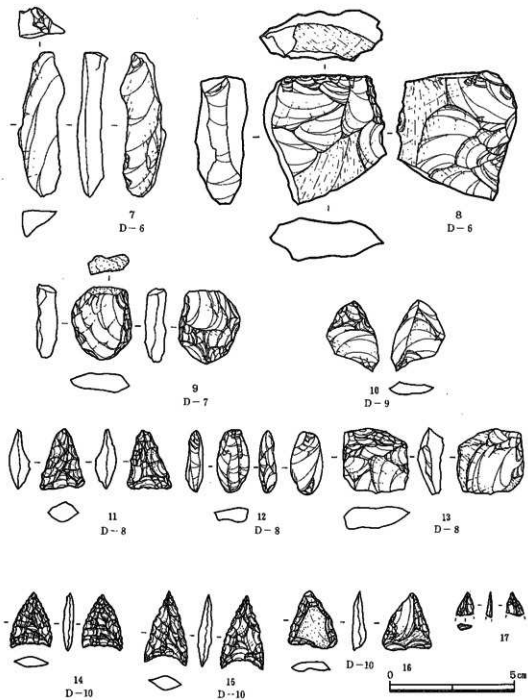
第75図 土坑出土遺物 (1 : 4)

第38表 土坑出土遺物一覽表 (石器)

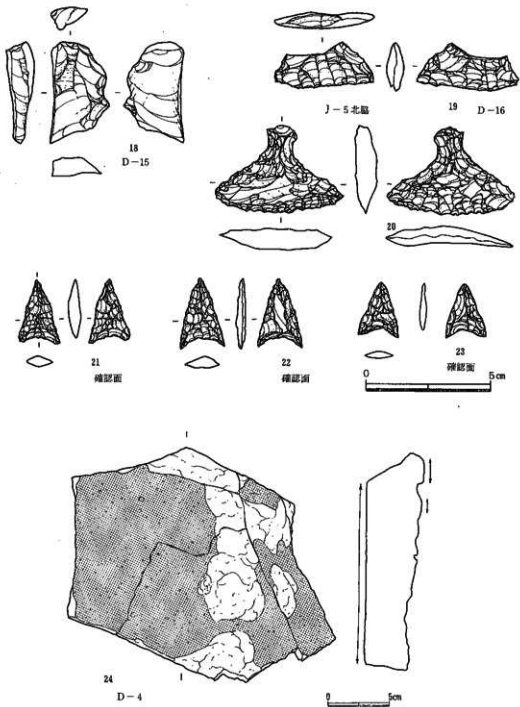
押印番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	押印番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	ビスエス スキュー	硬質頁岩	3.5	2.8	1.3	11.7	D-3	7	M・F	硬質頁岩	5.7	1.8	1.3	9.5	D-6
2	スプレイ パー	#	4.6	2.6	1.1	8.2	D-3	8	石 槌	#	5.1	4.8	2.0	46.8	D-6
3	打製石斧	頁 岩	19.3	5.9	2.8	136.1	D-3	9	ビスエス スキュー	チャート	2.9	2.4	0.8	6.5	D-7
4	石 錐	硬質頁岩	3.0	1.7	0.6	2.1	D-4	10	石 米 砥	硬質頁岩	2.8	2.1	0.5	2.3	D-9
5	#	チャート	2.1	1.4	0.3	0.7	D-4	11	石 米 砥	硬質頁岩	2.4	1.7	0.8	2.1	D-8
6	M・F	燧石	2.2	2.0	0.8	2.9	D-5	12	ビスエス スキュー	燧石	2.5	1.3	0.7	2.3	D-8



第76图 土坑出土遗物 (2:3)



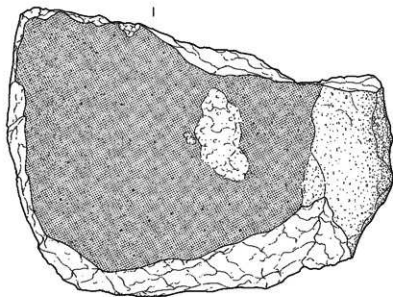
第77图 土坑出土遗物 (2 : 3)



第78圖 土坑等出土遺物 (上=2:3、下=1:4)

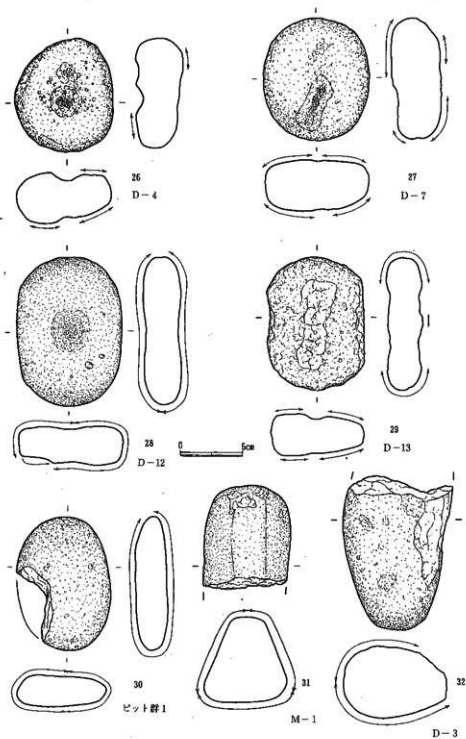
第38表 土坑ほか出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
13	ピエスエヌキーユ	硬質頁岩	2.6	2.6	0.9	6.7	D-8	23	石 錐	硬質頁岩	2.2	1.5	0.3	0.7	補綴面
14	石 錐	黒曜石	2.2	1.7	0.4	1.1	D-10	24	盤状石錐	安山岩	21.5	18.5	4.5	267.2	D-4
15	#	硬質頁岩	2.9	1.7	0.5	1.4	D-10	25	#	#	40.8 (29.6)	11.2	4.9	194.6	D-4
16	#	#	2.3	2.0	0.5	1.7	D-10	26	磨石	#	9.9	7.9	4.9	297.1	D-4
17	石 錐	-	0.9	0.7	0.2	0.1		27	磨石	安山岩	9.7	8.3	4.0	462.8	D-7
18	鱗 片	チャート	4.0	2.4	1.1	10.0	D-15	28	#	#	11.8	8.3	3.1	420.3	D-12
19	石 匙	硬質頁岩	3.5	5.1	0.8	10.5	D-16	29	磨石	安山岩	10.5	7.6	3.3	360.7	D-13
20	石 匙	チャート	1.9	4.0	0.7	3.7	1-5 左端	30	磨石	安山岩	10.6	(7.5)	2.5	273.2	ビット部 1
21	石 錐	チャート	2.5	1.7	0.5	1.2	補綴面	31	磨石	安山岩	(8.1)	6.8	6.8	601.4	M 1
22	#	硬質頁岩	2.8	1.8	0.5	1.1	#	32	磨石	安山岩	(12.1)	8.7	5.7	775.8	D 3



25
D-4
0 5cm

第79図 D-4号土坑出土遺物(1:4)



第80図 土坑等出土遺物 (1:4)

第40表 土坑出土遺物一覧表 <土器>

発掘 番号	部 位	部 位	出 土 品	発見および文書	陶 器 (内面)	土 器	色 別		焼成	土 質	備 考
							外 面	内 面			
1	扉 林	門 扉	ナブ	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯上に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-1
2	扉 林	側 部	ナブ?	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯下に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	ナブ?	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-1
3	扉 林	側 部	横文L.R.	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯下に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	ナブ?	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-1
4	扉 林	側 部	不明	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯下に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-1
5	扉 林	側 部	ナブ	L・Lによる横文	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-1
1	扉 林	側 部	不明	横文L.R.・L.R.による斜線模様	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-2
1	扉 林	側 部	不明	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯上に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR5/6	褐色色 7.5YR4/1	骨	D-3
2	扉 林	側 部	不明	横文L.R.	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-3
3	扉 林	側 部	不明	横文L.R.・L.R.の斜線模様	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-3
4	扉 林	側 部	不明	横文L.R.・L.R.の斜線模様	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-3
5	扉 林	側 部	不明	横文L.R.? (注:表裏不明)	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-3
6	扉 林	側 部	不明	横文	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-3
1	扉 林	口 縁	不明	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯上に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-4
2	扉 林	口 縁	不明	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯上に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-4
3	扉 林	口 縁	不明	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯上に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-4
4	扉 林	口 縁	不明	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯上に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-4
5	扉 林	側 部	不明	横文L.R.	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 10YR4/6	黒褐色 10YR3/1	骨	D-4
6	扉 林	側 部	不明	横文L.R.	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/2	褐色色 7.5YR3/4	骨	D-4
7	扉 林	口 縁	不明	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯上に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/1	褐色色 7.5YR4/3	骨	D-4
8	扉 林	側 部	不明	横文L.R.	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/1	褐色色 7.5YR4/3	骨	D-4
9	扉 林	側 部	不明	横文L.R.	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/1	褐色色 7.5YR3/2	骨	D-4
10	扉 林	側 部	不明	横文L.R.	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/3	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
11	扉 林	側 部	不明	横文L.R.	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/3	褐色色 7.5YR2/1	骨	D-4
12	扉 林	側 部	不明	横文L.R.、横文L.R.	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR4/4	褐色色 7.5YR3/2	骨	D-4
13	扉 林	側 部	不明	横文L.R.	ナブ?	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/4	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
14	扉 林	側 部	不明	横文L.R.、横文L.R.	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/6	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
15	扉 林	口 縁	不明	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯上に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/4	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
16	扉 林	口 縁	不明	字録、口部縁に沿って高い隆帯を有す。隆帯上に横文L.R.を施す。隆帯下に縦全体をナブイイ文。	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR4/4	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
17	扉 林	側 部	不明	横文L.R.、横文L.R.	ナブ?	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/4	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
18	扉 林	側 部	不明	横文L.R.による横文	ナブ	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/4	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
19	扉 林	側 部	不明	横文L.R.による横文	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/4	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
20	扉 林	側 部	不明	横文L.R.による横文	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/4	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
21	扉 林	側 部	不明	横文L.R.による横文	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/4	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4
22	扉 林	側 部	不明	横文L.R.による横文	不明	白色灰胎 黒化磁片	右	褐色色 7.5YR3/4	褐色色 7.5YR3/1	骨	D-4

第41表 土坑出土遺物一覧表〈土器〉

発掘 番号	坑名	部材	注 記	形状および文様	列 装 (内装)	胎 土	色 調		形状	出 土 土 器	備 考
							外 面	内 面			
23	深 井	胴部		足・L字の組み合せによる器底文	コナナ	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-4
24	深 井	胴部		足・L字の組み合せによる器底文	コナナ	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-4
25	深 井	胴部		器底・底文	器底部の両側 (縦方向)	白色胎土	無	に20°黄褐色 10YR5/3	黒褐色 10YR3/1	管	D-4
26	深 井	胴部		器底・底文	器底部の両側 縦線状	白色胎土	無	に20°黄褐色 10YR5/3	黒褐色 10YR3/1	管	D-4
1	深 井	胴部		縦文・L・Rによる羽状模様	ナデ	白色胎土 黒化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
2	深 井	胴部		縦文・L・Rによる羽状模様	ナデ	白色胎土 黒化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
3	深 井	胴部		縦文・L・Rによる羽状模様	ナデ	白色胎土 黒化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
4	深 井	胴部		縦文・L・Rによる羽状模様	ナデ	白色胎土 黒化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
5	深 井	胴部		縦文・L・Rによる羽状模様	器底部の両側 (縦方向)	白色胎土 黒化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
6	深 井	胴部		縦文・L・R	不明	白色胎土 黒化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
7	深 井	胴部		縦文・L・R	ナデ?	白色胎土 黒化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
8	深 井	胴部		縦文・L・R	不明	白色胎土 白化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
9	深 井	胴部		足・L字の組み合せによる器底文	ナデ	白色胎土 白化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
10	深 井	胴部		足・L字の組み合せによる器底文(紋様 意(不明))	コナナ	白色胎土 白化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
11	深 井	胴部		足・L字の組み合せによる器底文	ナデ	白色胎土 白化部分	有	暗褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR4/1	管	D-5
1	深 井	口縁	(11.5)	平縁、口唇部に縦線等を施し、への字状 に比喩を施す。器底・L・Rの羽状模様	コナナ	白色胎土 黒化部分	有	に20°黄褐色 10YR5/3	暗褐色 10YR3/1	管	D-6
2	深 井	口縁		平縁、口唇部に沿って縦線等を施す。再層 下彫りす。縦文・L・R	ナデ	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-6
3	深 井	胴部		縦文・L・R	ナデ?	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-6
4	深 井	胴部		縦文・L・R	ナデ?	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-6
5	深 井	胴部		縦文・Lの方向部による羽状模文	ナデ?	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-6
6	深 井	胴部		縦文・L・R	器底部の両側	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-6
7	深 井	胴部		足・L字の組み合せによる器底文	コナナ	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 10YR3/1	管	D-6
8	深 井	胴部		器底文 (紋様意(不明))	不明	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-6
1	深 井	器上 半部	11.4	平縁、口唇部一帯の縦線、器底部に以肩の 器底の羽状二系。器底・L・R・縦文の羽状 模様	コナナ	白色胎土 黒化部分	有	に20°黄褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR3/1	管	D-7
2	深 井	器上 半部	10.8	口唇部直下辺縁、一帯の黒平縁帯と二ヶ所 の器下縁帯。器底・L・Rのウツランムな異 文様文	コナナ	白色胎土 黒化部分	有	に20°黄褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR3/1	管	D-7
3	深 井	口縁		ナデ	不明	白色胎土 黒化部分	有	に20°黄褐色 10YR5/3	暗褐色 10YR4/1	管	D-7
4	深 井	口縁		縦文・L・R	ナデ	白色胎土 黒化部分	有	に20°黄褐色 10YR5/3	暗褐色 10YR4/1	管	D-7
5	深 井	胴部		縦文・L・Rの羽状模様	ナデ	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-7
6	深 井	胴部		縦文・L・Rの羽状模様	ナデ	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-7
7	深 井	胴部		縦文・L・R	不明	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-7
8	深 井	胴部		縦文・L・R	不明	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-7
9	深 井	胴部		縦文・L・R	不明	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-7
10	深 井	胴部		縦文・L・R	不明	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-7
11	深 井	胴部		縦文・L・Rによる羽状模様	ナデ	白色胎土 黒化部分	有	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	管	D-7

第42表 土坑出土遺物一覧表 (土器)

発掘 番号	器種	形状	注目	器形および文様	調査 箇所 (内面)	胎土	調練	色調		焼成	出土 土層	備考
								外面	内面			
12	鉢	胴部	---	縄文Ⅰ・ⅠBによる羽状模成	ナデ?	白色粘土 風化部分	青	黒褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
13	鉢	胴部	---	縄文ⅠB (取柄部不詳明)	不明	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
14	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
15	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ?	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 10YR3/1	青	D-7	
16	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
17	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 10YR3/1	青	D-7	
18	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
19	鉢	胴部	---	ⅠB・ⅠCの組み合わせによる縄文Ⅰ	ナデ?	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
20	鉢	胴部	---	ⅠB・ⅠCの組み合わせによる縄文Ⅰ	ナデ?	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
21	鉢	胴部	---	ⅠB・ⅠCの組み合わせによる縄文Ⅰ	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
22	鉢	胴部	---	ⅠB・ⅠCの組み合わせによる縄文Ⅰ	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
23	鉢	胴部	---	縄文Ⅰ	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-7	
1	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成 縦線有	30センチ角 断面取の調整 (ナデ方向)	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR3/1	にこい褐色 7.5YR3/4	青	D-8	
2	鉢	胴部	---	縄文ⅠB 縦線有	ナデ	白色粘土 風化部分	青	にこい褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/1	青	D-8	
3	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-8	
4	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-8	
5	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-8	
6	鉢	胴部	---	ⅠB・ⅠCの組み合わせによる縄文Ⅰ	ナデ	白色粘土 風化部分	青	黒褐色 7.5YR3/1	にこい褐色 2.5YR3/4	青	D-8	
7	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-8	
1	鉢	口縁	---	平縁。口縁部下に、縄文ⅠBの彫刻による縦線 彫刻を施している。口縁部において、深・浅部を 区別し、浅部下段をⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-9	
2	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	不明	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	にこい褐色 7.5YR3/6	青	D-9	
3	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナデ	白色粘土 風化部分	青	にこい褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/1	青	D-9	
4	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-9	
5	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	ナデ	白色粘土 風化部分	青	にこい褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/1	青	D-9	
6	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナデ	白色粘土 風化部分	青	にこい褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/1	青	D-9	
7	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-9	
8	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠC	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-9	
1	鉢	口縁	---	平縁。縄文ⅠB	不明	白色粘土 風化部分	青	にこい褐色 7.5YR3/4	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-10	
2	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成	不明	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-10	
3	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	30センチ角 断面取の調整 (ナデ方向)	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-10	
4	鉢	胴部	---	縄文ⅠB・ⅠCによる羽状模成 (取柄部不詳明)	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-10	
5	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-10	
6	鉢	胴部	---	縄文ⅠB	ナデ	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-10	
7	鉢	胴部	---	縄文ⅠB (取柄部不詳明)	断面取の調整 (ナデ方向)	白色粘土 風化部分	青	明褐色 7.5YR5/6	黒褐色 7.5YR3/1	青	D-10	

第43表 土坑出土遺物一覧表〈土器〉

発掘 番号	部材	部位	法 量	遺物および土層	調査 方法 (内面)	土 質	色 調		地蔵	土層	備 考
							外 面	内 面			
8	鉢	胴部	---	黒灰文土	ナデ?	白色粘土 黒化部分	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-10	
9	鉢	胴部	---	黒丁字本の継ぎ合せによる黒灰文	ナデ	白色粘土 黒化部分	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-10	
10	鉢	胴部	---	黒丁字本継ぎ合せによる黒灰文	ナデ	白色粘土 黒化部分	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-10	
11	鉢	胴部	---	黒灰文土 (遺文は不明)	不明	白色粘土 黒化部分	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-10	
1	鉢	胴部	---	黒灰文土 (断面観察による不明)	ナデ	白色粘土 黒化部分	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-12	
1	鉢	胴部	---	黒灰文土	ナデ	白色粘土 黒化部分	比色調 7.5YR5/4	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-13	
1	鉢	口縁	---	平焼、口縁部焼 (断面観察による羽状模様)	ナデ	白色粘土 黒化部分	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-15	
2	鉢	胴部	---	黒灰文土	ナデ	白色粘土 黒化部分	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-15	
3	鉢	胴部	---	黒灰文土・L状による羽状模様	ナデ	白色粘土 黒化部分	比明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-15	
4	鉢	底面	---	黒灰文土・L状による羽状模様	ナデ 断面観察	白色粘土 黒化部分	明褐色 7.5YR5/6	暗褐色 7.5YR6/1	香	D-16	

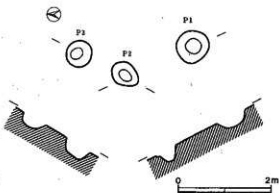
3 ピット群

(1) P-1号ピット群 (第81図)

P-1号ピット群は、D-2グリッドにおいて検出された3個のピットからなる。

P₁は70×65×深さ20cm、P₂は65×50×深さ25cm、P₃は60×50×深さ20cm。

遺物は出土せず、時期は不明である。



第81図 P-1号ピット群 (1:80)

4 溝状遺構

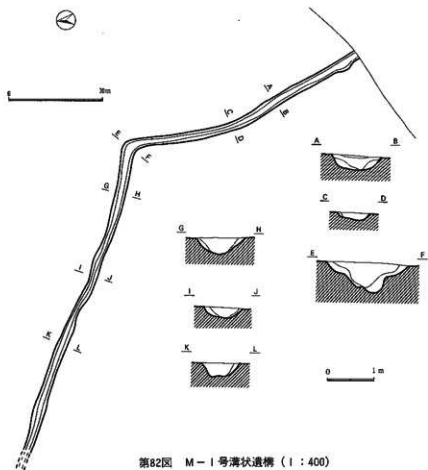
(1) M-1号溝状遺構 (第82図)

M-1号溝状遺構は調査区を南北にのびる溝で、中央でカギ状に折れ曲がる。

人工的な溝状遺構と考えられ、J-1号住居付近ではカマボコ状の断面を呈している。

覆土は3層で、I層はバミスを含む黒褐色土層(10YR2/2)、II層はロームを含む黒褐色土層(10YR3/2)、III層もロームをよく含む灰黄褐色土層(10YR4/2)であった。

遺物は、第80図31の磨石が出土している。なお、本遺構はかわらけが出土していることから、中世の所産と考えられる。



第82図 M-1号溝状遺構 (1:400)

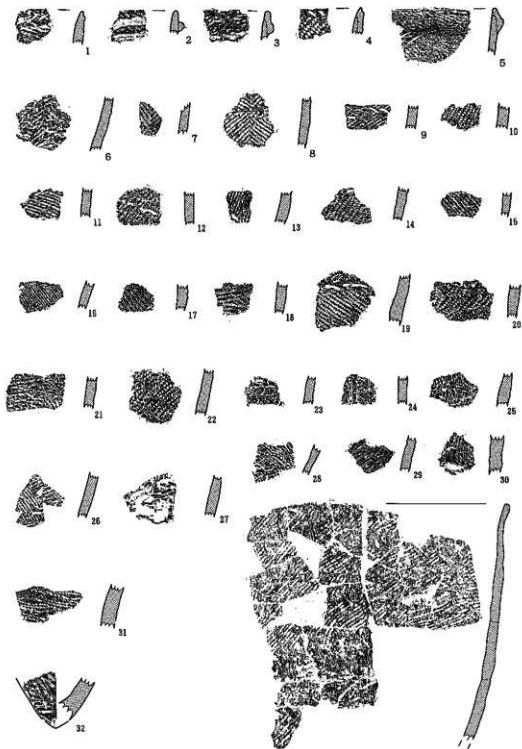
5 遺構外出土遺物

(1) 遺構外出土遺物 (第83図)

遺構外出土遺物として、縄文前期土器片32点、石匙1点・石鏃3点を図示した。

土器は、単節縄文を施したものの、LR・RL縄文の羽状構成をとるもの、摺糸文を施したものなどがみられる(第83図)。

第78図20のチャートの石匙には特有の光沢が認められ、イネ科植物の切断に用いられたことが考えられた(後章参照)。



第83圖 遺構外出土遺物 (1:4)

第44表 遺構外出土遺物一覧表 (土器)

発掘 番号	形 種	部 位	出 土 品 目	部形および文様	質 料 (Y/B)	胎 土	施 装	色 調		焼成 色 度	土 質	備 考
								外 面	内 面			
1	煎 餅	口 縁	---	平縁。胎みの横波線を縁取りに施文	不明	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
2	煎 餅	口 縁	---	平縁。口唇部下及び唇部上に黒文L状の単位による横波線を施文。口唇部に沿って胎の横波線を通す。 平縁。口唇部に沿って胎の横波線を通す。口唇部一枚帯にかけて黒文Lを施文。	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
3	煎 餅	口 縁	---	平縁。口唇部下にナテの胎のみ黒文Lを施文。	ナテ?	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
4	煎 餅	口 縁	---	平縁。口唇部厚	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4 10YR6/4	7.5YR4/1 10YR4/1	青	遺構外	遺構外L4
5	煎 餅	口 縁	---	平縁。口唇部厚	ヨコナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4 10YR6/4	7.5YR4/1 10YR4/1	青	遺構外	
6	煎 餅	胴 部	---	黒文R・L	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
7	煎 餅	胴 部	---	黒文RL・LRによる斜目横線	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4 10YR6/4	7.5YR4/1 10YR4/1	赤	遺構外	
8	煎 餅	胴 部	---	黒文RL・LRによる斜目横線	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4 10YR6/4	7.5YR4/1 10YR4/1	赤	遺構外	
9	煎 餅	胴 部	---	黒文LR	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
10	煎 餅	胴 部	---	黒文LR	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
11	煎 餅	胴 部	---	黒文RL	ヨコナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4 10YR6/4	7.5YR4/1 10YR4/1	青	遺構外	
12	煎 餅	胴 部	---	黒文LR	ナテ?	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
13	煎 餅	胴 部	---	黒文LR	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
14	煎 餅	胴 部	---	黒文LR	不明	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
15	煎 餅	胴 部	---	黒文RL	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
16	煎 餅	胴 部	---	黒文RL・LRによる斜目横線	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4 7.5YR2/2	7.5YR4/1 7.5YR2/1	赤	遺構外	
17	煎 餅	胴 部	---	黒文RL	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4 10YR6/4	7.5YR4/1 10YR4/1	赤	遺構外	
18	煎 餅	胴 部	---	黒文RL・LRによる斜目横線	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4 10YR6/4	7.5YR4/1 10YR4/1	赤	遺構外	
19	煎 餅	胴 部	---	黒文RL・LRの縁取横線	不明	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
20	煎 餅	胴 部	---	黒文LR	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
21	煎 餅	胴 部	---	黒文L(胎のみ)	不明	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
22	煎 餅	胴 部	---	黒文L(胎のみ)	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
23	煎 餅	胴 部	---	胎のみ(不明)	不明	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4 10YR6/4	7.5YR4/1 10YR4/1	赤	遺構外	
24	煎 餅	胴 部	---	L・Lによる胎取文	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
25	煎 餅	胴 部	---	R・L胎の縁のみをLによる胎取文	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
26	煎 餅	胴 部	---	胎取文R・Lによる胎取横線	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
27	煎 餅	胴 部	---	胎取文L	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
28	煎 餅	胴 部	---	胎取文R	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
29	煎 餅	胴 部	---	R・L胎の縁のみをLによる胎取文	不明	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
30	煎 餅	胴 部	---	R・L胎の縁のみをLによる胎取文	不明	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
31	煎 餅	胴 部	---	L胎の縁のみをLによる胎取文	ナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
32	煎 餅	底 部	---	L胎の縁のみをLによる胎取文	不明	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	
33	煎 餅	口 縁	胎のみ	平縁。 LR胎文を施す。	ヨコナテ	白色粘土 黒化部分	有	7.5YR5/4	7.5YR4/1	赤	遺構外	

Ⅳ 総 括

Ⅰ 縄文前期初頭の石器について

(1) 縄文前期初頭の石器

下弥堂遺跡の縄文前期初頭の集落から検出されている石器は総数1121点である。このうち剥片石器は1104点、礫器や磨石など礫石器は17点である。出土した器種は以下のとおりである。

石鏃・石匙・スクレイパー・ピエスエスキュー・石錐・加工痕のある剥片・打製石斧・磨製石斧・礫器・磨石・石皿、剥片および石核である。

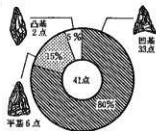
(2) 器 種 第85図

遺構別の器種内訳は第45表に、代表的な器種は第85図に示した。

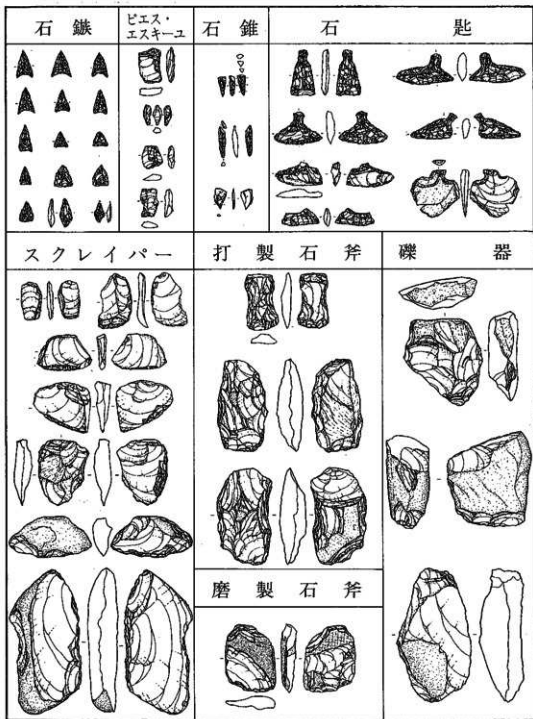
以下、その特色をみている。

石 鏃 石鏃は65点出土している。その基部の形態すなわち凹基・平基・凸基でみると、凹基が80%・平基15%・凸基5%となり(第84図)、凹基が断然多いことがうかがえる。ただしその凹基はその凹部のえぐり込みが深いものはほとんどなく、器長の10%未満の浅いえぐり込みにとどまっている。凸基としたものは2点あるが、いずれも基部が舌状に作り出されたものではない。当該期の他の遺跡をみるかぎり凸基の石鏃はほとんどみられないのであるいはその2点は石錐とするのが妥当かもしれない。

石 匙 石匙は7点出土した。うち、いわゆる横形が5点、縦形が1点、縦横ほぼ長さの等しいものが1点ある。石材にはチャートが比較的よく用いられている。石匙はリダクションの激しい石器と考えられるので、細かな形態の比較は難しい面がある。なお、このうち1点の石匙は、別項の使用痕分析によってイネ科植物の切断に用いられたことが判明した。ただ、石匙は一般にはその他の機能も合わせもつ



第84図 石鏃の形態別比



第85図 下弥堂遺跡縄文前期初頭の石器 (1 : 4)

た「万能ナイフ」としての役割をおっていたものと考えられる。

スクレイパー スクレイパーは17点出土している。その素材にはガラス質安山岩がよく用いられている。表裏両面の調整によってスクレイパーエッジが設けられた事例が多く、また剥片の形状を生かした尖頭形のスクレイパーもよくみられる。

ピエスキュー 石錐について数多くみられるのがピエスキューである。ピエスキューは一般に骨や石などを割る際のクサビとして用いられたと考えられているものである(岡村1983)。その石材はチャートや硬質頁岩が多い。

石錐 石錐は3点出土している。主な二点はつまみ部が欠損しており形態は不明。

加工痕のある剥片 加工痕のある剥片は22点出土。簡単な刃付けをし便宜的に加工具として用いたと考えられるものと、その他製作途中の未成品も含まれる可能性がある。

第45表 遺構別器種一覧表

遺構	器種													計		
	石	石	スクレイパー	ピエスキュー	錐	リフレナイフ	打製石片	磨製石片	砥	磨石	磨状石片	剥片	石			
伊 原 址	J-1												18	1	19	
	J-2	10	2	2	6					1			209	1	222	
	J-3	4	1	6	2		1						109	2	125	
	J-4	3	1		4			1			2			54	85	
	J-5	2	1		2	1								16	1	23
	J-6						1		1		3			1	6	
	J-7	2		1										10	1	14
	J-8	1			1									6	8	
	J-9			3										16	19	
	J-10														0	
	J-11	1												7	1	9
	J-12	2			1			1						8	3	15
	J-13	3			2					1				22	2	30
	J-14	26		5	26	2	19			2	3			368	9	460
土 城	D-1														0	
	D-2													1	1	
	D-3	1						1		1				12	15	
	D-4	2									2			5	9	
	D-5													11	11	
	D-6													9	1	10
	D-7				1					1				4	6	
	D-8	1			2									8	11	
	D-9	1												12	13	
	D-10	3												10	1	14
	D-11														0	
	D-12									1				1	2	
	D-13									1					1	
	D-14														0	
	D-15													1	1	
	D-16		1											2	3	
成 績 外	3	1		1		1							2	1	9	
計	65	7	17	48	3	22	3	1	3	13	2	913	26	1121		

- 打製石斧 打製石斧は3点出土しているのみである。打製石斧は当該期の他の遺跡をみても組成しない場合が多く、その傾向は同一である。ただ、むしろ全く存在しないわけではないことを留意しておくべきであろう。なお、打製石斧の2点は片刃石斧でうち1点は5cm程度の小形品である。
- 磨製石斧 蛇紋岩製で欠損品が1点出土しているのみである。
- 礫器 直刃のもの、尖頭状刃部のものなど3点の礫器が出土しているのみ。
- 磨石 磨石は13点が出土しており、安定して組成する感がある。表面に凹をもつものもいくつかみられる。
- 石皿 扁平な盤状石皿2点が出土している(第86図)。こうした盤状石皿は当該期の他の遺跡(鍛冶屋・高風呂・梨久保遺跡など)にもよく認められるものである。中央を凹ませた受皿タイプの石皿もみられないわけではないが(中道遺跡SB09住居の例)、盤状タイプものが一般的である。

(3) 石器組成

下弥堂遺跡の縄文前期初頭の石器組成についてみておこう。

まず、そのなかで安定してみられるのは狩猟具としての石鏃である。

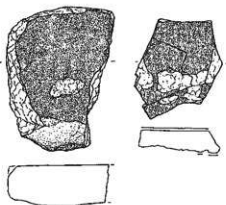
加工具ではスクレイパーも安定して存在する。

一方、同じ加工具でも石匙や石錐の存在は、ややばらつきがある。ただ、石匙や石錐は使えなくなるまで所持される「管理的石器」であるゆえ遺構に残されない場合も多いので、ここにみる程度の出土量ならば、安定して組成していたと考えて差し支えあるまい。

他方、ピエスエスキューや加工痕のある剥片も数多くみられるが、それは「便宜的石器」ゆえの遺存率の多さであろう。

このほか、調理具と考えられる磨石・石皿も安定して組成している。ナッツ類の採集と磨潰し作業が生業のなかで一定していたことをしめすものであろう。なお、この時期の石皿は扁平な石材をそのまま利用した盤状石皿が主体的なようである。

一方、打製石斧や磨製石斧は本遺跡では数点認められたが、当該期の遺跡では出土しない場合も多い。両者が木材の伐採や加工という基本的な生産活動上の機能を担っていたと考えるなら、



第86図 D-4号土坑の盤状石皿(1:8)

本来的には組成していたことを想定しておくべきだろう。その数の少なさはやはり「管理的石器」であるがゆえの事情であろうか。それは、各世帯に一振りの斧が所持される、程度の組成率だったのだろうか。

ところで、縄文中期の中部・関東ではきわめて数多くの打製石斧が出土することが知られている。50本を越す打製石斧が1軒の住居から検出される例もめずらしくないという。この時期の打製石斧については、その著しい摩耗痕からも土掘り具といわれている。おそらく縄文前期には木材伐採もしくは加工具としての一般的機能を負っていたと考えられる打製石斧も、中期には専用の土掘り具として機能的特殊化がはかられたものと考えられる。その一方で、中期には木材伐採・加工具には磨製石斧が専用化したものと考えてよいだろう。

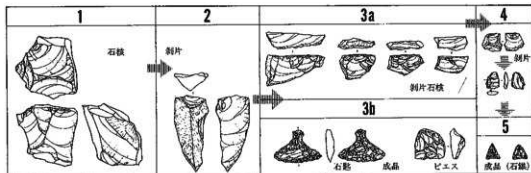
ここで具体例をみてみよう。検討材料は茅野市高風呂遺跡(茅野市教育委員会1986)で、中道式土器を出土した前期初頭の8号住居と、焼町土器なども出土した中期中葉の14号住居である。第87図はその組成を比較したものだが、前期初頭の住居では打製石斧が1点のみであるのに対し、中期中葉では24点の出土がみられる。

また、石鏃はその逆で、前期初頭が多く中期中葉が少ない傾向にある。ただ、これをもって単純に両時期の狩猟活動の比重の違いと解釈するにはいささか短絡すぎる。石鏃は移動性が高い道具であるので、その依存率に問題があり、点数の比較が難しい点があるからである。

この他、中期中葉では磨製石斧が安定して組成している。石匙・スクレイパーは両時期とも安定してある。

器種	石 鏃 (12点)	石匙(3点)	ピエス (1点)	スクレイパー(2点)	打製石斧(1点)	
8号住居						前期初頭
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> 石 鏃 63% 石匙 16% ピエス 5% スクレイパー 11% 打製石斧 5% </div>						
14号住居						中期中葉
器種	4点	石匙(6点)	スクレイパー(7点)	磨製石斧(4点)	打製石斧(24点)	

第87図 高風呂遺跡における縄文前期初頭と中期中葉の石器組成



第88図 剥片石器の製作過程

縄文中期に急増する打製石斧の土掘りの目的とは、いわゆる縄文農耕との関連をひとまずおくと、根茎植物類の採取にあったものといわれている。おそらく中期段階において、季節的にせよ根茎植物類の採取にウエイトを置いた生業活動が展開したことが予測される。加えて住居1軒における打製石斧の保有数の多さは、特定構成員の装備というよりは、協業時には構成員それぞれに配分され、使用される道具であったことを暗示するのだろう。

いずれにせよ、打製石斧の組成からみた前期と中期の相違は、季節的にせよ、根茎植物類の採取への傾斜という生業活動の偏向として理解できるのである。

(4) 小形剥片石器の製作について

チャートや硬質頁岩を素材とした小形剥片石器の製作について、一連の工程的な資料がみられるので簡単にふれておくことにする。

第88図1は、3～8cm前後の中形剥片を剥離するための石核である。そこから剥離された剥片(2)は、石匙やビエスエスキュー(3b)の素材となる一方、石鎌の素材を生産するための扁平な小形石核にあてられる(3a)。こうした小形石核から剥離された貝殻状の剥片が加工され(4)、石鎌となる(5)。

引用参考文献

- 岡村道雄 1983 「ビエス・エスキュー、楔形石器」 『縄文文化の研究』 7
 岡谷市教育委員会 1986 『梨久保遺跡』
 茅野市教育委員会 1986 『高風呂遺跡』
 東部町教育委員会 1982 『真行寺』
 長門町教育委員会 1984 『中道』

2 石匙の使用痕観察

(1) 観察にあたって

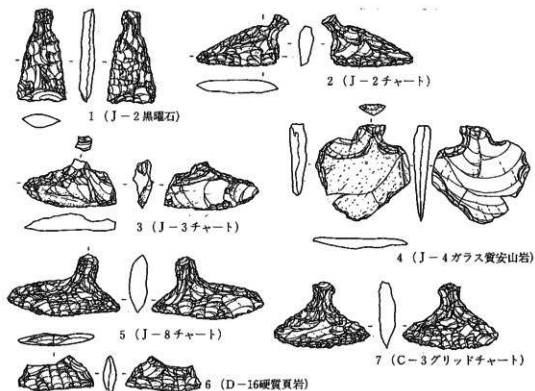
本項では下弥堂遺跡出土の7点(第89図)の石匙についての使用痕観察をおこなった。

観察の対象とした石匙の石材は、黒曜石1点・チャート5点・硬質頁岩1点である。

観察には落射照明装置付きの金属顕微鏡OLYMPUS-BHMJを用い、100~200倍の倍率で観察した。資料は余分な付着物を除くために観察前にエタノールを浸した脱脂綿で軽くふき取った。

使用痕は、大きく次の6種類に分類して把握されている。①微小剝離痕(Microflaking)②線状痕(Striation)③光沢(Polish)④摩耗(Abrasion)⑤破損(Breakage)⑥残滓(Residue)である(Tringham et al.1974・御堂島1982・阿子島1989)。ここでは、主に②線状痕と③光沢を観察の対象とし、石匙の二次加工と分別し難い微小剝離痕は記載からはずした。

ところで、キーリーの開発した高倍率法(Keely 1980)による使用痕研究において、ポリッシ



第89図 観察をおこなった石匙(1:2)

ユが作業や作業対象物に固有なタイプをみせて発達することが確認されて以来、実際のポリッシュタイプと実験結果との整合という検証において、被加工物とそれに対する機能が推定されてきた。日本においてもポリッシュも含め、すでにいくつかの実験使用痕研究がなされ、そのプログラムと成果が公表されている（梶原・阿子島1981、阿子島1981、阿子島1989、御堂島1982・1986・1988など）。ここでは、観察されたポリッシュについて、それらの実験結果によるポリッシュタイプモデルとの対応を考え、そこから機能を想定してみることにする。

(2) 観察結果について

各石器の観察結果について以下に記す。なお、使用痕と考えられる特徴的なものについてののみ第90図に図示した。

A 石匙7 (第90図)

C-3グリッド出土のチャートの石匙で、図の点線部分において使用痕が観察された。写真1・2・3は、明るく滑らかで流動的な外観を呈する光沢が比較的広い範囲で面的に観察される。また、この光沢に埋れたように無数の側縁と平行する線状痕が線状痕がともなう。この光沢は、御堂島あるいは阿子島がAタイプとする特徴ある光沢で、イネ科植物の草本類に作業を行なったときに生じる典型的な光沢である（御堂島1988・阿子島1989）。

したがって本石匙の機能は、「イネ科植物の草本類に対し、矢印方向の切断作業に用いた」ものと推定される。

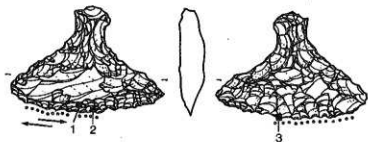
B 石匙1 (第90図)

J-2号住居出土の良質な黒曜石の縦形の石匙である。第90図4の写真の部分において、側縁と平行する線状痕が観察された。またその付近には側縁と斜行する線状痕および側縁と直交する線状痕も観察された。側縁と平行する線状痕が主となることから図の矢印方向の切断がその操作法として考えられるが、これに斜行・直交タイプの線状痕も伴うことから、単純に前後方向だけでなく、時折上下方向に振幅するような比較的動作の大きい切断作業とも考えられようか。

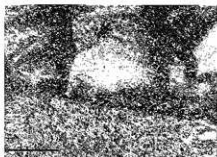
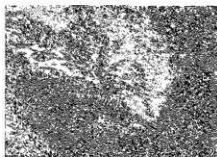
なお、この線状痕群は周囲の調整剝離に切られており、線状痕の付着にいたった使用後、刃部の再加工がなされたことがうかがえる。また、線状痕が観察されたのは写真4の部分だけであり、それ以外の部分にはまったく観察されなかったことから、あるいは再加工が全周におよんでいた可能性も考えられる。石匙のリダクションを想起させる事例である。

C 石匙2～6

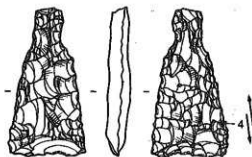
これら5点の石匙においては、線状痕や光沢等、特に使用痕と考えられるものは観察できなかった。



7 (C-3グリッドチャート)



矢印は使用の方向
●は使用痕の範囲
写真3のスケールは200 μ



1 (J-2黒曜石)



第90図 観察された使用痕 (石器 = 4 : 5)

(3) 石匙の機能について

梶原洋は仙台市三神峰遺跡の縄文前期初頭の石匙32点の総合的な使用痕分析をおこなった(梶原1982)。その結果によれば、その約半数が二種類以上の作業に用いられており、そこから推定される機能とは、動物の解体処理とその後の皮の加工、骨角器の製作、木やイネ科植物の切断など多様であるという。つまり石匙は、つまみ部にひもがつけられるなどして常に持ち運ばれ、皮・肉・角・骨などの動物質のもの加工に使われるほかに、稲や木などの植物をも対象として様々な作業に使われる、いわゆる手持ちの万能ナイフ、といった姿を想定できるという。一方、刃部再加工の度合いも頻繁で、その変形の度合いが高い石器でもあるようだ。

ちなみに本遺跡の7の石匙については、イネ科植物の切断に用いられたことが推定された。具体的にはヨシなどの植物の刈り取りや加工などに用いられたことを想像できようか。しかし梶原の分析をみる限りでは、それも多様な機能のうちのひとつのあり方、とみておくほうがよさそうだ。従来、石匙は「皮剥ぎ」などとも俗称されるように、動物の解体具あるいは皮や肉などの切断具という機能的なイメージがつきまとっているが、梶原も指摘するように「万能ナイフ」的な多様な機能を有し、つまみ部にひもなどがつけられて常に所持され、刃が鈍ると再加工がなされて用いられる「管理的石器」(curated tool)であったことを想定できるだろう。

引用参考文献

- 阿子島香 1981 「マイクロフレイキングの実験的研究」 (『考古学雑誌』66-4)
- 阿子島香 1989 『石器の使用痕』ニューサイエンス社
- 梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究」 (『考古学雑誌』67-1)
- 梶原洋 1982 「石匙の使用痕分析」 (『考古学雑誌』68-2)
- 御堂島正 1982 「エッジ・ダメージの形成に関する実験的研究」 (『中部高地の考古学II』)
- 御堂島正 1986 「黒曜石製石器の使用痕」 (『神奈川考古』22)
- 御堂島正 1988 「使用痕と石材」 (『考古学雑誌』74-2)
- 堤 隆 1992 『細田・下弥堂・塚田・下荒田遺跡発掘調査概要報告書』 御代田町教育委員会
- Tringham et. al 1974 Experimentation in the formation of edge damage: a new approach to lithic analysis. *Journal of Field Archaeology*, 1.
- Keely, L. H. 1980 Experimental Determination of Stone Tool Uses: A Micro Wear Analysis. *The Univ. of Chicago Press*.

3 石材利用をめぐる問題

(1) はじめに

下弥堂遺跡では、住居址・土坑・遺構外あわせて総数1104点の剥片石器類が検出されている。東京都立青山高校の柴田徹氏の石材鑑定によると、その石材には次の12種類が認められている。

黒曜石・チャート・硬質頁岩・頁岩・ガラス質安山岩1・ガラス質安山岩2・ホルンフェルス・粘板岩・流紋岩・砂岩・緑泥片岩・蛇紋岩である。⁽¹⁾

本遺跡は、縄文時代前期最初頭の縄文尖底土器を出土する単純遺跡であるという点において、他時期の遺物の混入がみられず、総合的な遺物のあり方を検討するのに有利である。そこで本項においてはその石材利用に関する若干の考察を加えてみることにする。

(2) 器種と石材

石器の器種と石材については、第46表にまとめた。

当然のことかもしれないが、小形剥片石器には緻密で鋭利な、中・大形石器にはやや粗粒だが重厚でねばりのある石材が用いられている傾向が強い。以下にその特色を列記する。

- ① 石鏃には、硬質頁岩・チャートが多く用いられる（全体の90%）。
- ② 石鏃への、黒曜石およびガラス質安山岩の利用率は5%未満と低い。ちなみに、本時期以降では、当地域で黒曜石およびガラス質安山岩の石鏃への利用率が高まる傾向にある。
- ③ 小形剥片石器（石鏃・石匙・スクレイパー・鏃・ピエスエスキューなど）全般においても、硬質頁岩・チャートの数が圧倒的に多く（全体の76%）、黒曜石およびガラス質安山岩の利用率は低調である（両者とも全体の10%程度）。
- ④ 中・大形石器では、礫器的な尖頭石器にガラス質安山岩、打製石斧にホルンフェルスが用いられている。
- ⑤ 磨製石斧には、しばしば利用される特定石材ともいえる蛇紋岩が用いられている。

(3) 集落に搬入された石材

下弥堂の集落から出土した石器の石材は、総重量6031.1gである。これを12種類の石材別にみると（第47表計参照）、もっとも多いのが硬質頁岩の2765gで総重量の45.8%、つまり約半数を占めている。つづいてチャートとガラス質安山岩1が15%にあたる900g程度、頁岩が10%強の700g程度、これ以外では黒曜石・ガラス質安山岩2・ホルンフェルス・蛇紋岩は5%に満たず、

粘板岩・流紋岩・砂岩・緑泥片岩は1%に満たない重量である。

第91図には遺構別の石材の重量構成比を示した。各住居においても全般に硬質頁岩の出土重量が多く、その利用度が高いことがうかがえる。ことに中・大形石器の出土していない住居ではその重量比が60%を超える場合もみられる。これにつづいてチャートの利用も10~30%程度で一定している。反面、黒曜石の重量比は、J-2号住居で約20%というやや高い重量比をみせる以外はいずれも5%未満と低い。

なお、各石材の点数と重量は比例する関係にある。

(4) 石材原産地

これらの石器石材の原産地を推定しておく。

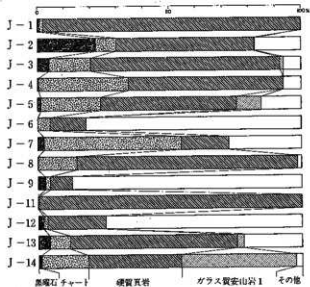
黒曜石

まず黒曜石であるが、近隣の黒曜石原産地は和田峠周辺（男女倉・和田峠・星ヶ塔、本遺跡より35km）と八ヶ岳（麦草峠・冷山、本遺跡より35~40km）の二か所に限定される。八ヶ岳系統の黒曜石は白い縞が特徴的に入るため肉眼によっても識別が可能で、放射化分析による原産地同定の際、試みに八ヶ岳産との予測のもとに分析にまわすが、ほぼ予測と合致した分析結果が得られる。こうした経験のもとに下弥堂遺跡に搬入された黒曜石をみるかぎり、いずれも和田峠周辺の黒曜石と推定され、八ヶ岳のものはみあたらないようである。ただ和田峠周辺の細かな産地については判別できない。

第46表 石器種類別利用石材一覧表

石材	石		スイクレ	燧	ピエスユ	リフレキッド	打製石片	磨製石片	尖頭石器	剥片	石杖	計
	塊	数										
黒曜石	4	1	1		6					125	1	138
チャート	25	4		2	13	5	1			181	2	228
硬質頁岩	34	1	6	1	28	15				437	18	501
頁岩			2				1			3	1	7
ガラス質安山岩I		1	5		1	1			1	117	2	128
ガラス質安山岩II	2		1							31		34
ホルンフェルス			1				1			15		17
板岩										2		2
流紋岩										1		1
砂岩			1			1						2
緑泥片岩										1		1
粘板岩										1		1
計	65	7	17	3	48	22	3	1	1	913	24	1104

※数字は点数



第91図 住居址別石材重量組成

ガラス質安山岩

つぎにガラス質安山岩であるが、ガラス質安山岩1としたものは、本遺跡より12kmほど距離をへだてた佐久市の八風山～香坂川上流域にみられるものと外見的特徴は一致する。柴田氏による顕微鏡観察でも、本遺跡のガラス質安山岩1は香坂川上流域のガラス質安山岩と同様な特徴をみせるものであるという。

後章の薬料哲男氏による蛍光X線分析でも、ガラス質安山岩1の2個体分析番号34752J-5 剥片分析番号34754J-4 剥片は、八風山原産地の石材であるという判定結果が出されている。

したがって、ガラス質安山岩1に関しては八風山原産地の石材と判断してよいものと考えられる。ちなみに、外見的特徴が明らかに八風山の石材とは異なる、ガラス質安山岩試料1点は（分析番号34753）、産地不明との結果が出された。

一方、ガラス質安山岩2としたものについては、八風山の北につづく荒船山周辺のガラス質安山岩に近い外見をみせるものを含んでいる。荒船山周辺のガラス質安山岩は香坂川上流域のものにくらべるとややしっとりとした肌をみせている。ただこうした外見的特徴が化学分析のうえで化学組成上の違いとしてあらわれるかどうかはわからない。

チャート

本遺跡で安定して用いられているチャートは、本遺跡より25～30kmほど離れた佐久町十石峠から北相木村～川上村にかけての秩父層群中に産出する。この地域のものが本遺跡で利用されていると考えられる。

第47表 遺構内出土石材・重量一覧表

分析 試料	黒 曜 石	チ ャ ー ト	燧 石 類	頁 岩	安 山 岩 類 1	安 山 岩 類 2	火 砕 石 類	粘 土 質 岩	砂 質 岩	砂 質 岩	緑 泥 岩	蛇 紋 岩	計
J-1	0.7	0.9	74.4										76
J-2	129.8	42.5	303.0		1.4	66.2	8.5	18.0	9.2				577.6
J-3	25.4	83.7	581.9		7.7				33.7	7.5			530.9
J-4	1.8	124.8	132.7				21.6						241.9
J-5	1.2	24.5	55.3		5.4		16.8						107.2
J-6		9.7	9.3									81.0	99
J-7	3.2	71.2	24.5		37.7								126.6
J-8		10.3	59.0				1.1						70.4
J-9	34.7	30.7	41.6	477.0				3.7					550.7
J-10													0
J-11		0.7	284.0			1.1							285.8
J-12	4.4	2.7	45.4	1.1			151.6						205.2
J-13	16.4	27.3	252.3	41.2	9.2								366.4
J-14	23.2	428.8	659.9	11.2	863.4	32.6							1287.1
小 計	215.8	737.8	2286.7	579.5	869.9	109.9	303.2	18.0	9.2	33.7	7.5	81.0	3206.8

石材 試料	黒 曜 石	チ ャ ー ト	燧 石 類	頁 岩	安 山 岩 類 1	安 山 岩 類 2	火 砕 石 類	粘 土 質 岩	泥 質 岩	砂 質 岩	緑 泥 岩	蛇 紋 岩	計
D-1													0
D-2		87.6											87.6
D-3	0.1	26.9	69.5	136.1									232.6
D-4		7.9	3.6				11.4						22.9
D-5	3.0	26.8	106.4				7.1						143.3
D-6			88.0					14.3					102.9
D-7		4.6	29.8					1.2					35.6
D-8	2.4		21.6		17.6	6.6							51.2
D-9	0.9	3.7	73.4			4.2							81.1
D-10		22.9	44.6		13.8		9.1						89.4
D-11													0
D-12		0.6											0.6
D-13													0
D-14													0
D-15	10.0												10.0
D-16		6.5											6.5
由緒所		11.7	19.7		7.1	1.1							34.6
小 計	6.9	136.1	299.7	136.1	33.7	26.2	23.6						624.3
計	222.7	883.9	2785.0	706.6	903.6	126.1	326.8	18.0	9.2	33.7	7.5	81.0	4921.1
%	3.7	15.3	45.9	11.7	15.0	2.1	3.9	0.3	0.2	0.6	0.1	1.3	100%

※ 単位はグラム

硬質頁岩

本遺跡の石材総重量の約5割を占め、主要石材といえる硬質頁岩については、残念ながらその原産地が確認されていない。本硬質頁岩はチョコレート色～肌色をみせる緻密で良質な石材で、東北地方において旧石器～縄文にかけて多用されている硬質頁岩とはほぼ同様な特徴をみせるものである。東北地方ではこの硬質頁岩は新潟の七谷層もしくは山形の草薙層に産出するという(山本・金山・柴田1991)。筑波大学の山本薫氏のご教示によると、本遺跡の近隣においてこうした石材を産出する珪質な堆積岩としては、上田市周辺の別所層に可能性があるという(第92図)。ただ、本遺跡よりより別所層に近い東部町の前期初頭の遺跡でこの硬質頁岩がほとんど利用されていないことを鑑みると、東部・上田方面にその原産地を求めるには難があるだろう。加えて、佐久市東部の縄文遺跡でもこの硬質頁岩がよく用いられている状況と、本遺跡での主体的利用とを考えると、本遺跡より20km以内の佐久盆地周辺の山地にその原産地が存在している可能性を考えておくことができそうである。

その他の石材

これ以外の石材では、緑泥片岩は埼玉の秩父地方の三波川層群など、蛇紋岩も秩父三波川層群や茅野～天竜川にかけての地域にその原産地をもとめられる、いわば遠隔地の石材といえる(柴田徹氏のご教示による)。

(5) 石材利用をめぐる問題

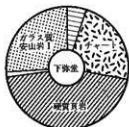
ここでは石器石材利用をめぐる問題を考えてみるため、本遺跡の石材構成と、本遺跡と同時期の縄文前期初頭の長門町中道遺跡(長門町教育委員会1984)および東部町真行寺遺跡(東部町教育委員会1982)の石材構成の比較をまずおこなっておきたい。比較の対象は、本遺跡J-14号住居と中道S B 09号住居および真行寺S B 03号住居の石材である。なお、後者二者には石材重量の記載がないため、出土点数での比較をおこなう(第48表)。

まず、第48表を一瞥すると、本住居と他の二遺跡の住居とでは、黒曜石の出土数がまったく異なる傾向にあることがわかる。本遺跡では黒曜石が全体の5%にすぎないのに対し、他の二遺跡では90%強という圧倒的な数量の多さである。逆にいえば本住居で68%を占めるチャートや頁岩類は他の二者では5%前後という低い数量にとどまっている。ちなみに、中道遺跡は和田峠近辺から水源を発する依田川流域にあり黒曜石原産地まで17km、真行寺遺跡は原産地まで30kmで依田川と千曲川との合流点の延長線上に位置している。

さて、ここで明らかになった本遺跡と他の二遺跡の石材利用の格差は何を物語るのだろうか。おそらくそれは、それぞれの集団の恒常的石材獲得領域の差を強く表わしている、とみてよいだろう。具体的には、本遺跡の集団にあつては25km圏内の千曲川右岸の山地(チャート・硬質頁岩・

第48表 器種別石材一覧表

下跡堂遺跡 J-14号住居址



器種	石		スレート	珪石	ヒメスカルユ	リフレクタイト	打製石片	磨製石片	尖頭石器	割片	石核	計	%
	塊	数											
黒曜石		1								39	21	5	
チャート	14			1	3	4				78	1	197	23
硬質頁岩	11			1	17	14				100	6	299	45
頁岩										5	2	1	
ガラス質安山岩1			4			1			1	101	2	109	24
ガラス質安山岩2			1							7	8	2	
計	28	5	2	2	20	29			1	368	9	456	100

中道遺跡 SB09号住居址



器種	石		スレート	珪石	ヒメスカルユ	リフレクタイト	打製石片	磨製石片	尖頭石器	割片	石核	計	%	
	塊	数												
黒曜石	8			2								315	305	98
チャート			1									3	4	1
硬質頁岩														
頁岩		1										1	2	1
ガラス質安山岩1														
ガラス質安山岩2														
計	8	1	1	2								319	333	100

真行寺遺跡 SB03号住居址



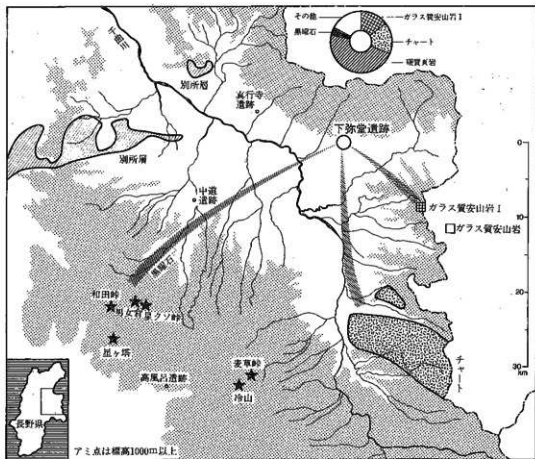
器種	石		スレート	珪石	ヒメスカルユ	リフレクタイト	打製石片	磨製石片	尖頭石器	割片	石核	計	%	
	塊	数												
黒曜石	11											258	260	95
チャート			1									3	4	1
硬質頁岩														
頁岩														
ガラス質安山岩1				5								1	6	4
安山岩												282	279	100
計	11	1	5									282	279	100

※数字は点数

ガラス質安山岩)が恒常的な石材獲得領域であり、真行寺・中道遺跡の集団にあっては依田川上流域20~30km圏内の和田峠(黒曜石)が恒常的な石材獲得領域であった、と考えられる。

かつてコリン・レンフリーユは石材獲得のあり方として、「直接採取」と「交換」の二つのモデルを示したが(Renfrew 1975)、これに加え、非日常的な石材獲得活動ともいえる「直接採取」に対し、石材獲得活動が通常の生業行動スケジュールの中に組み込まれているモデルがあることをエスキモーの民族誌から提示したのは、ルイス・ビンフォードで、「埋め込み戦略」と呼ばれるものである(Binford 1976)。おそらく当該期の各集団の恒常的な石材獲得のあり方は「埋め込み戦略」モデルで考えてよいだろう。

ところで、当該期の黒曜石の利用率の低さといわば在地系石材の利用度の高さは、当地域から距離を隔てた群馬の五目牛南組遺跡(山口1992)でも追認されるところであるが、改めてここで気掛かりになるのは、本遺跡での黒曜石利用の低調さから問い直される当該期の黒曜石入手システムと、それを含めた石材獲得戦略のあり方である。それは、おそらく以下のような状況下にあったものと想定してみることができるだろう。



第92図 下弥堂遺跡と石材原産地

①戦略的には集団の恒常的な生産獲得活動領域内での石材確保がより重視されていた、②集団相互の石材(生産)獲得領域が基本的には不可侵であった、③黒曜石をめぐる集団間の交換システムがより積極的には機能していなかった。

では、黒曜石をめぐる交換システムが活発に機能していなかった理由はどこにあるのだろうか。それは、黒曜石それ自体の至上価値にもよるのだが、恐らく、黒曜石に象徴されるようなモノをめぐる集団間の交換システム、いわば集団間の社会的・経済的連鎖がゆるやかであったか、未成熟であったこと、を示していると解釈されようか。また、その背景のひとつともいえる婚姻網(Mating Network)の形成も、よりオープンな状態ではなかったのかもしれない。蛇足になるが、黒曜石が動かないもう一方の理由として、集団間をめぐる緊張関係から黒曜石交換システムが閉じていた、と唱える向きもあろう。しかしこれはとりえず非現実的な意見といえようか。

なお、ただひとり石材の動きのみを絶対視して、当該期における集団間のコミュニケーション

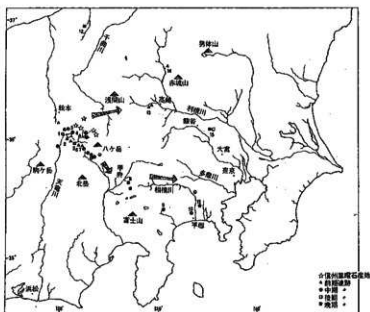
を全体を過小評価することも慎重なしなければならない。例えば本遺跡でも僅かに出土している東海系無文薄手土器（木島式）については、隣接する塚田遺跡の土器胎土分析をおこなった水沢によれば（水沢1994）、その出自は60km以上の距離を隔てた南信以南の地域であるという。直接的であれ間接的であれ他地域の集団とのコミュニケーションは存在したのである。問題はその構造的特質と連鎖の強さにあろう。

さて、同じ縄文前期であっても当該期に続く中葉の関山並行期になると、黒曜石の動きに変化が生じるらしい。

一例として本遺跡より1kmほど北にある城之腰遺跡の集落（関山並行期）での石材利用の傾向をみると、本遺跡とはまったく対称的なあり方を示している（御代田町教育委員会1992）。城之腰遺跡では、石器石材の八割以上が黒曜石（おそらく和田峠周辺のもの）で占められていることが窺える。またその中には幾つかの黒曜石原石も含まれている。逆に本遺跡で多用されていた硬質頁岩は城之腰では石匙2点に利用されているのみ、ガラス質安山岩も1点がみられるのみであった。また、同じ関山期で、本地域から碓井峠を下った安中市注連引原遺跡（安中市教育委員会1988）においても黒曜石原石9点の貯蔵例がみつき、一点は分析の結果星ヶ塔産であることが判明した。こうした和田峠から碓井峠・北関東にかけてのルート上に黒曜石の原石貯蔵例が知られることは、前期中葉に交換システムがより積極的に機能し始めた状況を物語っている⁽²⁾。

ところで金山喜昭によれば、信州から南関東・北関東までの地域において、縄文中期になると、信州系黒曜石の移動ルート上とも想定される遺跡において原石の出土事例がしばしばみられるのだという。また、そのなかで山梨の釈迦堂や群馬の糸井宮前遺跡においては多量の原石出土がみられ、そうした貯蔵例をもつ集落が周辺の集落への再分配の中心でもあった可能性があるという（金山1989）。

以上をふまえるかぎりでは



1. 高久保 2. 宮神山 3. 海戸 4. 高尾山 5. 御代田町 6. 河久 7. 大石 8. 釈迦堂
9. 尾崎 10. 上ノ入 11. 浮川天神様 12. 碓井 13. 注連引原 14. 糸井宮前 15. 城

第93図 信州系黒曜石の原石出土遺跡（金山1989）

は、縄文時代の中部高地から関東においては、おそらく前期中葉より黒曜石の交換システムが積極的に機能しはじめ、中期に至っては、交換をめぐる連鎖のなかから再分配システムが現出したことも予測されよう。

なお、最近、黒曜石原産地である長門町鷹山遺跡群で縄文時代後期と考えられる採掘坑75基が発見されて話題を集め「縄文鉱山」と呼称されたが、こうした大掛かりな採掘による石材獲得システムは、おそらく中期以降に発現したものと予測されよう。

註

- 1) ただ、柴田氏は、ここでいうガラス質安山岩については、黒色緻密安山岩という呼称をとっている。
- 2) なお、本遺跡と同時期、縄文前期初頭の黒曜石の貯蔵例が茅野市高風呂遺跡で4か所確認されている。高風呂遺跡の貯蔵黒曜石は化学分析の結果、星ヶ塔・和田峠産と判明した。ただ、これをもって前期初頭における交換のための貯蔵と判断できるかどうかは難しい点が残る。それが集落内での消費のための貯蔵であった可能性も当然であろう。同遺跡が原産地から10kmという至近距離にあり原産地に隣接する遺跡であることを考慮すれば、むしろ問題は原産地から距離をおいた遺跡において今後黒曜石の貯蔵例や利用率の高さが認められるかどうか、という点にかかわってくるだろう。

引用参考文献

- 安中市教育委員会 1988 『注連引原II遺跡』
- 金山喜昭 1989 「文化財としての黒曜石」 『月刊文化財』298
- 茅野市教育委員会 1986 『高風呂』
- 東部町教育委員会 1982 『真行寺』
- 長門町教育委員会 1984 『中道』
- 水沢教子 1994 「塚田遺跡出土土器の胎土について」 『塚田遺跡』
- 御代田町教育委員会 1992 『城之腰遺跡』
- 山口逸弘ほか 1992 『五目牛南組遺跡』
- 山本薫・金山喜昭・柴田徹 1991 「石材組成の変遷」 『石器文化研究』3
- Binford, L. R 1976 Organization and Formation Processes: Looking at Curated Technologies. *Journal of Anthropological Research* 35.
- Renfrew, C 1975 Trade as Action at a Distance: Questions of Integration and Communication. *Ancient Civilization and Trade*.

4 前期初頭の土器群について

賛田 明

(1) はじめに

下弥堂遺跡より出土した土器は、すべて縄文時代前期初頭に位置付けられるもので、以後の擾乱を免れた為に、当該期の資料を良好な状態で提供することとなった。出土土器には、中道式(児玉1984)とされた肥厚口縁を有する土器のほかに、口縁部へ隆帯を巡らせる事の特徴とする塚田式(下平・賛田1994)が見られる。

筆者らは、1994年2月に群馬県で行われた「第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相」で発表の機会を与えられ、長野県の様相の中で前期初頭土器群をⅠ～Ⅲ段階に変遷させ、Ⅰ段階に塚田式を、Ⅱ段階に中道式を、Ⅲ段階には肥厚しない口縁部を有する土器群をそれぞれ置いた。これらは、高い明瞭な隆帯が肥厚口縁となり、肥厚部が衰退することにより肥厚しない口縁形態を持つ土器へと変遷する事を予想したもので、Ⅰ段階～Ⅱ段階への変遷を下弥堂遺跡出土土器を使って説明した。

本稿でもこうした点に注目して下弥堂遺跡の土器を考察し、あわせて前期初頭土器群の変遷についても言及したい。

(2) 当該期をめぐる研究動向

長野県における前期初頭土器群の研究は、中道式が設定された事から始まる。

中道式は、「中部高地における花積下層式期の土器群に理解を与えるメルクマール」(児玉1983)として、「住居址床面に出土し、かつ総体的にも比較的まとまって出土している遺跡名を冠して」児玉卓文氏により設定された土器で(児玉1984)、中道遺跡SB09出土土器を型式設定の基本資料とするものであった。その内容は以下の通りである。

- ① 肥厚口縁尖底土器器形を呈する
- ② ①の口縁部は波状小波状を呈するものが多い
- ③ ②のものには波頂部からさらなる垂下肥厚部を有するものがある
- ④ 文様は縄文重帯施文を主とするが、原体縄軸巻き回転摺糸文も存在する
- ⑤ 縄文重帯施文は羽状構成を採る例が多く、結節縄文も頻度が高く、結束縄文も在る
- ⑥ ④・⑤の整合に拙劣さの見られるものも存在する

さらに①～⑥に併行する土器として、「肥厚口縁を呈さず②・④・⑤の特徴を具備する」土器をあげ、これらの土器に1段燃り原体側面圧痕文土器が伴う事を指摘している。同時に口縁部へ隆

帯を貼付する土器は、類例が少ない事と隆帯の形態によっては時間的に若干過る可能性があるとして、中道式の範疇から除外され、明確な位置付けがなされなかった。

その後、茅野市高風呂遺跡（守矢1986）で肥厚口縁土器とともに、隆帯を有する土器が多数出土する等類例が増加し、また東海系土器群が伴出した事で当該期の土器群に時間的位置を与える目安となった。高風呂遺跡・芥沢遺跡（守矢1990）の調査を行った守矢昌文氏は、これらの土器の口縁部形態に着目し8形態に分類を行い、伴出する東海系土器群との関係を踏まえた上で、①タガ状の貼付隆帯 ②貼付隆帯の消滅、口縁部下の肥厚化・垂下肥厚部との組み合わせ ③垂下肥厚部の消滅、平縁で肥厚口縁となる、とのI-III段階の変遷を予想した（守矢1989・1990）。この変遷観は、早期末～前期初頭土器群の変遷の方向性を示したものととして、多いに注目される。

一方、結条体圧痕文土器の研究から前期初頭にふれた小沢由加利氏は、梨久保遺跡の考察で、前期初頭に結条体圧痕文が残るとした。結条体圧痕文土器と刻みを持つ逆T字状の隆帯を施す縄文施文土器を同時期とし、縄文施文土器をもって前期初頭に位置付けたのであるが、これらが出土した23号住居址は2軒の切り合いが指摘され、縄文施文土器が床面より出土した住居址bが、同様に床面から結条体圧痕文が出土した住居址aを切っていると明記されている。また、覆土の土器は、a・b両住居址に分離できない等明確さに欠ける。刻みを持つ隆帯は前期初頭に存在するが、東北・関東地方の例から早期末⁽⁴⁾に縄文施文土器が伴う事も確実で、該期の様相はこうした状況も考慮しながら検討する必要がある⁽⁴⁾。

金子直行氏は、埼玉県下段遺跡の報告で中部地方の土器群についてふれ、中道遺跡・高風呂遺跡の資料を、「1時期の資料とするにはあまりにも新旧の要素が混在している」と述べ、異原体羽状縄文の存在をもって前期最初頭におく考えを示した（金子1989）。金子氏の言う縄文施文法の変化も重要であるが、特徴が最も現れる口縁部に注目するのが有効と考える。

本遺跡に隣接する塚田遺跡⁽²⁾では、高く明瞭な隆帯や隆帯と沈線を組み合わせて口縁部文様帯を形成する土器群が出土している（小山・堤1992）。筆者らはこれらの土器群に対して「塚田式」の名称を与え、関東地方の下吉井式及び花積下層I式（谷藤1994）に併行する土器として、中道式の前に位置付けた（下平・賛田1994）。塚田式の主な特徴は以下のとおりである。

「塚田式」は、口縁部文様帯に高く明瞭な隆帯、または関東地方の下吉井式に類似する文様を沈線で施す土器で、その文様から前期最初頭の下吉井式に並行することが考えられる。隆帯の構成には一条または二条の水平隆帯・逆T字隆帯などのバラエティがあり、隆帯に刻みを入れたり、鋸歯状の沈線を施すものが存在する。沈線は隆帯で区画される口縁部文様帯に描かれ、ゆるやかな波状・弧状を呈するものなどがみられる。胴部は異原体二本を用いる羽状縄文が施されるが、縄文が口縁部におよぶこともある。また、結束・結節は存在しないようである⁽²⁾。

(3) 下弥堂遺跡出土土器の分類

前期初頭土器群は、守矢氏が指摘している如く(守矢1989・1990)口縁部の形態から分類を行うのが、有効と考えられる。そこで口縁部の形態に着目し、施文される文様を加味しながら以下のように分類した(第94図)。また、各遺構の伴出状況を表49に示した。

第I群 口縁部に低い隆帯を貼付するもの。(1~20)

1類 口縁部に沿って1条の水平隆帯を巡らせるもの。(1~8)

a. 口唇部下~隆帯上に無文部を形成し、以下胴部に縄文または摺糸文を施すもの。(1~4)

b. 縄文が、隆帯上を含めて器面全面に施文されるもの。(5~7)

c. 口唇部下~隆帯上に幅の狭い口縁部文様帯を形成し、摺糸の側面圧痕を施すもの。胴部には、縄文が施文される。(8)

2類 平縁または波状口縁を呈し、1条の水平隆帯に口唇部から垂下隆帯を連結するもの。波状口縁の場合、垂下隆帯は波頂部から貼付される。縄文は、隆帯上を含めて器面全面に施文されるものと、隆帯下に施文されるものとが存在する。(9・10)

3類 波状口縁を呈し、緩やかな弧状隆帯を1条施すもの。弧状隆帯は、波頂部下連結し、器面全体に縄文が施文される。(11)

4類 平縁で口縁部に沿って2条の隆帯を巡らせ、隆帯上部へ縄によると思われる刺突を加えるもの。(12)

5類 平縁または波状口縁で隆帯が貼付されるが、隆帯に施文されるもの。(13~20)

a. 1条の隆帯に、縦位または斜位の刻みを施すもの。(13・14)

b. 1条の隆帯に鋸歯状の沈線を施すもの。(15・16)

c. 縦位の刻みを持つ隆帯を1条貼付し、隆帯下方に2条の沈線を施文するもの。(17)

d. 縦位の刻みを持つ1条の隆帯を貼付し、隆帯上方に斜めの沈線を施文するもの。(18)

e. 縦位の刻みを持つ隆帯を2条貼付するもの。(19)

f. 2条の隆帯に斜位の刻みを施すが、方向を変えて矢羽状を呈するもの。(20)

第II群 口縁部が肥厚口縁となるもの。いずれも平縁で、波状口縁になるものは存在しない。(21~27)

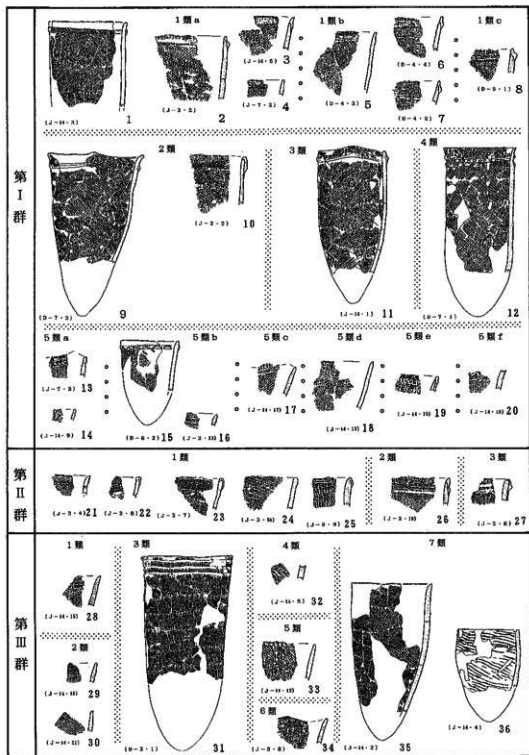
1類 器面全面に縄文または摺糸文を施すもの。(21~25)

2類 肥厚部に横位の沈線を施すもの。(26)

3類 肥厚部に側面圧痕を施すもの。(27)

第III群 口縁部が肥厚しないもの。(28~36)

1類 口縁部文様帯に2列の短沈線を矢羽状に施文するもの。また、短沈線間に1条の沈



第94図 下弥堂・前期初頭土器の分類 (1:8)

線が見られる。(28)

- 2類 頸部に刺突を行い、口縁部文様帯に燃糸の側面圧痕文を施すもの。(29・30)
- 3類 器面全面に縄文が施文され、口縁部に3条の沈線を施すもの。(31)
- 4類 口縁部に斜めまたは矢羽状の刻みを施すもの。少破片の為、詳細はわからない。(32)
- 5類 器面全面に縄文を施文し、同一と思われる原体で口唇部直下へ押捺を加えるもの。(33)
- 6類 波状口縁をなすもので、口唇部下に無文部を形成して縄文を施すもの。(34)
- 7類 器面全面に、縄文又は燃糸文を施すもの。(35・36)

(4) 出土土器の検討

第I群土器は口縁部に低い隆帯を貼付することに特徴があり、J-2・14号住居、D-4・6・7号土坑で良好な土器が出土している。

1類は口縁部に1条の水平隆帯を巡らせるもので、本群中最も出土事例が多い。a～c種に細分できるが、口唇部下に余り幅をおかず、隆帯を貼付することで共通している。隆帯の形態は、J-14号住居(第94図)の1の様丸みを帯びた扁平に近いものと、J-2号住居2(第94図2)の様丸みを帯びた三角形になるものがあり、前者が後者を圧倒する。またD-9号土坑で出土しているc種は(第94図8)隆帯の際に側面圧痕が施され、結果的に隆帯がより強調されたものとなっている。

1類の類例であるが、茅野市芥沢遺跡(守矢1990)(第95図2)・埼玉県荒川村下段遺跡(第99図12)(金子1989)でみられる。12は下段遺跡第1号住居出土土器で、1条の隆帯を貼付し口唇部下から器面全面に縄文R・Lを施文する。本類b種に相当しよう。また芥沢遺跡出土の2は、包含層から肥厚口縁尖底土器・下吉井式・木鳥Ⅲ式(渋谷1983)等と伴に出土した土器で、1条の隆帯を巡らせた後、4本揃えの1段燃糸文を施文している。1類b種に燃糸文を施文した例である。

c種に近い土器として、下段遺跡斜面出土土器が挙げられる。(第95図1)口縁部に1条の隆帯で幅の狭い文様帯を構成しRとLによる直線的な側面圧痕を施文するが、側面圧痕が2段であること、縦位の側面圧痕を施していることが、異なっている。また胴部の縄文が、下段遺跡の土器は同一原体で施文方向を変えて縦位菱形構成をなすのに対し、本遺跡のものは異原体で羽状を構成している。

関東地方では、前期羽状縄文系土器群の古い段階に条が縦走る縄文・縦位菱形構成をなす縄文が見られるものの、長野県では現在の所、縦位菱形構成の縄文は殆ど出土していない。胴部縄文の差異は、こういった事情を反映していると思われる。

2類は1条の隆帯に口唇部から垂下隆帯を連結する土器で、J-2号住居(第94図10)、D-7号土坑(第94図9)から出土している。横方向に巡る低い隆帯～隆帯上方の口縁部全体が強調さ

れ、緩やかな波状口縁の波頂部から垂下隆帯を施す等で、中道式に類似した垂下隆帯の構成となっている。本類は藤巻幸男氏が指摘する如く（藤巻1992）肥厚口縁土器の直前に置く土器で、強調された口縁部が肥厚し垂下隆帯が明確化されて、中道式が成立するものと思われる。隆帯の系譜であるが、水平隆帯に垂下隆帯を連結させた逆T字状のものは、塚田遺跡に存在する

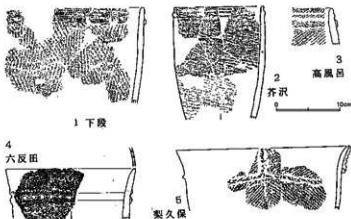
（第99図4）。同図5と伴にD-39号土坑から出土したもので、この他に条の縦走する縄文土器も出土している。5の文様が下吉井式に類似し、沈線で描かれる事から前期最初頭に位置付けられるものだが、4の隆帯を本類と比較するとより高く明確である。塚田遺跡D-39土坑（第99図4）→下弥重遺跡D-7号土坑（第94図9）→中道式（第100図10）の変遷が、予想できよう。

3類は緩やかな弧状隆帯を貼付しているが、波頂部下で隆帯が連結し先端にまで及ぶ事から、垂下隆帯は無いものの、2類と同様の効果を出していると思われる。

4類は2条の隆帯上方に縄の末端によると思われる刺突を施す土器で、D-7号土坑から出土している。類例は茅野市高風呂遺跡11号住居（守矢1986）にあり（第95図3）、木島IV式等と共存している。また長門町六反田遺跡（児玉1983）の遺構外から、隆帯上方に刺突を行う土器が出土している（第95図4）。2条の隆帯間に円形竹管で刺突を行う土器であるが、刺突の原体が異なる

第43表 遺構別の土器伴出例

群	第1群											第2群			第3群								
	1a	1b	2	3	4	5a	5b	5c	5d	5e	6	7	1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	
J-1号住居址																							
J-2号住居址																							
J-3号住居址																							
J-4号住居址																							
J-5号住居址																							
J-6号住居址																							
J-7号住居址																							
J-8号住居址																							
J-9号住居址																							
J-13号住居址																							
J-14号住居址																							
D-1号土坑																							
D-3号土坑																							
D-4号土坑																							
D-6号土坑																							
D-7号土坑																							
D-9号土坑																							
D-10号土坑																							
D-15号土坑																							



第95図 前期最初土器の類例（1：6）

ものの、本類と極めて類似した土器である。

5類は低い隆帯に縦位・斜位の刻みや鋸歯状の沈線が施される土器で、J-14号住居(第94図)から纏まった資料が出土している。下弥堂遺跡では出土していないが、鍛冶尾遺跡3号住居(翠川1988)のように、刻みを持つ隆帯で口縁部文様帯を構成し、側面圧痕を施す土器もある(第99図10・11)。これらの隆帯の出自であるが、隆帯に刻みを持つ例は塚田遺跡出土土器にも見られるものの、前述の如く高く明瞭な隆帯で、本類と同質のものでは無い。また長野県の場合、研究史でふれた通り早期末～前期初頭に梨久保遺跡23号住居(小沢1986)の様に刻みを持った細い隆帯を貼付する(第95図5)縄文土器が存在する。筆者らはこれを前期初頭に置く考えを示したが(下平・賛田1994)明確さに欠き、早期末の絡糸体圧痕文土器とも絡めた上で、今後、検討していかなければならない問題と考えている。また、隆帯に鋸歯状の沈線を施す土器についても同様に、承踏を検討する必要がある。

第Ⅰ群土器は、第1表に示す通り遺構の伴出関係から同時期と考えられる。構成要素が多様で、検討すべき問題も含むが、積極的に分ける根拠が見当たらない為遺構の伴出事例を現段階では評価しておきたい。これらは隆帯を持つことから塚田式に含まれ、縄文前期最初頭に置く事ができよう。但し、塚田式の中でも後出的な要素をもち、肥厚口縁土器に近いものである。また4類は類例に極めて乏しいため、同時期であるものの塚田式からとりあえず除いておきたい。

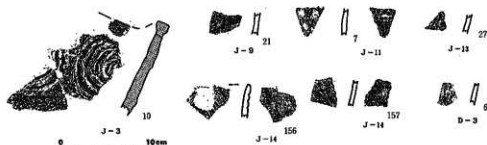
第Ⅱ群土器は口縁部が肥厚口縁である事が最大の特徴で、J-3・6号住居等から良好な資料が出土している。1類土器は中道式に該当し、児玉氏が設定した内容の域を出るものではなかった(児玉1984)。東信地方を中心に多くの出土事例があり、このうち茅野市高風呂遺跡(守矢1986)では、木島Ⅲ～Ⅵ式と住居址で共伴している。

3類は肥厚部に側面圧痕を施すが(第94図27)、中道式に同様な例は無く、第Ⅰ群に伴う土器であろう。

第Ⅲ群土器は、第Ⅰ・Ⅱ群に共伴する口縁部が肥厚しない土器群である。1～5類は中道式に存在しない事から第Ⅰ群土器と伴出するものであろう。5類は、下段遺跡(金子1989)の遺構外出土土器に類例が見られる。6類は第Ⅱ群土器を主体とするJ-3号住居から出土しており、肥厚口縁土器に伴う可能性が強い。7類は殆どの遺構から出土している事から、第Ⅰ・Ⅱ群両方に伴うと思われる。

なお、この他の土器では、花積下層Ⅱ式土器の破片1片がJ-3から、東海系土器の破片6片が各遺構から出土していることを付け加えておく。

以上、下弥堂遺跡の土器を概観してきた。次に他遺跡の土器を交えて前期初頭土器の変遷を示したい。



第96図 下弥堂遺跡の花積下層Ⅱ式(左)と東海米土器(右)(1:4)

(5) 前期初頭土器群の変遷 (第97図)

I段階 第99図

塚田式が相当する(3, 4, 5, 6)。口縁部文様帯へ、隆帯及び下吉井式と類似する緩やかな弧状沈線等を施す点を特徴とし、胴部には単節縄文または燃糸文が施文される。関東地方の下吉井式・花積下層Ⅰ式(谷藤1994)に併行する段階で、縄文前期最初頭に位置付けられる。早期末の文様構成要素であった絡条体丘痕文は、本段階には残らない。器形は平縁・波状口縁があり、底部は尖底となる。

前述した如く隆帯の形態的な変化などから、下弥堂遺跡のように後出的な様相の土器群も存在する。将来的に、I段階が細分できる事を示唆しているものと思われるが、遺構同志の切り合い等がなく明確さに欠ける為、現段階では可能性を指摘するにとどめたい。

I段階に伴出する土器として、条が縦走る縄文施文土器(第99図1・7)、平縁で縄文・燃糸文を全面に施文する土器(2・8)、平縁で縄文を器面全面に施文し、口唇部下へ縄文原体で押捺を加える土器(第56図12)、側面丘痕を施す土器(第99図9・10・11)、隆帯の上方に縄原体で刺突を加えた土器(第94図12)等がある。

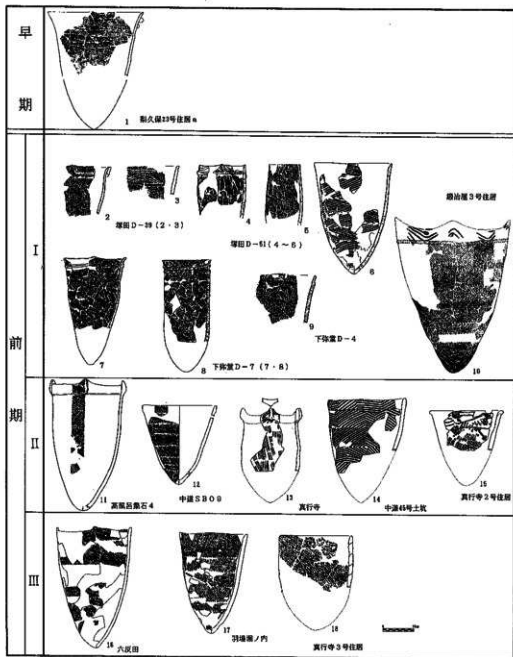
— I段階に所属する代表的な遺跡 —

御代田町塚田遺跡D-7・30・34・39・51・124号土坑、下弥堂遺跡J-2・7・14号住居、D-4・6・7・9号土坑、奈川村位沢遺跡の一部、東部町鍛冶屋遺跡3号住居。

II段階 第100・101図1

中道式が相当する。花積下層Ⅱ式(谷藤1994)に併行し、I段階の特徴であった隆帯が、肥厚口縁化する事を特徴とする。口縁部文様帯にはI段階に見られた沈線による文様は継承されず、器面全面に縄文・燃糸文が施文される。縄文は単節縄文を用いて横位施文され、羽状構成をとるものが多く、結節縄文も見られる。

器形は平縁・4単位波状口縁を呈する尖底深鉢形で、4単位波状口縁のものは、波頂部からさ



第97図 長野県に於ける縄文時代前期初頭土器変遷図

らに垂下隆帯が貼付される。

Ⅱ段階に伴出する土器には、肥厚口縁にならない平縁で縄文または撚糸文を施文する土器、撚糸の側面圧痕文を施す花積下層式土器（第101図1）がある。

—Ⅱ段階に所属する代表的な遺跡—

長門町中道遺跡SB09、同六反田遺跡の一部、武石村江戸塚遺跡、東部町真行寺遺跡2号住居、茅野市高風呂遺跡8・23・26・42号住居・集石4～7の一部、佐久市栗毛坂遺跡、御代町下弥堂遺跡J-3・6号住居

Ⅲ段階 第101図2～7

Ⅱ段階の肥厚口縁が消滅し、口縁部が肥厚しない尖底深鉢形の土器が該当すると思われるが、良好な資料が僅かで明確さに欠ける。器形は平縁または4単位の波状口縁を呈する尖底深鉢形で、器面全面に縄文が施文される。縄文は斜縄文と羽状縄文とが存在し、Ⅱ段階よりも乱れる傾向にある。Ⅰ・Ⅱ段階は、塚田式・中道式にそれぞれ口縁部が肥厚しない土器が伴っていたが、本段階は口縁部が肥厚しない土器のみで構成する。

段階の設定は東部町真行寺遺跡2号住居と同3号住居の切り合いを根拠とするもので、Ⅱ段階の土器（第101図1）が出土した2号住居を、第101図2の土器が出土した3号住居が切っている事による。2は、口唇部から器面全面に斜縄文が施されている。（児玉1982）。

同様な土器は戸倉町円光房遺跡3号土坑（3）にあるが、こちらは底部付近で縄文の条の方向が一部変わっており、真行寺遺跡例よりも、施文される縄文が、より乱れたものとなっている。

本段階は、前後関係から花積下層Ⅲ式（谷藤1994）に併行する段階と考えられるが詳細は不明である。花積下層Ⅲ式には、群馬県三原田城遺跡出土土器（第98図）などが相当するが、長野県では現在この様な土器は全く出土していない。

また、本段階に位置付けられる可能性のある土器として、真田町真田氏館跡遺跡（岸崎ほか1992）の土器（6・7）を挙げておく。2点はいずれも口縁部で、胴部との境界が激しく屈曲し、屈曲部に刺突が施され、6は口唇部上にも刺突が見られる。文様は、両者とも単節斜縄文が施文されている。出土状況は、「館築造の際、版築等で縄文時代の遺物包含層が攪乱を受け、再堆積した」層から出土しており、伴出遺物等一切不明である。花積下層Ⅲ式に類似する器形である事から、本段階に所属させたい。

いずれにしても本段階は良好な資料に恵まれず、現段階では不明な点が多い。中部地方における尖底土器の終焉とも絡めた上で、資料が増加するのを待って再検討したい。

—Ⅲ段階に所属する代表的な遺跡—



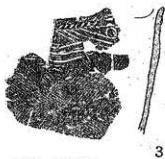
第98図 三原田城花積下層Ⅲ式（1：6）



塚田 D-30号土坑



塚田 D-30号土坑



塚田 D-34号土坑



塚田 D-39号土坑



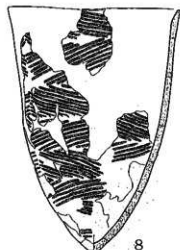
塚田 D-39号土坑



塚田 D-51号土坑



塚田 D-51号土坑



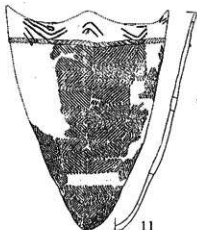
塚田 D-51号土坑



塚田遺構外



殿治屋 3住



殿治屋 3住



下段 1住

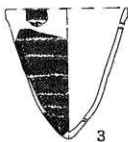
第99図 1段階の土器



中道9住



中道9住



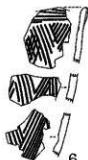
中道9住



中道9住



中道9住



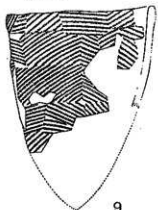
中道9住



中道9住



中道9住



中道45号土坑



高風呂集石4



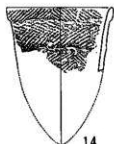
高風呂集石7



真行寺

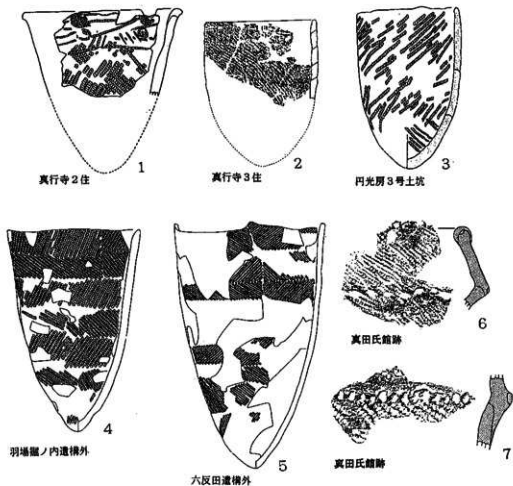


江戸窄道構外



江戸窄道構外

第100図 II 段階の土器



第101図 III段階の土器

真行寺遺跡3号住居、六反田遺跡の一部、上山田町羽場堀ノ内遺跡、戸倉町円光房遺跡3号土坑

(6) おわりに

下弥堂遺跡出土土器の分析を行い編年の位置付けを行う為、他遺跡の状況を含めて長野県における前期初頭縄文施文土器群の変遷を考えてみた。長野県では前期初頭の土器群がⅠ～Ⅲ期に変遷し、下弥堂遺跡の土器群はこのうちⅠ期とⅡ期に位置付ける事ができる。上述してきた通り当該期には多くの問題を内在するが、筆者自身の不勉強の為これらに充分な検討がなされたとは到底いいがたい考察となった。今後も機会があれば、再考したいと思っている。

最後になりましたが、多大な御教示を頂いた以下の方々に感謝の意を表します。

戸田哲也 渋谷昌彦 谷藤保彦 関根慎二 綿田弘実 中沢道彦 岸崎浩実 下平博行
水沢教子 堤 隆 小山岳夫 (順不同、敬称略)

註

- (1) セミナーに参加された多くの方々大変お世話になった。この場を借りて感謝する次第である。
- (2) 塚田遺跡の発掘調査報告書は、1994年3月に刊行予定である。塚田式の詳細な型式概念等は、そちらの方を参照されたい。
- (3) 塚田式の設定にあたっては、塚田遺跡の土器を実見された渋谷昌彦・谷藤保彦両氏に型式設定すべき資料であると御指摘、御教示を頂いた。
- (4) セミナーで、切り合いを積極的に評価し、梨久保遺跡の絡糸体瓦紋文土器を早期末に、縄文施文土器を前期最初頭にそれぞれに位置づけた筆者らに対し、中沢道彦氏から再検討すべきとの指摘を頂いた。

参考・引用文献

- 小沢由加利他 1986 『梨久保遺跡』 岡谷市教育委員会
- 神奈川考古同人会縄文研究グループ編 1983 「縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」『神奈川考古』第17号
- 金子直行 1989 『下段遺跡』 埼玉県埋蔵文化財事業団
- 岸崎浩実ほか 1992 『真田氏館跡』 真田町教育委員会
- 児玉卓文 1982 『真行寺』 東部町教育委員会
- 児玉卓文 1983 「含繊維小波状肥厚縁土器群の覚書」『しなのろじい』No200 千曲川水系古代文化研究所
- 児玉卓文 1983 『長門町六反田』 長門町教育委員会
- 児玉卓文 1984 『長門町中道』 長門町教育委員会
- 児玉卓文 1987 「長野県」『縄文前期の諸問題』第1回縄文セミナー 群馬県考古学研究所ほか
- 児玉卓文 1989 『武石村誌』
- 近藤義尚 1991 「栗毛坂遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査調査報告書』2 長野県埋蔵文化財センター
- 渋谷昌彦 1982 「木島式土器の研究」『静岡県考古学研究』11 静岡県考古学会
- 渋谷昌彦 1983 「神之木古・下吉井式土器の研究」『小田原考古学研究会会報』11 小田原考古学研究会

- 渋谷昌彦 1984 「花積下層式土器の研究」『丘陵』11 甲斐丘陵考古学研究会
 縄文セミナーの会 1994 『早期終末・前期初頭の諸様相』 第7回縄文セミナー
 堤 隆・小山岳夫 1992 『概報 塩野西遺跡群』 御代田町教育委員会
 守矢昌文 1986 『高風呂遺跡』 茅野市教育委員会
 守矢昌文 1989 「長野県における縄文時代早期末から前期初頭の土器群について」『会報』3 諏訪考古学研究会
 守矢昌文 1990 『芥沢遺跡』 茅野市教育委員会
 翠川泰弘 1988 『鍛冶屋遺跡』 東部町教育委員会
 百瀬忠幸 1990 『四日市遺跡』 真田町教育委員会
 森嶋 稔 1984 『羽場堀ノ内遺跡』 上山田町教育委員会
 森嶋 稔 1990 『円光房遺跡』 戸倉町教育委員会

5 縄文前期初頭の集落

(1) はじめに

下弥堂遺跡は、住居14軒と土坑16基からなる縄文前期初頭の単純集落で、他の時期の遺構が重複しない点では、その様相が整理しやすい。以下、それらの遺構について検討を重ね、他遺跡とも比較し、縄文前期初頭の集落の様相を垣間見てみたい。

(2) 下弥堂遺跡の竪穴住居

竪穴住居14軒の構造についてふれておく。その集成は第102図・第50表にある。

床面積 第103図に床面積の分布を示した。最小4.6㎡、最大25.7㎡で5倍以上のひらきがある。分布のまとめるとすれば、5～8㎡程度のもの（仮に小形とする）が6軒、10～15㎡程度のもの（中形）が5軒、20～25㎡程度のもの（大形）が3軒ある。

小形 J-2・J-4・J-5・J-7・J-9・J-11

中形 J-3・J-6・J-8・J-10・J-12

大形 J-13・J-14・(J-1?)

平面形 不整形のもの12軒、不整形丸方形のもの2軒ある。不整形のもの小形・中形に、隅丸方形のものは大形に目立つ傾向がある。

不整形 J-2・J-4・J-5・J-6・J-7・J-8・J-9・J-10・
J-11・J-12・J-13・J-3（隅丸方形にも近い）

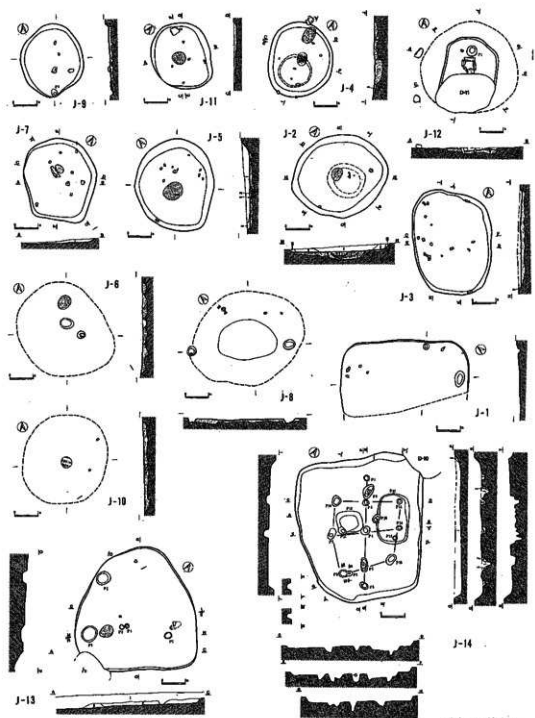
隅丸方形 J-1・J-14

掘込み 遺構確認面から床面までの深さは14軒中最高で35cm、確認面がほぼ床面である場合もあった。恐らく本来の掘込みも全般に浅めであったと考えられる。例えば中期などでは掘込みの深さが1mを越える場合も少なくなく、対照的な事例といえる。

第50表 下弥堂遺跡住居一覧表

住居	形状	大きさm	面積㎡	ピット	炉	住居	形状	大きさm	面積㎡	ピット	炉
J-1	隅丸方形	5.5×7	不明	2個	不明	J-8	不整形	(4.0×5.0)	(14.8)	3個	無
J-2	不整形	4.2×3.5	7.8	無	地床炉	J-9	不整形	3.1×2.6	4.8	1個	無
J-3	不整形	4.4×3.4	10.8	無	無	J-10	不整形	(4.0×3.5)	(11.1)	無	地床炉
J-4	不整形	3.2×2.7	5.3	無	地床炉	J-11	不整形	2.9×2.5	4.6	無	地床炉
J-5	不整形	3.9×3.5	7.3	無	地床炉	J-12	不整形	(4.2×3.9)	(12.6)	1個	石囲炉
J-6	不整形	(4.0×4.0)	(12.2)	2個	地床炉	J-13	不整形	5.1×5.1	21.0	5個	地床炉
J-7	不整形	3.0×3.0	7.0	無	地床炉	J-14	隅丸方形	6.1×5.2	25.7	15個	無

() は推定値



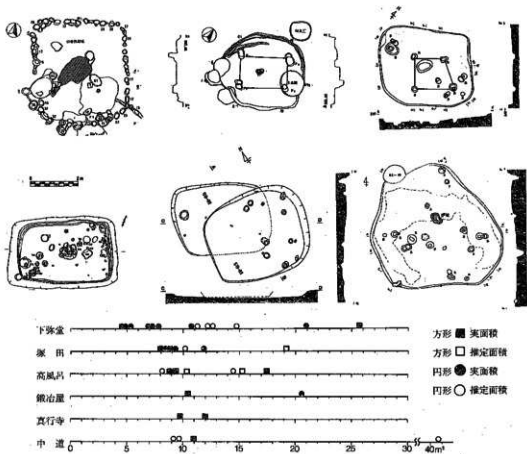
第102図 下弥堂遺跡の縄文前期初頭の住居集成 (1:160)

- 床面 多くは貼床であり、いずれの住居の床面もあまりしまりが無い。
- 柱穴 規則的な配列をみせる柱穴と考えられるビットをもつのは、J-14号住居だけである。J-14は隅丸方形の住居プランにそって、柱穴と考えられるビットがほぼ方形に3個づつ配置される。その配置のうち東西の中央ラインでは6個のビットが並ぶ。そのうち一番外側の2個は補助柱の柱穴かもしれない。また、住居中央のビットは方形配列のライン上にうまく合致するが、柱穴となるかどうかはわからない。このほかの住居で柱穴の可能性のあるのは、J-8の対になるビットである。
- 上部構造 柱穴のあり方からみた住居の上部構造は、大形住居のJ-14では住居内の四方に4-6本の主柱を配し上屋がかけられたものであろう。一方、中・小形住居では柱穴はおろか小ビットでさえまったくみられないものが大部分であった。10㎡未満の小形住居では内部に柱があつてはむしろ不便でもある。それについては推測の域をでないが、あるいは住居の壁の外側（周塹があつたとすればその部分）に細い木材が斜めに差し込まれ、上屋がかけられるという、いわばテント風の構造を考えておくことができようか。
- 炉 炉が確認された住居は9軒で、内訳は地床炉8軒・石囲炉1軒である。
- 地床炉 J-2・J-4・J-5・J-6・J-7・J-10・J-11・J-13
- 石囲炉 J-12
- このうち地床炉ではJ-7が炉縁石1個を伴っている。地床炉の位置は、住居のほぼ中央にある事例が6例、一方に寄る場合が2例ある。
- また、J-12の石囲炉は他の地床炉と比べると立派な構造物であり、他時期の可能性も考えられないわけではない。が、この遺構から出土したのは前期初頭の土器片のみであり、また遺跡全体でも他時期の遺物はまったく出土していないことから、当該期の遺構として位置付けた。なお、本石囲炉が屋外炉であった可能性も否定できない。

(3) 縄文前期初頭の住居構造

当該期の諸遺跡下弥堂・高風呂・鍛冶屋・真行寺・中道遺跡の住居構造についてみておこう。

まず、その平面形では、これらいずれの遺跡にも不整形のもののみみられる反面、隅丸方形のものも存在も安定化しつつあることが窺える。不整形・隅丸方形ともに柱穴の配置の規則性がみられるものは数少ないが、隅丸方形の住居では主柱の方形配置がなされる例も若干ある（下弥堂J-14住・高風呂3住）。これら諸遺跡の微妙な時期差も勘案した場合、おそらく不整形の住居が減少し、主柱の規則的配置がなされた隅丸方形の定形化した住居が増加するという傾向を予



第103図 前期初頭の住居の形態と面積分布

測できようか。

次に、第103図に各遺跡の住居床面積の分布を示した。その面積は15㎡以下のものがほとんどであるようだ。20㎡以上のいわば大型ものは数が少ない（下弥堂J-13・14住、鍛冶屋5号住）。なお、中道遺跡の4号住は41.6㎡と飛び抜けており特大ともいえるが、床面のみで住居範囲がおさえられた経過があり、不確実な部分を拭いされない。

炉は、下弥堂J-12が石囲炉である以外はいずれも地床炉である。

構造上貧弱なものが多く、遺棄あるいは廃棄された遺物量も少なく、床面もさほど締まっていない当該期の住居ことを考えると、定形化し石囲炉や支柱が安定して存在するそれ以降の住居に比べると、一般にその使用（耐用）サイクルが短かったことが帰納されよう。

(4) 下弥堂の前期初頭集落の構造

下弥堂遺跡の前期初頭集落は、標高830mの舌状台地上に形成された住居14軒と土坑16基からなる。これらの遺構は、本来的にはどのような組み合わせをもって集落を形成していたのかを考えてみることにしよう。

まず遺構の重複関係であるが、住居どうしでは重複関係をもっていない。また、土坑どうしでも重複関係はみられない。住居と土坑ではJ-14とD-10、J-12とD-11の重複が認められる。住居間の距離では、J-6とJ-7の距離が2mと近接するが、それ以外では6m以上の距離をおいている。いずれも並立不可能な距離ではない。したがって、単純に重複関係や配置関係からは住居14軒が同時並存していた可能性も、段階的に分散して存在していた可能性も否定できない、といえる。

次に、住居から出土した土器には時間的な有意差は認められるだろうか。本報告掲載の賢田の分析によると、少なくとも本遺跡の土器には、口縁部に低隆帯をもつもの(I)と低隆帯を持たず肥厚口縁となるもの(II)の二形態が区別され、それが段階差として認識できるという。両形態は住居や土坑によっては混在する場合もあるが、大きくは遺構毎に分かれて出土する傾向にある。出土土器がそのそれぞれの遺構に帰属するものと仮定して第I期・第II期とおきかえると、第I期と考えられるものが住居7軒・土坑6基、第II期と考えられるものが住居4軒・土坑1基、時期不明のものが住居3軒・土坑6基となる

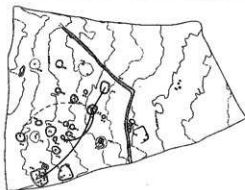
(第51表第106図)。

一方、石器や土器の接合関係からみた遺構の結びつきはどうだろう(第104図)。J-2とJ-3、J-2とと大形住居のJ-14、J-2とD-6では、硬質頁岩の剥片どうしの接合関係がみられる。これをそれぞれの遺構の石材あるいは素材の分有といった点で考えれば、四者の共存の想定が可能である。また、J-2とJ-7では土器破片の接合がみられるが、両住居が共時の廃棄空間であった可能性も想定できる。

以上をふまえると、本集落には土器形態からみて連続する2段階以上の変遷が想定されること、石器等の接合関係からみて大形住居

第51表 遺構の主体となる土器群(I・II)

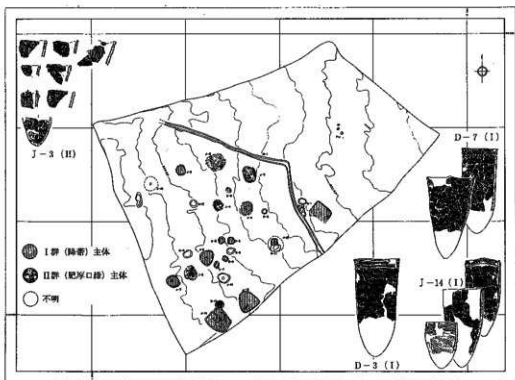
	I 口縁に低隆帯を有する	II 肥厚口縁	不明
住居	J-1, J-2, J-7, J-9, J-13, J-14, J-5?	J-3, J-4, J-6, J-8?	J-10, J-11 J-12
土坑	D-3, D-4, D-8, D-7, D-9, D-15?	D-10,	D-1, D-2 D-5, D-8 D-12, D-13



第104図 石器(実線)と土器の接合関係



第105図 下弥堂遺跡の集落景観（想像図）

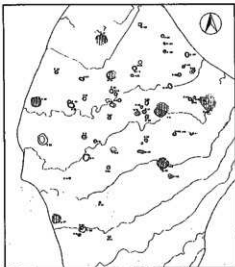


第106図 土器群の遺構別分布

1軒と中・小形住居3軒程度の同時存在性を少なくとも予測できるだろう。

こうしたこともふまえ、本遺跡の同時期における集落構成を想定する場合、大形住居を含めた3～5軒程度の住居と数基の土坑で構成される集落モデルを一案として提出できるだろう。そうした場合、段階的には3段階程度の変遷を考えておくことが妥当といえようか。

ところで、本遺跡の住居と土坑の位置関係を見た場合、尾根上地形のより外縁部に住居が位置し、より内側に土坑が存在する傾向がうかがえる。おそらく数軒の住居にゆるやかに取り込まれた広場に土坑が配されていたものと考えられる。本遺跡と隣接す



第107図 塚田遺跡前期初頭の住居(網)と土坑

る当該期の塚田遺跡においてもこれとほぼ同様な集落景観を描くことができるだろう(第107図)。

さて、本遺跡では住居数軒程度から構成される集落像が描かれたが、問題は、当該期にあって多数の住居が同時に林立する大規模集落、あるいは拠点集落といわれるものが存在したか、という点にもあろう。

1993年夏に調査された塩尻市矢口遺跡は、多数の住居のまとまった当該期の環状集落として新聞報道で話題を呼んだ。しかし調査担当者の小松学氏のご教示から推測する限りでは、住居が数軒程度の時期別構成に分割されてしまう可能性がある。集落景観についても配置の整った環状というよりは、「数軒の住居とそれに取り込まれた広場に土坑が群在していた」状況を考へておくことが妥当であるようだ。

縄文時代全般を通じて(大規模)環状集落それ自身の認識にいくつか疑問点が投げかけられている今日でもあるが、矢口遺跡の集落構造については詳しい報告を待つことにしたい。

以上、住居数軒程度と土坑群からなる構成が、当該期の平均的な集落景観と想定される。加えてそうした構成をみせる集落の、数家族からなる構成員は、幅をもたせて20～30名未満と推定されよう。当該期の単位集団の平均的なサイズには、おそらくこの程度を越えない員数を予測しておくことが妥当かと思われる。

(5) 居住パターンと生活領域

下弥堂遺跡を中心として縄文前期初頭の集落のあり方を考えてみた。次にまず、当地域の縄文集落の様相を通時的に垣間見ておくことにしよう。

まず、早期では、押型土器や条痕文系土器群など尖底深鉢形土器が遺跡から出土するが、これに伴う土坑はあるものの、住居は、望月町の新水遺跡を唯一例外として確認されていない。これは、恐らく早期の住居構造がより簡素で、通常、遺跡に遺存しにくいことを示している。

続く前期初頭（当該期）は、縄文系尖底深鉢形土器がみられる時期である。確認される住居の多くは、浅い壱穴で、規則的な柱穴配置をもたず、小形不整形で定形化しておらず、床面もさほど締まらず、炉は無いが、地床炉で、石囲炉は持たない。集落は数軒程度の住居と土坑から構成される場合が一般的であったと考えられる。

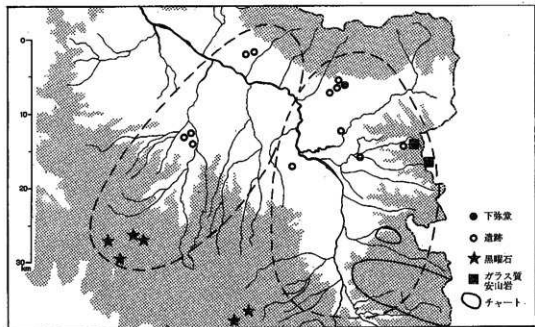
前期中葉（関山期）においては、住居が隅丸方形に定型化し、規則的な柱穴配置をみせ、住居内に石囲炉が付設される。集落は住居数軒程度か。土器は平底化するとともに装飾性が増す。一方で、黒曜石の動きなどにもみるように集団連鎖の緊密化の様相も窺える時期である。

中期中葉（焼町期）では、住居は円形を呈し、規則的な柱穴配置をみせ、その掘り込みが深いものも多い。また屋内の石囲炉は石を多めに使いきっちりともまれており、床面はかなり締まるものも多い。集落としては住居の群集の度合いが増す。土器は著しいデコレーションのものが多く、使用後大量の廃棄がなされる。住居の内外にナッツ類などの貯蔵用の土坑をもつ。

中期後葉では敷石住居が普遍化し、後期では配石墓や配石祭祀遺構など不動構築物が発達をみせる。祭祀が顕在化してくる時期である。

以上、時期を追うごとの居住の変化をみてみた。ここで問題となるのはその変化の中身である。その流れの一部に、より今日的な論題である季節的居住から通年居住への変化をみてとることも不可能ではあるまい。逆にこの傾向をただ単に「居住の安定化」という言葉でくくってしまったのでは、もはや議論の進む余地はないだろう。これは想定にすぎないが、そうした立場に立って、ここでみた居住様相の変化を考えると、おそらく季節的居住がありえた段階は、住居の構造が簡素で集落内にも長期的居住の痕跡を見だしにくい前期初頭と考えられる。しかし続く前期中葉においては、住居の構造の安定化がみられ、居住の質的な変化、すなわち通年居住の一般化も予測できるのかもしれない。あるいは土器の平底化も居住の長期化とまったく無関係ではあるまい。住居構造が安定し、運搬不可能な大形土器を含めて多くの土器が作られ、貯蔵穴が設けられ、使用後の土器の大量廃棄がみられる中期段階には、少なくとも数年以上におよぶ長期的な居住が確立したものと考てみたい。

ところで、狩猟採集民の居住生業戦略を民族誌に基づいて類型化したピンフォードは、そのタイプをフォレジャーとコレクターの二者に分けている。フォレジャーは食料資源のある場所に頻々と集落を移し貯蔵をせずに生活するブッシュマン等の狩猟採集民、コレクターは季節的な定住集落をもとに食料獲得を行ない食料貯蔵をおこなうエスキモー等の狩猟採集民である。そこでは定住の度合いはコレクターにおいて増すが、コレクターといえども通年居住をなさない点が指



第108図 前期初頭の遺跡・資源（石材）分布と集団領域の推定（点線）

摘されている。なお、フォレジャーは低緯度地域で比較的資源が偏らないない地域の狩猟採集民、コレクターは資源が季節的あるいは場所的に偏る地域の狩猟採集民である (Binford 1980)。

羽生はこうしたモデルに着目しつつ、関東・中部地方の諸磯期の集落の石器組成を分析するなかで、その組成が地域ごとに偏りをみせることから、居住本拠地（レジデンシャル・ベース）に季節的移動があったことを想定し、諸磯期の集団の行動類型がコレクターのモデルに類似することを説いている（羽生1993a・1993b）。

こうしたことをふまえるかぎりでは、少なくとも縄文前期までは季節的移動を伴う居住形態がありえたことも射程にいれつつ、集落論を展開する必要があるだろう。むろん、定住＝安定、移動＝不安定（漂泊）といったイメージは是正されるべきでもある。むしろ季節的に偏る資源を効率よく活用するには、移動を伴う居住がより有効な場合があることも認識すべきである。それにしても致命的なのは、集落における居留時間を計りうる方法論上の時計を、考古学者が勝ちえていないことにもあろう。

さて、もし仮に、下弥堂の集落を残した人々が季節的な移動を行っていたとすると、当然その移動先や移動領域があったはずである。さきにみたように下弥堂に住んだ人々の主な石材獲得地帯が千曲川右岸の25km圏内の山地にあったことも考えあわせると、彼らの生産獲得活動を支える移動領域は千曲川の上流に沿ってのびていた、と考えておくことも可能であろう。一方で黒曜

石入手の低調さから、黒曜石原産地を取り込んだ依田川水系はその領域からはずれていたことも想定されうるところである。

ところで、縄文時代の集団の領域については、前期関山期の特定住居形態の分布から、30~60 kmを移動領域とした小栗の見解がある(小栗1991)。また、谷口の推定する縄文中期後半の集団領域(集団が年間を通じて資源開発を行なう占有テリトリー)は半径およそ5 km弱である。赤沢の描く遺跡テリトリーも半径5 km未満である(赤沢1983)。一方、かつてヴィタ=フィンジやヒッグスらは、クン・ブッシュマンの民族誌に基づいて、先史狩猟民の日常の食料調達領域を半径10km・歩行距離2時間以内の範囲と仮定した経過がある(Vita-Finzi, Higgs 1970)。

環境という変数は、集団領域の均一的な措置を阻んでいるが、それにしても下弥堂の集団が用いたチャートの入手地域は想定しうる日常領域とはやや距離を開く感がある。そうした場合ひとつの可能性として、本遺跡に持ち込まれたチャートは季節的移動のスケジュールに埋め込まれて入手された可能性もあったことが想定されよう。

下弥堂に住んだ縄文人たちは、浅間南麓や佐久地方東部の山地をテリトリーとして狩猟採集活動をおこない、あるいはその領域内において季節的に住居を移した。その行動領域の中からガラス質安山岩や硬質頁岩・チャート等の石器石材を入手した。また、僅かだが隣接する集団から黒曜石が入手され、異系統土器(東海系薄手土器)も他地域の集団との直接的・間接的なコミュニケーションによってもたらされることがあったのだろう。

引用参考文献

赤沢威 1983 『狩猟採集民の考古学』

小栗一夫 1991 『住居型式』論からの視点 東京都埋蔵文化財センター『研究論集』X

谷口康浩 『縄文時代集落の領域』『季刊考古学』44

茅野市教育委員会 1986 『高風呂遺跡』

東部町教育委員会 1982 『真行寺遺跡』

東部町教育委員会 1988 『鍛冶屋遺跡』

長門町教育委員会 1984 『中道遺跡』

羽生淳子 1993a 『縄文文化の研究に民族誌はどう役立つか』『新視点日本の歴史1』

羽生淳子 1993b 『集落の大きさと居住形態』『季刊考古学』44

渡辺仁 1990 『縄文式階層化社会』

Binford, L.R. 1980 Willow smoke and dogs' tails: *American Antiquity* 45

Vita-Finzi, C. and Higgs E.S. 1970 Prehistoric economy in the Mount Carmel area of Palestine: *Proceedings of the Prehistoric Society* 36.

6 炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定報告

バリノサーヴェイ株式会社

(1) はじめに

下弥堂遺跡は、浅間山南麓の細長い尾根上に位置する。浅間山南麓地域は、浅間山から噴出した火砕流や軽石流堆積物に広く覆われているが、本遺跡が位置する付近は軽石期に噴出した小諸第2軽石流の堆積物に覆われている。(荒牧, 1933)。

本遺跡では、発掘調査により縄文時代前期初頭の竪穴住居址や土坑が検出され、同時期の尖底土器が出土している(御代田町教育委員会, 1992)。このうち、J-2およびJ-14号住居址からは、住居構築材とも考えられる炭化材が検出された。またD-4号土坑(集石)からは、燃料材とも考えられる炭化材が検出された。今回の分析調査では、これらの炭化材について樹種同定を実施し、その樹種を明らかにする。同時に、各遺構の時期を確認するために、放射性炭素(^{14}C)年代測定を実施する。本地域周辺では、これまでに多くの遺跡で住居構築材の樹種同定が行われてきた(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1988a, 1988b, 1989a, 1989b, 1989c, 1991, 1992)。しかし、これらの時代・時期は、弥生時代末から平安時代であり、今回のような縄文時代の住居構築材と考えられるものについて樹種同定を行った例は知られていない。住居構築材については、各時代でその樹種構成が異なることも指摘されており(千野, 1991)、今回の試料は本地域の住居構築材の変化を知る上でも重要な資料となることが期待される。

(2) 試料

試料は、縄文時代前期初頭の2軒の竪穴住居址(J-2, 14)および集石(D-4)から検出された炭化材6点(Na1~6)である。竪穴住居址の炭化材は住居構築材、集石の炭化材は燃料材とも考えられている。これらの炭化材を試料として、樹種同定を6点全点について実施し、放射性炭素年代測定はNa1, 3, 4, 6の4点について実施する。

(3) 方法

放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室の協力を得た。

樹種同定

試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の断面を製作し、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

(4) 結 果

年代測定結果および樹種同定結果を第52表に示す。炭化材は、コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種もしくはクリ近似種に同定された。コナラ節とクリの主な解剖学的特徴や現生種の一般的性質を以下に記す。なお、学名は「原色日本植物図鑑 木本編くII」にしたがい、一般的性質については「木の事典 第2巻, 第4巻」(平井1979, 1980)も参考にした。

第52表 炭化材同定結果および年代測定結果

番号	試料名	樹種名	年代測定結果		Code No
1	J-2・87	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	10,430±690	8480B.C.	Gak-17323
2	J-14・259	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種			
3	J-14・260	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	8,890±420	6940B.C.	Gak-17324
4	J-14・262	クリ近似種	7,940±300	5990B.C.	Gak-17325
5	J-14・345	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種			
6	D-4	クリ近似種	7,030±120	5080B.C.	Gak-17326

*放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5570年を使用した。

樹種

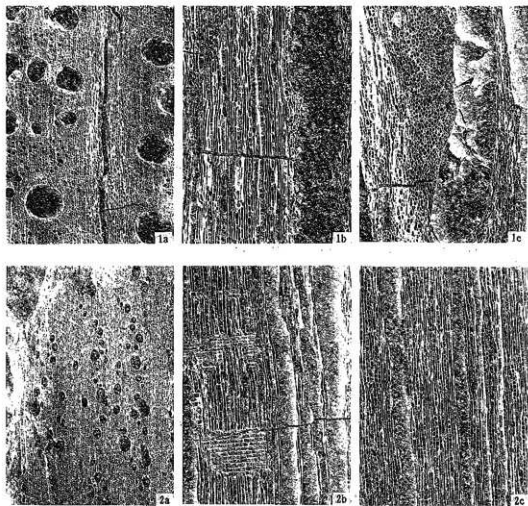
コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus subgen. Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科

試料番号: Na 1-3, 5

環孔材で孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものとの複合放射組織とがある。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドリンク)が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehd. et Wilson)、コナラ (*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ (*Q. aliena* Blume)、カシワ (*Q. dentata* Thunberg) といくつかの変種を含む。モンゴリナラは北海道・本州(丹波地方以北)に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樺材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima* Carruthers) に次ぐ優良材である。



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (No 5)

2. クリ近似種 (No 4)

a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

第109図 炭化材の顕微鏡写真

クリ近似種 (cf. *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

ブナ科

試料番号: No. 4, 6

環孔材で孔面は1~4列、孔面外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。年輪界は明瞭。

クリの木材組織はコナラ節と酷似し、細片の試料ではクリかコナラ節かの判定は難しい。今回の試料はいずれも細片で、1点は晩材部の部分しか観察できなかつた。そのため、クリと断定することはできず、近似種とした。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材などの用途が知られている。

(5) 考 察

年代測定の結果、 $10,430 \pm 690$ y.B.P (Gak-17323) から 7030 ± 120 y.B.P (Gak-17326) の範囲の値が得られた。即知の資料(日本第四紀学会ほか編, 1992)によれば、これらは縄文時代早期にはほぼ相当し、遺物から推定される遺構の年代よりも古いものである。その原因は今のところ明らかではないが、今後資料を蓄積し、さらに検討するべき課題であろう。

縄文時代の構築材とも考えられる5点は、コナラ節4点、クリ近似種1点であった。住居構築材については、これまでに多くの遺跡で樹種同定が行われている。それらの結果では、縄文時代はクリが比較的多く、弥生時代以降はクヌギ節・コナラ節が多くなる傾向が認められる(千野1983, 1991)。今回の結果は、本地域では縄文時代においてコナラ節が多用されていたことを示唆する。また、近接する細田遺跡(弥生時代末)や塚田遺跡(古墳時代初頭)から検出された構築材の樹種同定結果と類似することから、縄文時代前期から古墳時代まで構築材の樹種構成に変化がなかったことが推定される。本地域で、住居構築材の樹種構成に変化がみられない背景として、構築材の樹種構成と密接な関係があると推定される遺跡周辺の植生に変化がなかった可能性がある。しかし、今回の調査で同定した点数は5点であり、縄文時代の樹種構成を把握するためには今後さらなる資料蓄積が必要である。

燃料材と考えられるものは、クリ近似種であった。集石から出土する燃料材の樹種には、クリが多いことが指摘され(千野, 1983)、南関東を中心に報告例も多い。今回の結果もこれまでに得られた傾向と調和的といえるが、試料がクリと断定できないこと、住居構築材の樹種構成が他地域とは異なること、同定点数が1点であること等から、集石にクリを選択して使用していたとは断定できない。住居構築材と同様に、今後さらに資料の蓄積を行っていく必要がある。

引用文献

- 荒牧重雄(1993) 浅間火山地質図, 8p., 地質調査所。
平井信二(1979, 1980) 木の事典 第2巻, 第4巻, かなえ書房。
北村四郎・村田 源(1979) 原色日本植物図鑑 木本編<II>, 545p., 保育社。
御代田町教育委員会(1992) 細田・下弥堂・塚田・下荒田遺跡 一塩野遺跡群一発掘調査概要報告書, 62p。
日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫編(1992) 図解・日本の人類遺跡・242p., 東京

大学出版会。

- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1988a) 十二遺跡出土炭化材の樹種同定。「鋳師屋遺跡群 十二遺跡 —長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書—」, p.393-399, 御代田町教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1988b) 鋳師屋遺跡出土炭化材同定。小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集「鋳師屋遺跡群 鋳物師屋 —長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書—」, p.116-117, 小諸市教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1989a) 根岸遺跡出土炭化材の樹種同定。「長野県北佐久郡御代田町御代田所在 鋳師屋遺跡群 根岸遺跡発掘調査報告書」, p.291-293, 御代田町教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1989b) 和田原遺跡出土炭化材同定。小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集「和田原遺跡群 鎌田原 —長野県小諸市和田原・鎌田原遺跡発掘調査報告書—」, p.83-88, 小諸市教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1989c) 広畑遺跡出土炭化材の樹種同定。「広畑遺跡 —長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書—」, p.35-40, 御代田町教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1991) 関口A・B遺跡出土炭化材の樹種同定。小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集「関口A・関口B・柏原遺跡群下柏原 —長野県小諸市関口A・関口B・下柏原遺跡発掘調査報告書—」, p.245-254, 小諸市教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告。佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集「国道141号線関係遺跡 長野県佐久市長土呂国道141号線関係遺跡発掘調査報告書(本文編) 芝宮遺跡群下芝宮遺跡I・II・III・IV、芝宮遺跡群上高山遺跡、周防畑遺跡群下北原遺跡、近津遺跡群上宮原遺跡、下蟹沢遺跡、長土呂遺跡群上大林遺跡、長土呂遺跡群下聖端遺跡I・II」, p.355-391, 佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財センター。
- 千野裕道 (1983) 縄文時代のクリと集落周辺植生 —南関東地方を中心に—。東京都埋蔵文化財センター研究論集II, p.29-42。
- 千野裕道 (1991) 縄文時代に二次林はあったか —遺跡出土の植物性遺物からの検討—。東京都埋蔵文化財センター研究論集X, p.215-249。

7 C¹⁴年代の測定結果について

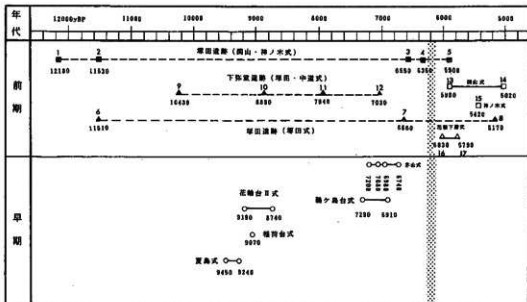
下弥堂遺跡においては、前期初頭（塚田・中道式期）の竪穴住居出土の炭化材3点・土坑出土の炭化材1点についてC¹⁴年代測定を実施した。その測定結果に若干のコメントを加えておく。

第1図の9～12は、前期初頭（塚田・中道式期）の測定年代の分布である。その幅は10430～7030yBPにおよぶ。ちなみに前期初頭（塚田・中道式並行期）の花積下層式の年代は、関東の下組貝塚のC14年代が6030±135yBP(16)、幸田貝塚が5790±140yBP(17)、加えて縄文前期の平均的年代幅は6100～4700yBP（武蔵・キーリ1982）となっており、そのあたりの数値を平均的に考えると、いずれもかなり古めの年代といえそうである。

また、6～8は隣接する塚田遺跡の前期初頭（塚田式期）の測定年代の分布である。その幅は11510～5170yBPにおよんでいる。さきの縄文前期の一般的な年代を参考にすると、6の数値はきわめて古く、7はやや古く、8はやや新しい年代となっているといえる。

参考文献

キーリ.C.T・武藤康弘 1982 「縄文時代の年代」 『縄文文化の研究』 1



第110図 C¹⁴年代の分布

8 下弥堂遺跡出土石器の石材産地分析

京都大学原子炉実験所
薬科哲男 東村武信

(1) はじめに

自然科学的手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている。

サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の手続きも簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

本稿では下弥堂遺跡出土の縄文前期初頭の3個の安山岩、サヌカイト製遺物の産地分析の結果が得られたので報告する。

(2) サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。

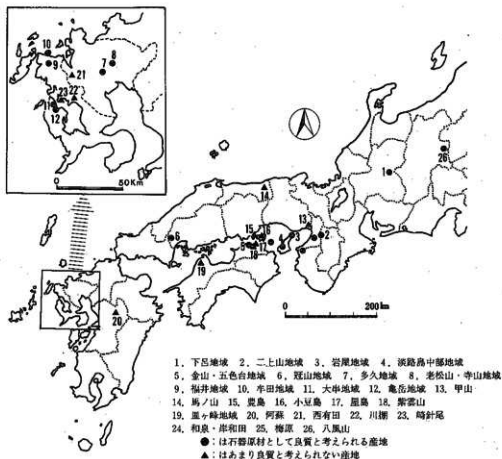
サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて31ヶ所の調査を終えている。図111にサヌカイトの原産地の地点を示す。サヌ

カイトおよびガラス質安山岩など元素組成で分類し39個の原石群を作り、その結果を第53表に示した。

(3) 結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して推定を行なった。一方黒曜石製のは風化に対して安定で、表面に薄い水合層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。

今回分析した遺物の結果を第54表に示した。



第114図 サヌカイトの原産地

第53表 各サマサイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原 産 地 名	分析 試料 番号	K/Ca X±σ	Ti/Ca X±σ	Mn/Sr X±σ	Fe/Sr X±σ	Rb/Sr X±σ	Y/Sr X±σ	Zr/Sr X±σ	Nb/Sr X±σ	Al/Ca X±σ	Si/Ca X±σ
秋保系	夏船山 42	0.194±0.017	0.300±0.026	0.019±0.014	0.150±0.152	0.006±0.026	0.005±0.014	0.406±0.051	0.030±0.016	0.012±0.021	0.113±0.023
	八風山 43	0.272±0.026	0.326±0.033	0.030±0.006	0.593±0.065	0.134±0.039	0.000±0.009	0.561±0.033	0.018±0.009	0.018±0.005	0.009±0.014
神奈川系	大行寺 45	0.070±0.005	0.205±0.003	0.103±0.000	12.406±0.332	0.023±0.006	0.113±0.008	0.483±0.023	0.036±0.007	0.012±0.001	0.112±0.001
	下島 46	0.176±0.005	0.327±0.011	0.026±0.001	0.705±0.025	0.277±0.020	0.231±0.013	0.566±0.026	0.023±0.009	0.022±0.000	0.009±0.005
伊豆系	下島山 51	0.200±0.017	0.315±0.008	0.071±0.006	0.129±0.270	0.303±0.012	0.006±0.008	0.020±0.009	0.036±0.010	0.016±0.001	0.164±0.001
	加茂山 52	0.094±0.023	0.285±0.025	0.025±0.004	1.002±0.146	0.206±0.027	0.005±0.010	0.766±0.025	0.028±0.010	0.023±0.001	0.104±0.001
八幡系	岩屋第一 53	0.813±0.024	0.349±0.011	0.076±0.006	0.730±0.190	0.383±0.019	0.050±0.013	0.406±0.020	0.813±0.031	0.039±0.002	0.374±0.010
	岩屋第二 54	0.520±0.018	0.252±0.001	0.030±0.001	0.640±0.200	0.272±0.118	0.006±0.010	1.066±0.207	0.642±0.016	0.026±0.001	0.272±0.001
	岩屋第三 55	0.200±0.017	0.254±0.003	0.020±0.007	2.350±0.261	0.170±0.012	0.061±0.013	0.574±0.021	0.813±0.007	0.018±0.001	0.219±0.001
片貝系	田中台 56	0.430±0.034	0.284±0.006	0.027±0.004	0.612±0.210	0.208±0.023	0.043±0.012	0.013±0.017	0.601±0.023	0.022±0.001	0.164±0.011
	大石 57	0.165±0.016	0.294±0.004	0.027±0.003	0.710±0.126	0.308±0.018	0.043±0.015	0.009±0.018	0.640±0.010	0.022±0.002	0.165±0.011
	田中台 58	0.520±0.015	0.252±0.005	0.027±0.001	2.589±0.191	0.125±0.013	0.069±0.016	1.042±0.017	0.647±0.010	0.026±0.002	0.250±0.007
	田中台 59	0.200±0.008	0.255±0.003	0.026±0.001	0.602±0.163	0.272±0.118	0.037±0.013	1.149±0.031	0.640±0.010	0.022±0.001	0.172±0.004
	金山 60	0.466±0.011	0.315±0.003	0.062±0.004	0.811±0.119	0.208±0.016	0.050±0.015	1.176±0.026	0.622±0.017	0.026±0.001	0.210±0.001
中央系	岩屋 61	0.403±0.040	0.230±0.006	0.022±0.001	2.294±0.114	0.404±0.020	0.006±0.011	0.700±0.044	0.642±0.011	0.020±0.001	0.409±0.010
	基ノ山 62	0.340±0.047	0.170±0.008	0.011±0.001	0.618±0.013	0.302±0.020	0.010±0.003	0.177±0.010	0.026±0.001	0.011±0.001	0.111±0.001
北高系	野宮 63	0.451±0.021	0.485±0.014	0.040±0.004	3.222±0.104	0.134±0.009	0.010±0.009	0.462±0.013	0.166±0.010	0.025±0.002	0.311±0.005
	野宮山 64	0.213±0.049	0.363±0.021	0.019±0.001	1.607±0.060	0.309±0.020	0.003±0.003	0.300±0.020	0.823±0.008	0.021±0.001	0.171±0.001
霞見系	多々第一 65	0.434±0.053	0.305±0.010	0.008±0.000	0.476±0.204	0.597±0.028	0.008±0.017	0.013±0.010	0.227±0.019	0.026±0.002	0.317±0.010
	多々第二 66	0.894±0.020	0.301±0.010	0.070±0.001	0.720±0.210	0.059±0.010	0.001±0.010	0.604±0.021	0.556±0.020	0.030±0.001	0.210±0.010
	多々第三 67	1.105±0.130	0.300±0.020	0.009±0.000	0.746±0.201	0.702±0.021	0.002±0.010	0.011±0.010	0.203±0.010	0.020±0.001	0.411±0.001
	老長山 68	0.718±0.020	0.304±0.010	0.074±0.007	0.709±0.241	0.620±0.028	0.008±0.010	0.009±0.010	0.111±0.020	0.026±0.002	0.243±0.010
	野宮山 69	0.520±0.045	0.230±0.011	0.079±0.005	0.130±0.200	0.076±0.010	0.071±0.010	0.020±0.010	0.102±0.010	0.022±0.001	0.272±0.010
	野宮山 70	0.403±0.010	0.211±0.005	0.008±0.010	7.440±0.249	0.207±0.020	0.010±0.010	0.009±0.010	0.100±0.010	0.021±0.001	0.272±0.010
	野宮山 71	0.380±0.047	0.285±0.023	0.077±0.005	3.370±0.212	0.103±0.022	0.000±0.012	0.721±0.041	0.640±0.011	0.020±0.001	0.374±0.010
高崎系	大 72	1.111±0.110	0.287±0.000	0.005±0.000	4.050±0.226	0.226±0.040	0.041±0.010	0.602±0.020	0.620±0.020	0.020±0.001	0.517±0.010
	丸 73	1.072±0.042	0.141±0.000	0.011±0.000	0.770±0.152	0.333±0.016	0.010±0.010	0.407±0.010	0.602±0.010	0.040±0.001	0.507±0.010
	丸 74	0.794±0.044	0.333±0.024	0.072±0.000	0.630±0.251	0.020±0.121	0.223±0.026	1.010±0.060	0.300±0.042	0.030±0.001	0.204±0.010
	丸 75	0.015±0.014	0.141±0.010	0.002±0.000	0.306±0.110	0.302±0.010	0.002±0.010	0.470±0.010	0.602±0.010	0.020±0.001	0.517±0.010
川原系	川 76	0.600±0.021	0.336±0.000	0.070±0.000	0.630±0.157	0.211±0.010	0.072±0.010	0.023±0.040	0.644±0.010	0.022±0.001	0.311±0.010
	川 77	0.380±0.047	0.285±0.023	0.077±0.005	3.370±0.212	0.103±0.022	0.000±0.012	0.721±0.041	0.640±0.011	0.020±0.001	0.374±0.010
	川 78	0.100±0.010	0.117±0.000	0.000±0.000	0.306±0.110	0.302±0.010	0.002±0.010	0.470±0.010	0.602±0.010	0.020±0.001	0.517±0.010
	川 79	0.240±0.045	0.200±0.007	0.030±0.001	0.720±0.227	0.004±0.020	0.274±0.027	0.071±0.041	0.637±0.010	0.030±0.001	0.100±0.006
野宮系	野宮第一 80	0.260±0.020	0.241±0.010	0.027±0.001	3.712±0.210	0.103±0.010	0.000±0.010	0.602±0.020	0.620±0.020	0.017±0.001	0.111±0.010
	野宮第二 81	0.030±0.120	0.200±0.000	0.011±0.001	5.400±0.206	0.108±0.020	0.071±0.010	0.009±0.010	0.600±0.020	0.020±0.001	0.200±0.010
藤本系	野宮第一 82	0.200±0.020	0.240±0.010	0.060±0.010	1.800±0.220	0.401±0.020	0.000±0.010	0.647±0.010	0.620±0.020	0.027±0.010	0.217±0.010
	野宮第二 83	0.474±0.037	0.404±0.020	0.060±0.001	0.607±0.441	0.209±0.021	0.000±0.010	0.647±0.010	0.620±0.020	0.027±0.010	0.217±0.010
野宮系	野宮第一 84	0.200±0.020	0.240±0.010	0.060±0.010	1.800±0.220	0.401±0.020	0.000±0.010	0.647±0.010	0.620±0.020	0.027±0.010	0.217±0.010
野宮系	野宮第一 85	0.200±0.020	0.240±0.010	0.060±0.010	1.800±0.220	0.401±0.020	0.000±0.010	0.647±0.010	0.620±0.020	0.027±0.010	0.217±0.010
野宮系	野宮第一 86	1.227±0.021	0.200±0.000	0.050±0.000	0.897±0.014	0.103±0.010	0.010±0.010	0.620±0.020	0.620±0.020	0.030±0.001	0.400±0.010

注：1. 平均値、σ：標準偏差値。 2. データ不足の場合、#。 3. 分析試料番号の末尾に「a)」は、Aoki, A., Kusumoto, S., Ogasawara, T. & Takano, T. (1984). 374 compilation of data on the K13 geochemical reference system AC-1 granulite and AC-1 basalt. Geochemical Journal Vol.8, 170-182.

第54表 下跡堂遺跡出土の安山岩製遺物の原産地推定結果

分析 試料 遺跡 遺物	時代 (伴出土器)	原産地 (確率)	判定	遺物品名 (備考)
34752 12. 下跡堂、SSY-J5.6	縄文前期初頭	八風山 (6%)	八風山	刺片
34753 13. #、SSY-J3.154	#	不明	不明	#
34754 14. #、SSY-J4.57	#	八風山 (1%)	八風山	#

第55表 下跡堂遺跡出土のサマサイト製遺物分析結果

試料 番号	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	元 素 比	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
34752	.244	.330	.090	5.260	.106	.110	.552	.017	.013	.131	
34753	1.431	1.316	.110	8.891	.388	.132	1.225	.075	.059	.816	
34754	.254	.333	.085	5.401	.102	.099	.538	.032	.013	.132	

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計を手法を用いて原石群との比較をする。ここでは多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²検定によって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

下弥堂遺跡より出土した遺物の産地推定の結果を第55表に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料の測定から原石試料と同じ測定精度で元素含有量を求めるには、測定時間を長時間掛けなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、1個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のパラツキの範囲を越え大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。

原産地(確率)の欄にマハラノビスの距離D²の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこのD²の値が原石群の中で最も小さなD²値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低い、その原産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。

今回、分析した下弥堂遺跡出土の3個の中では、産地が特定できなかった分析番号34753番を除く2個に八風産原石が使用されていることが明らかになった。

参考文献

- (1) 藁科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学, 8: 61-69
- (2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学, 10, 11: 53-81: 33-47
- (3) 藁科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16: 59-89
- (4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9: 77-90
- (5) 東村武信(1980), 考古学と物理化学。学生社

V 写真図版



浅間山麓に位置する塩野西遺跡群(1991.晩秋)

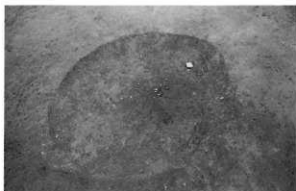


南方より下弥堂(右端)をのぞむ
下弥堂遺跡の縄文集落





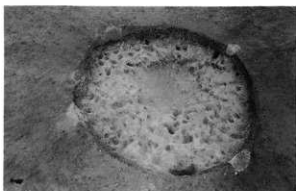
J-1号住居址



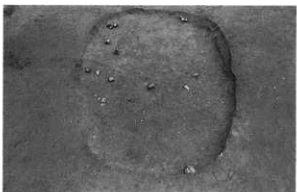
J-2号住居址



J-2号住居址床下土坑



J-2号住居址掘り方

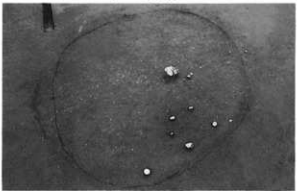


J-3号住居址



J-3号住居址掘り方

J-4号住居址



J-4号住居址掘り方





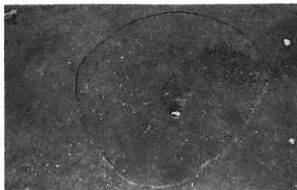
J-5号住居址



J-5号住居炉址



J-5号住居址掘り方



J-6号住居址

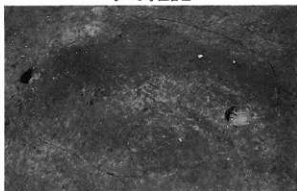


J-6号住居址掘り方

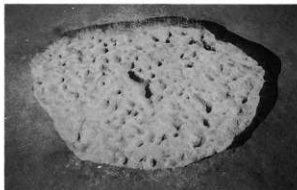


J-7号住居址

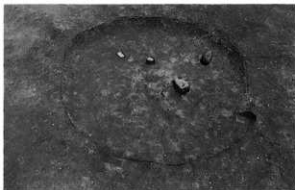
J-7号住居址掘り方



J-8号住居址



J-8号住居址掘り方



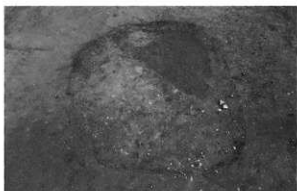
J-9号住居址



J-10号住居址



J-10号住居址掘り方



J-11号住居址



J-11号住居址掘り方

J-12号住居址



J-12号住居炉址





J-13号住居址



J-13号住居址炉址



J-13号住居址掘り方



J-14号住居址



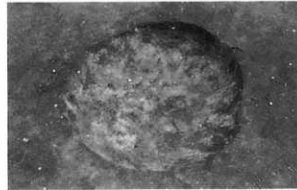
J-14号住居址掘り方



作業風景

D-1号土坑

D-2号土坑

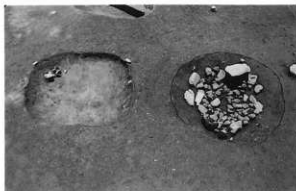




D-3号土坑



D-4号土坑



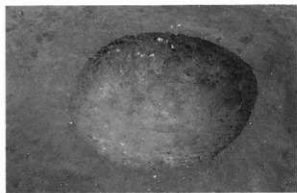
D-3・D-4号土坑



作業風景(D-4号土坑)



D-5号土坑



D-6号土坑

D-7号土坑

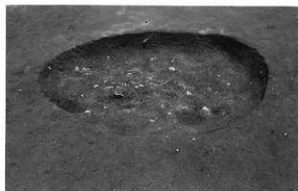


D-7号土坑遺物出土状態

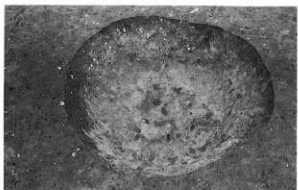




D-8号土坑



D-9号土坑



D-10号土坑



D-11号土坑(手前)



D-12号土坑



D-13号土坑

P-1号ピット群



M-1号溝状遺構





J-3·1



J-13·1



J-14·1



J-14·2



J-14·3



J-14·4



D-3·1



D-6·1



D-7·1

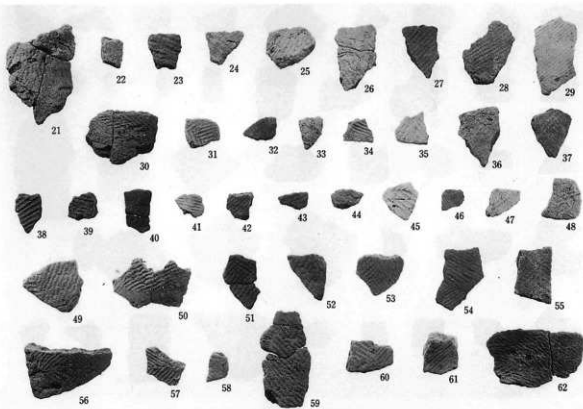
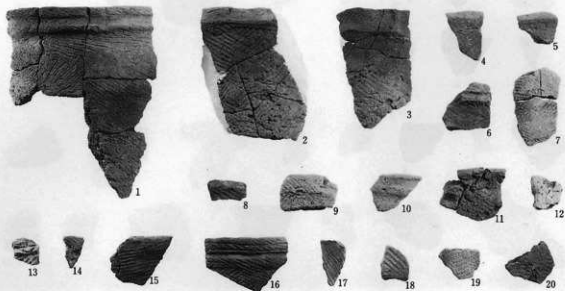


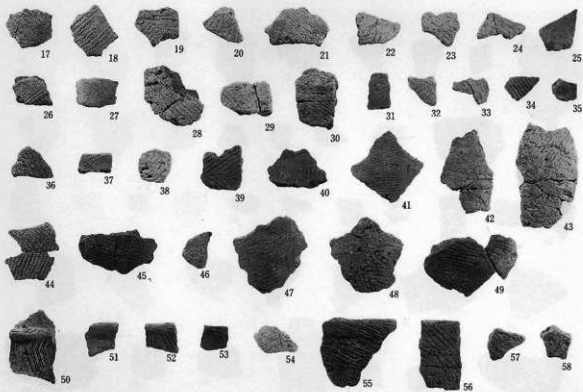
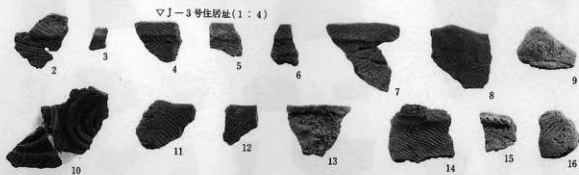
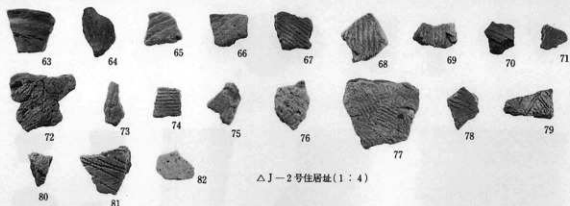
D-7·2



△J-1号住居址(1:4)

▽J-2号住居址(1:4)

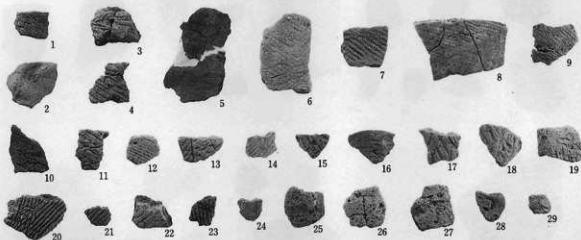






△J-3号住居址(1:4)

▽J-4号住居址(1:4)



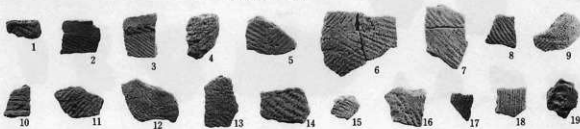
▽J-5号住居址(1:4)

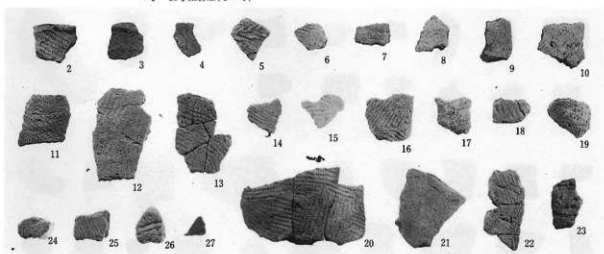
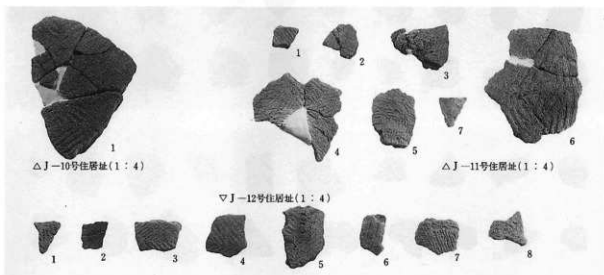
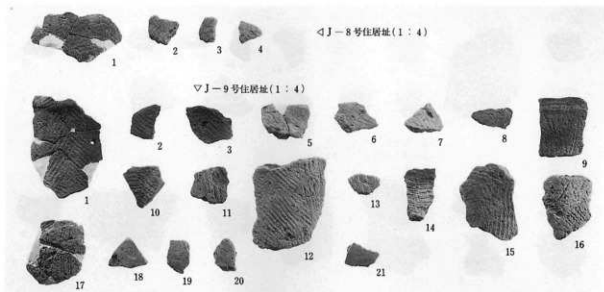


▽J-6号住居址(1:4)

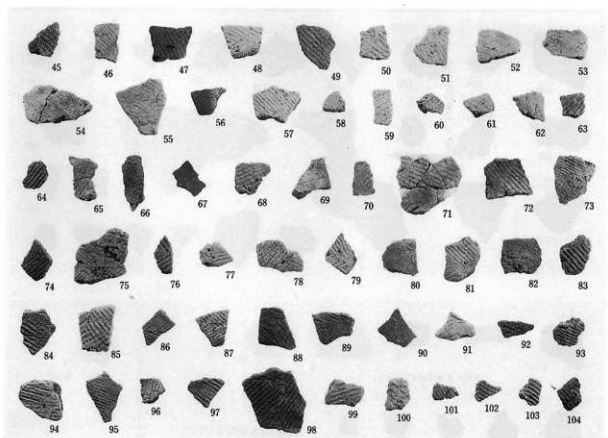
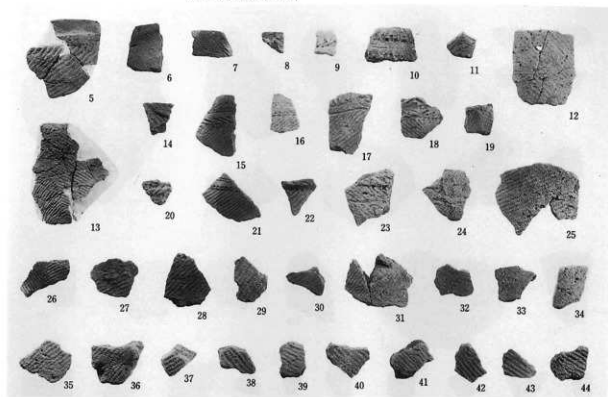


▽J-7号住居址(1:4)

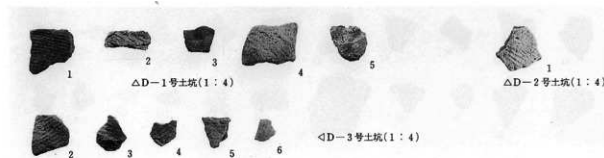
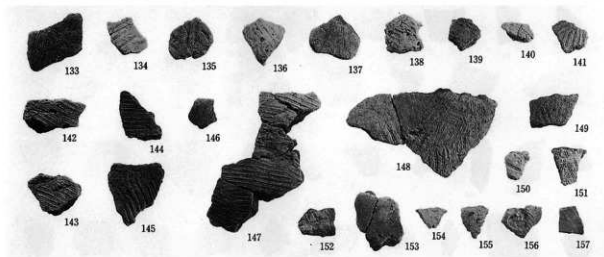
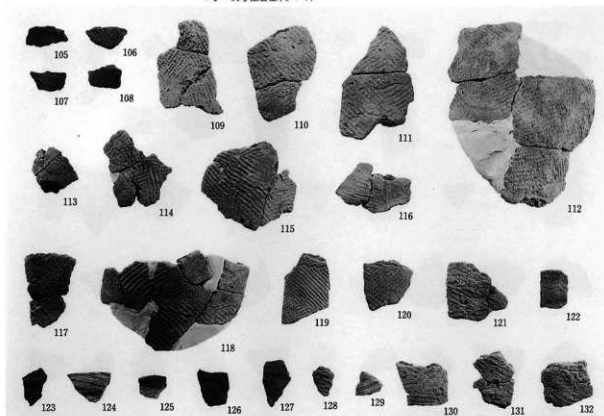




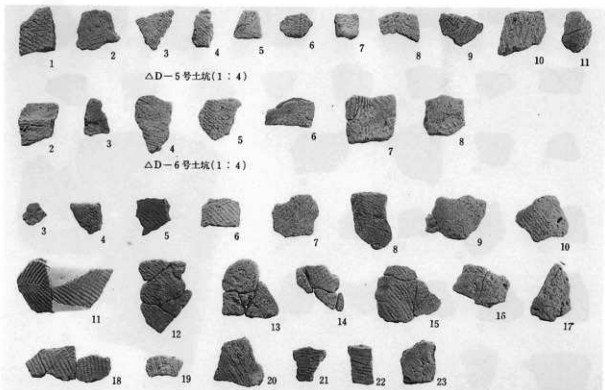
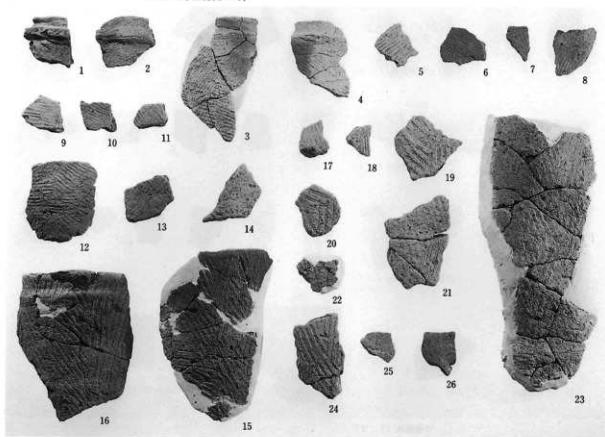
▽J-14号住居址(1:4)



▽J-14号住居址(1:4)



▽D-4号土坑(1:4)



△D-7号土坑(1:4)



△D-8号土坑(1:4)



△D-9号土坑(1:4)



△D-10号土坑(1:4)

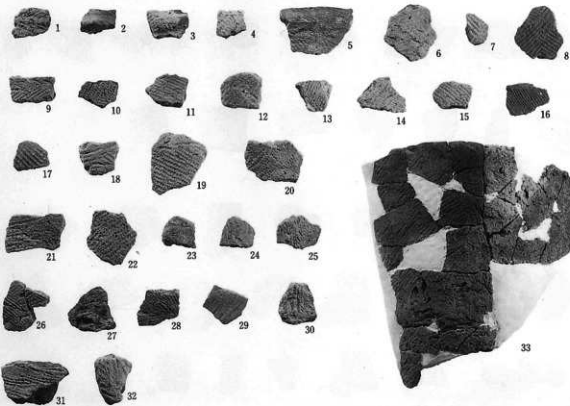


△D-12号土坑

△D-13号土坑

△D-15号土坑(1:4)

▽遺構外(1:4)





◁J-1号住层址(1:2)



△J-2号住层址(1:2)

▽J-3号住层址(1:2)



△J-4号住层址(1:2)

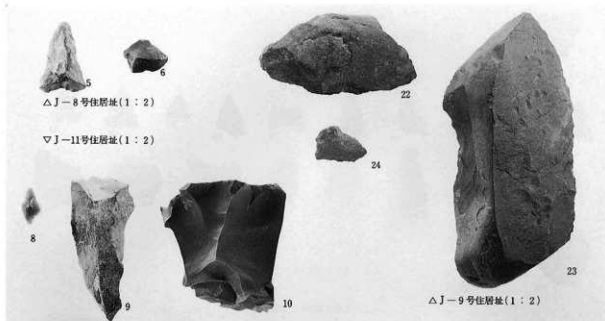
▽J-5号住层址(1:2)



▽J-6号住层址(1:2)

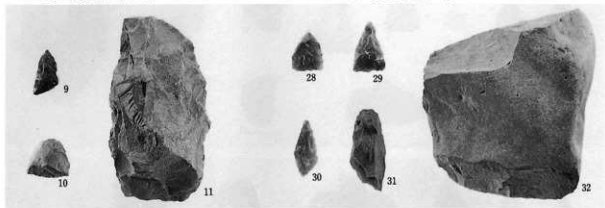


△J-7号住层址(1:2)

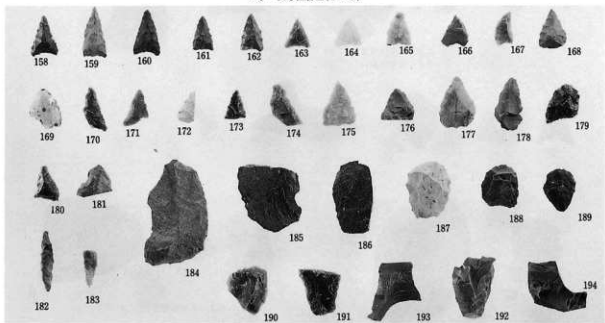


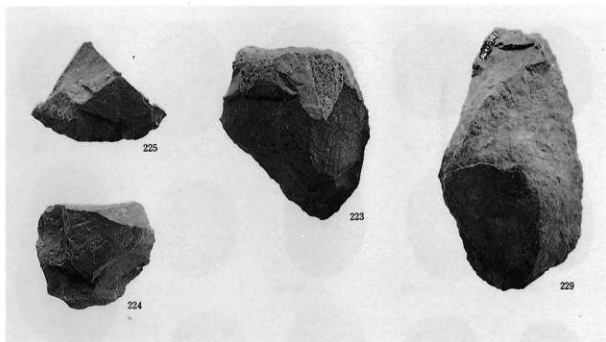
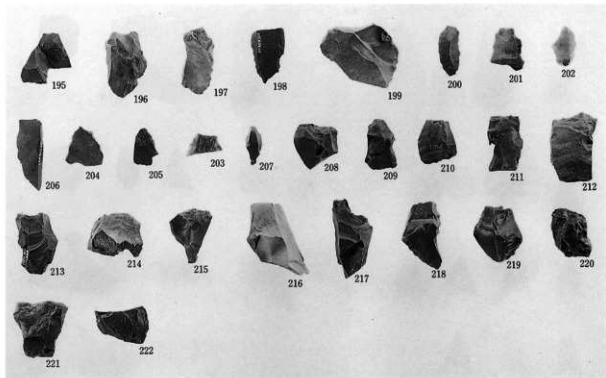
∇J-12号住居址(1:2)

∇J-13号住居址(1:2)

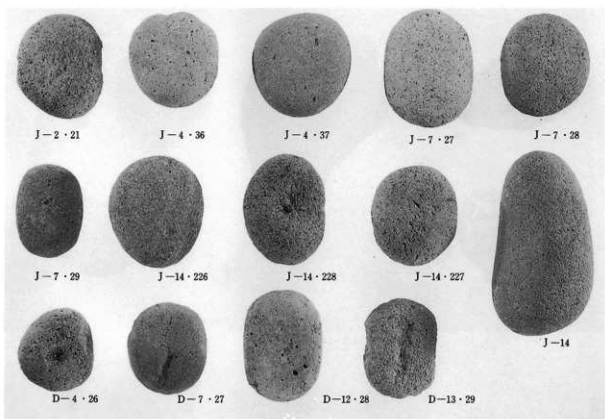
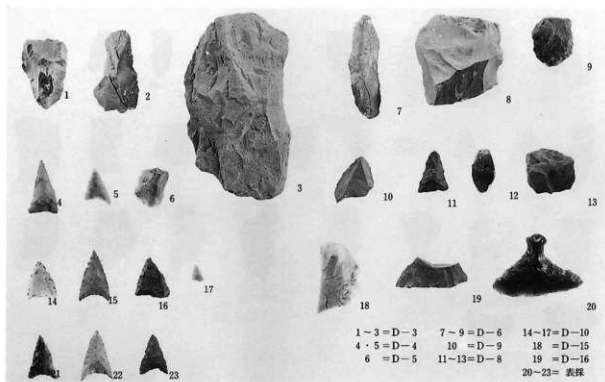


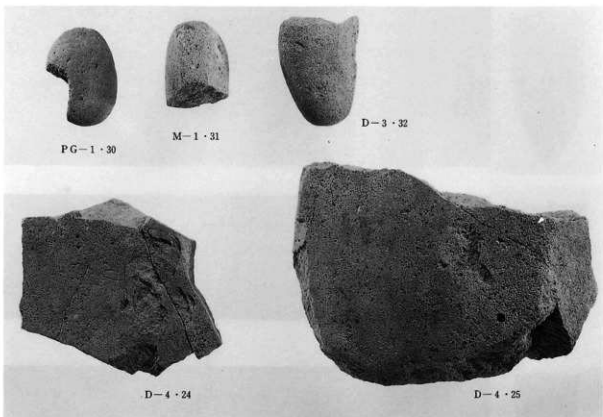
∇J-14号住居址(1:2)





△J-14号住居址(1:2)

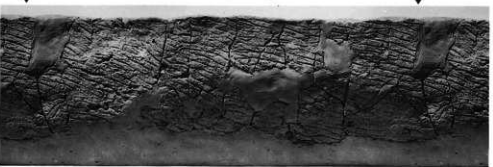
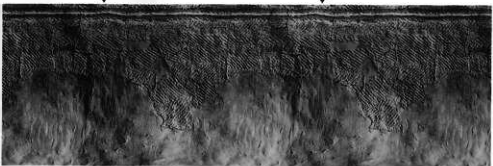
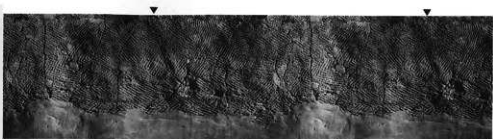




△調査風景

調査風景▷





報告書抄録

ふりがな	しもみどういせき							
書名	下弥堂遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 17 集							
編著者名	堤 隆							
編集機関	御代田町教育委員会							
所在地	〒 389-02 長野県北佐久郡御代田町大字御代田2464-2 TEL 0267 (32) 3111							
発行年月日	1994 年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
下弥堂	長野県北佐久郡 御代田町 大字塩野	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °	1992年 5月20日 ～ 同年 7月24日	4053㎡	圃場整備 事業に伴う 事前調査
1323	—	36度 19分 44秒	138度 29分 30秒					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下弥堂	集落址	縄文前期 初頭	竪穴住居址 12軒 土坑 16基 溝状遺構 1基 ピット群 1基	縄文尖底土器 石鏃 石匙 楔形石器 打製石斧 磨製石斧		○尖底土器をもつ前 期初頭の単純集落 ○前期初頭の土器編 年および集落研究 に関する貴重な資 料を提供した。		

御代田町の埋蔵文化財発掘調査報告書

- 第1集 御代田町教育委員会 1975 『馬瀬口下原古墳群』
第2集 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
第3集 御代田町教育委員会 1985 『宮平遺跡』 —遺構編—
第4集 御代田町教育委員会 1986 『大沼遺跡』
第5集 御代田町教育委員会 1987 『前田遺跡』
第6集 御代田町教育委員会 1988 『十二遺跡』
第7集 御代田町教育委員会 1989 『根岸遺跡』
第8集 御代田町教育委員会 1989 『広畑遺跡』
第9集 御代田町教育委員会 1990 『聖原II遺跡』
第10集 御代田町教育委員会 1991 『川原田・城之腰遺跡発掘調査概要報告書』
第11集 御代田町教育委員会 1992 『城之腰遺跡』
第12集 御代田町教育委員会 1992 『細田・下弥堂・塚田遺跡発掘調査概要報告書』
第13集 御代田町教育委員会 1993 『川原田遺跡』 —平安・中世編—
第14集 御代田町教育委員会 1993 『細田遺跡』
第15集 御代田町教育委員会 1993 『滝沢遺跡発掘調査概要報告書』
第16集 御代田町教育委員会 1993 『西駒込・東二ツ石・湧玉遺跡』
第17集 御代田町教育委員会 1994 『下弥堂遺跡』
第18集 御代田町教育委員会 1994 『塚田遺跡』
第19集 御代田町教育委員会 1994 『前藤部・聖原II・湧玉・清水平・上ノ屋敷遺跡』

下 弥 堂 遺 跡

長野県北佐久郡御代田町下弥堂遺跡発掘調査報告書

1994年3月25日 発行

田 集 御代田町教育委員会
発 行 御代田町教育委員会
印 刷 ほおずき書籍株式会社



1994

SIMOMIDO SITE EXCAVATION REPORT
Board of Education Town of MIYOTA